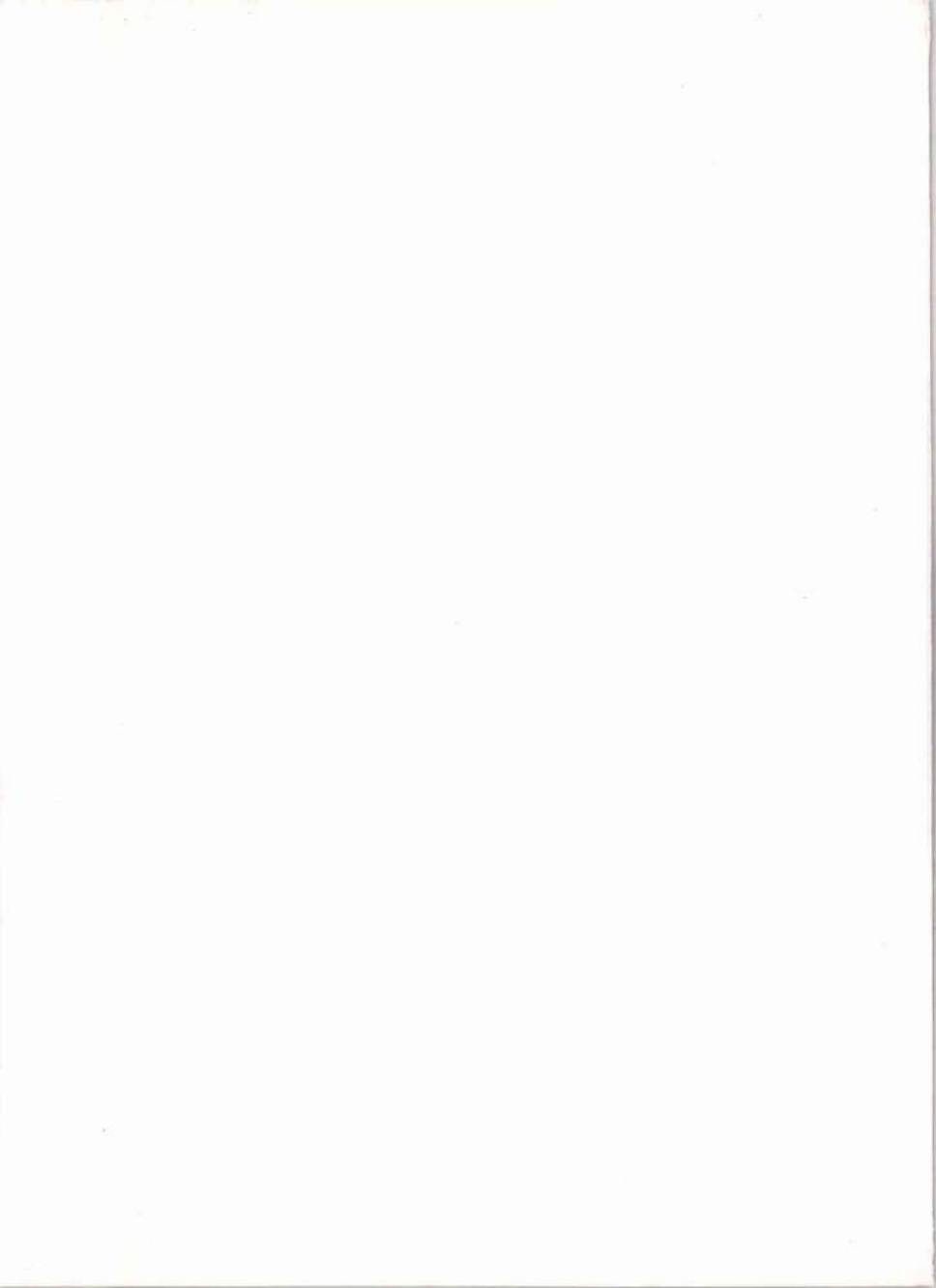
HEART NOVELS
モエかん
リニア編
Novels/館山 緑 × Illustration/無私天使
Original Work/ケロQ
ケロQ/有限会社ケロキュウ
HEART NOVELS
モエかん
リニア編
Novels
館山 緑
Illustration
無私天使
宙出版

館山 緑 Tateyama Midoli

2月14日生まれ。愛知県出身。近著に『落下症候群』小説版『おくさまは女子高生』①〜②、シナリオに「スレッドカラーズ　さよならの向こう側」などがある。
趣味は花見、月見、ガワ鑑賞に怖い話を堪能すること。読書。(実体験は含まず)よく聴く音楽はホラー映画&ゲームサントラ。どうやら一発芸が好きらしいことに最近気付く。最近のブームはご多分に漏れずガーリィリバイバル系。

無私天使 Mushitenshi

麻雀のついでに絵を描いてる人。
あとゲーム大好き。ちっちゃいこも好き。
将来の夢は孤島に洋館をたてて萌えっこと
悦楽の日々を送ること。
あたかもモエかんのような…。
http://www.ne.jp/asahi/ap2h/ponyoponyo/

COVER ILLUSTRATION/ケロQ

HEART♡NOVELS

モエかん
リニア編

Original Work/KeroQ
Novels/Tateyama Midoli
Illustration/Mushitenshi

館山 緑 Novels
無私天使 Illustration
ケロQ Original Work

Contents

モエかん～リニア編

登場人物
『モエかん～リニア編』

リニア

旧型のため廃棄処分になりかけたところを隷に救われ、訓練という名目で萌えっ娘島にやってきたメイド型アンドロイド。体のあちこちにガタがきており、比較的簡単な仕事も満足にこなすことができない。しかし、持ち前の明るさと純粋さで周囲の人間からは愛される。

神崎貴広
かんざき　たかひろ

この世の最果ての地、萌えっ娘島の訓練所所長。いつもぼんやりとしていてやる気がないように見える。しかし、かつては最強のエキスパート集団「Pixies」のエースとして、畏れられていた。リニアには調子を狂わせられっぱなしだが…

隷
れい

リニアを萌えっ娘島に連れてきた本部監査室員。線が細く、優しげな雰囲気をたたえてはいるが、元Pixiesのメンバーであり、その力は計り知れない。彼の謎めいた行動には隠された意味がある…

飯島
いいじま

元Pixiesメンバーにして現・取締役会直属の商品管理部監査室室長。すっかり牙を抜かれた貴広に対して苛つきを隠さず、なにかと突っかかる。彼もまた隠された特命を帯びているのか…

霧島香織
きりしま　かおり

貴広の秘書として、萌えっ娘島の雑事一切を取り仕切る。その幼く見える外見と、舌足らずの口調に惑わされやすいが、秘書としては超一流。

おやじさん

萌えっ娘島整備班班長。ロボット工学の天才で、どんなモノでも直してしまう。職人気質な仕事ぶりと頼れる性格から島の親父的存在として慕われている。

おばちゃん

萌えっ娘島の食全般を取り仕切る、食堂のおばちゃん。おやじさんの奥さんでもある。
面倒見がよく、みんなのおふくろ的存在。

1　掌中の楽園

　どこに行くにも快適な交通手段が確保されているこの時代に、そこへ行く為にはヘリコプター以外の交通手段が存在しなかった。
　長い長い距離を、ほとんど変わることのない退屈な景色と睨めっこしながら飛んでいく。
　それしかなかった。
　もちろん、その場所を目指して飛んでいくヘリコプター自体もほとんどなかった。
　その島へ物資と人材を運ぶヘリコプターだけが、細々と行き交っているのだ。
「それにしても……不便なところだぜ。奴もよくこんな場所で我慢してるもんだ」
　長身の男が吐き捨てるように呟く。
「こんな場所で腐って死んでいくのだけはごめんだよな。そう思わないか、隷」
　隷と呼ばれた人物は、瞼を決して開けることなく男の方に顔を向ける。
「飯島さんは、不要に苛立っているようだね」
　隷はわずかに笑う。
「僕には、貴広が何を考えているのか解りませんから。彼には彼の考えるところがあるのでしょう」
　隷はつまらなそうに飯島との話を打ち切り、キャビンの隅にいる、もう一人の人物に顔を向けた。
「リニア」
「あ、はいっ」
　窓に張り付くようにしてじっと外を見ているピンク色の髪の少女が、ぱたぱたと近寄ってくる。
　手のような形に形成されているピンクの髪の一部は、自在に動くらしく、自分の頬に当たって痛い思いをしないように、肩のあたりを摑んでいる。
「何を見ていたんだい？」
「海です」
　リニアと呼ばれた少女は、照れたように笑う。
　彼女が着ている服装は、いわゆるピナフォアドレ

スというタイプのものだ。ヘリコプターのキャビンに座っている少女の服と考えるといささか奇異だが、ヘリコプターの内部にいる人間の誰一人として、不思議に思っている様子はない。
それも当然である。
このヘリコプターが輸送する人員のほとんどは、ピナフォアドレスを着用した少女なのだ。
彼らが向かっているのは無政府資本国家、萌えっ娘カンパニーの第2563号島。
護衛メイド最終訓練工程試験連絡洋上訓練所。
つまり、戦闘能力を備えた護衛メイドを養成する為の訓練所なのだ。
脱走したりできないような孤島を選んで建てられた訓練所に送られてくるのは、護衛メイドの中でもあまり芳しくない成績をキープしている者に限られていた。
幸せそうに海を見下ろしていたリニアも、確かにそれほど有能そうには見えなかった。
「リニア、こんなにずうっと海が続いているのを見て、何だか不思議な感じがしました」
「世界の果て、みたいだろう？」
「そうですね」
リニアは隷に甘えるように、もぞもぞと隣の席に座った。
「第2563号島に着くまで、もう少しある。ゆっくり休んでおいで。これからいろいろ訓練を受けなければいけないんだからね」
まるで兄妹であるかのようにやさしく話している隷に、飯島は肩をすくめた。
「おいおい、たかがポンコツメイドに本当におやさしいことだな。俺には到底真似できんよ」
「真似をしろとは言っていませんが」
「そいつが俺達の役に立つ前に、もう一回スクラップ工場に逆戻りしないように気を付けるんだな」
隷は冷たい気配を飯島に向けた。
「彼女に罪のあることではないでしょう。リニア、

気にする必要はないからね」
「は……はい」
「もう少し、海を見ているといい」
どうやら隷と飯島との間には、あまり友好的な空気は流れていないらしい。
そもそも隷は穏やかな雰囲気とはうらはらに、何故か周囲の人間と仲良くしていることがない。仕事仲間だとかいう飯島とも、親しげな感じは全くしなかった。
(隷さん、リニアにはやさしくしてくれるのに、どうして……?)
しかしリニアは長い間悩むこともなく、ほどなく鮮やかな海に見入ってしまった。

萌えっ娘カンパニー。
世界から国家という仕組みをなくしたのは、その名を持つ巨大企業集合体だった。
かつて『世界をひとつに』とスローガンを唱えた政治家達は、自らの手によらず世界統一を果たしつつあるのだ。
アンドロイド、人間のメイド達を世に送り出している部署もまた、萌えっ娘カンパニーの一部だ。
多くのメイド達がその部署で教育され、世界へと供給される……というような説明を、隷から受けたことがあった。
彼女達を見ていると、てきぱきした働きと言い至れり尽くせりのサービスと言い、自分が同じメイドとしてくくられる存在とは思えないほどだった。
(頑張らなきゃいけないですよね)
気が付くと、ヘリコプターはゆっくりと高度を落とし、小さな島に着陸しようとしていた。
印象的な灯台がまず、リニアの眼を惹いた。それに続いて古めかしい邸宅と、広々とした庭が見える。
リニアがぼうっと見入っている間に、ヘリコプターはヘリポートに着陸した。
一番に降り立った飯島がにやりと笑った。

「さあ……あいつの落ちぶれた姿を拝みに行くとするか。NURSERY　CRYMEと呼ばれた男の末路をな……」
（NURSERY　CRYME……？）
リニアはその言葉の意味は解らないものの、飯島の語調に悪意と畏怖めいたものを感じ、思わず身を正していた。
「おはよう、霧島さん」
「アポも入れじゅに、いきなりいらっちゃったのは何故でちゅか？」
ヘリポートに降り立った三人を迎えた人物は、ひどく小柄で舌足らずの喋り方をする少女だった。
「え……？」
一瞬、小さな女の子なのだろうかと思ったが、その霧島と呼ばれた少女は高級そうなスーツを着こなし、視線も鋭い。
少なくとも、外見よりはずっと大人の女性らしかった。
リニアなど気圧されてしまいそうだった。
しかし、飯島と隷は彼女と面識があるのか、外見に驚く様子はなかった。
「今回訓練させるメイドを連れてきたんだ。早く神崎に取り次いでくれないか？」
「今頃、まだ寝ているかもしれまちぇん」
「じゃ、直接部屋に向かってもいいんだが？」
「始業時間までお待ちくだちゃい。もう少しすれば始業時間になりまちゅ」
霧島はきびきびと歩き出した。
「うわぁ……綺麗ですねえ」
古めかしく豪奢な建物の中で、リニアは思わず声をあげていた。
童話に出てくるお城を彷彿させるデコラティブな様子は、決してよそで見ることはできないものだった。

「こんなところにいたら、気が滅入りそうだな。暗いし、まともな設備もない」
「訓練の為ですから」
飯島の言葉を、先頭を歩く霧島は聞き流している。
リニアは隷の後ろを歩きながら、窓から見える景色に見入っていた。
外には多くの樹々と、小高い丘が見える。風が吹いたらさぞかし気持ちよく感じられるだろう。
「あちこち気にして、迷子にならないように」
「はい」
いつの間にか他の一行と離れていたリニアは、慌てて駆け出した。

一度秘書室に通されると、豪奢ではないが座り心地のいい椅子を勧められ、三人は腰掛けた。
「全くいい身分だな。神崎は俺達が来ていることも知らないで、惰眠を貪っているのか？」
霧島は飯島に返事をせず、さりげなく時計を確認した。
8時59分。
「……そろそろでちゅね」
時計が9時を表示してほどなく、内線が鳴り始めた。
「……はい、ただいま参りまちゅ」
二言三言やり取りして、霧島は受話器を下ろした。
「それでは、所長室にご案内しまちゅ」
霧島は扉の前まで先導してから、軽くノックする。
「リニア、君はここで待っておいで」
「はい……」
「話が済んだら呼ぶからね」
「解りました」
霧島は二人を先導して中に入っていった。
（それにしても……この先に、リニアがお世話になる方がいるんですね）

どんな人だろうかと無邪気な想像をしてみる。
やはり、教育熱心な人なのだろうか。
（やさしい人だといいな）
この古めかしい邸宅の中で行われる訓練は、多分今まで暮らしていた殺伐とした場所よりも、居心地がいいのではないかという気がした。
（メイドさんの訓練所だから、きっと……メイドさんのお友達もできますね）
今までほとんどメイドのいる場所で生活してこなかったリニアにとって、自分の同業者に当たる存在は珍しかったのだ。
リニアの記憶は飛び飛びではっきりしていないが、今まで特にメイドとしての訓練を受けた記憶はなかった。
家事をしたことがない訳ではない。
少なくとも、日常生活が送れる程度に家事能力があることは間違いないが、その最低限の技能をどこで身につけたかも憶えていなかった。
（リニアがポンコツだからなんでしょうか）
記憶に関する部分が故障したり劣化したりすると、こういうことは起こりうると誰かに説明を受けたような気がする。
（誰だったんでしょうか……）
多分、隷が何度かエンジニアに見せた時に受けた説明なのだろう。
リニアは自分を納得させ、退屈しのぎに窓の方へ寄った。
（さっきも見たけど、きれいなおうち……）
今までリニアがいた場所には手のかかった調度品も、手入れされた庭木もなかった。花瓶に生けられた花すらも見ることはなかったのだ。
遠目で見るだけでもここでは多くの自然を堪能できる。ヘリポートに降り立った時には潮風のせいで気付かなかったが、樹々も花もいい匂いがするだろう。

（後でお庭を見せてもらっても怒られないかな）
まるで子供のように窓に張り付いていると、突然扉が開き、霧島が出てきた。
「どうしたんでちゅか？」
「お外が綺麗だったから、つい……」
「そうでちゅか。多分、そろそろ呼ばれると思いまちゅから」
霧島は小さな子供をあやすような笑顔をリニアに向けてから、廊下を歩いていった。
飯島が乱暴な声でリニアに入るように指示をしたのは、それから五分ほどたってからだった。
扉を開けて部屋に入った瞬間、眼鏡をかけた見知らぬ男がいぶかしげにリニアを見やった。
（え……？）
端整な、冷たい印象の男だった。
しかし、リニアはどこかで彼と似た面差しの人物を見たように感じて、奇妙な気分になった。
「…………」
多分、彼がここの責任者なのだろうう。
リニアはその視線の鋭さに、思わず身がすくんでしまい、ソファに座らずに立っている隷に駆け寄ると、彼の後ろに隠れた。
「新しいメイドか」
「ああ、そうだ」
やはり彼が『神崎貴広』であるらしい。
これから訓練の間、お世話になる相手なのだ。
「あ、あの、この方ですか？」
「ああ、神崎貴広。ここのメイド養成所の所長をやっている。リニアがこれからお世話になる人だ」
「わぁ……」
リニアは思わず嬉しくなって微笑んだ。
「ああ。何だか話が盛り上がっているが……続き、いいか？」
「盛り上がっているのは、そこのメイドと隷だ。構わず話を続けてくれ」

「単刀直入に言えば、こいつに護衛メイド最終訓練を施してほしい」
神崎貴広はいぶかしそうにリニアを睨んでいた。
「何故、事前連絡がない？　何故、お前が連れてくる？　何故、こいつは一人なんだ？」
たたみかけるように飯島に疑問を投げる。
「まず最初の質問の答えだが……事前連絡がなかったのは単純なこちらのミスだ」
「ほう、ミスね。元情報部の人間が情報伝達ミスとはな。左遷される訳だ」
飯島は嫌そうに笑ってみせた。
「次の質問。通常なら十人一括りで訓練は行われるはずなのに、今回こいつ一人なのはこの娘が特殊な例だからだ」
「特殊？」
飯島は貴広に書類を渡した。
眼を通しているうちに、貴広は眼鏡越しでも解るほど不快そうな顔になった。
「製造年数不明のアンドロイド……か」
「だいたいの見当はついているのだが、はっきりしたことは解らない」
「いつぐらいで見当つけているんだ？」
「……前世紀だ」
「ほう、それは古いな」
「ああ、本当の意味での初期型のアンドロイドだ。現存するもので博物館入りしていないものはないと言われる型だ」
「よく動いているな」
貴広が驚いたように眉を上げた。
（リニア、そんなに古いアンドロイドだったんですか……）
リニアは自分でも驚いていた。
古い、ポンコツだと言われ続けてきたが、博物館に所蔵されていてもおかしくないレベルだとは知らなかったのだ。
「だからこそ、こいつは一人だけでここに送られて

きたんだ」
　そう締めくくった飯島を、貴広はどこか疑わしそうに見やっている。
「何か腑に落ちないような感じだな」
「いや、そんなことはないさ。で、次の質問の答えは？」
「何故俺がここに来たか？　別に何の意味もない。俺が情報部から、護衛メイドの管理の部署に移ったからだ」
　飯島はにやにやと笑ってみせる。
「貴様がか？　一体貴様のような奴が管理部のどこに移った？」
「商品管理部の監察室だ」
　貴広は冷たい視線を飯島に向けた。
「商品管理部、監察室、直属粛正部隊……ALICE IN CHAINSがあるところか」
「ああ、そうだな」
「PIXIESの人間が左遷されて、商品管理部の粛正部隊か。お似合いすぎて何も言えないな」
　しばらくの間、貴広と飯島との間に奇妙な沈黙が流れた。
　しかし、それを遮ったのは飯島の方だった。
「さてと、仕事の話はこれまでだ。そろそろ本社に戻るか」
「早いな。さっき来たばかりで、もうお帰りか？　まだお茶もはいってないが」
「隷は数日この島に滞在するらしい。お茶ならこいつにたっぷり飲ませてやれ」
「隷が？」
「商品管理部の上からの指示でな、隷を連れて行けと言われた」
「ほう、隷は飯島と同部署ではないのか」
「ああ、こいつは未だに情報部だ」
　リニアの知らない隷の話だった。
　情報部だの、商品管理部だのと言われても、リニアにはさっぱり解らなかったが、どうやら彼らには

過去に共有した時間があって、それだからこそ彼らの間に奇妙な緊張が流れているのだろう。
隷は涼しげな様子で貴広に返事をする。
「と言っても特殊情報課ではないさ。一般情報課のリサーチ部門だ。僕がここに来たのも大した理由じゃない。貴広にリニアを引き継ぐ為にここに来た」
「引き継ぎ？」
「リニアは中古商品をリサーチ中に、たまたま僕が発見して業者から買い取ったものだ。その関係でリニアの管理する管轄が、商品管理部ではなく情報部であったからね。ここにリニアを連れてくる責任者は、飯島さんじゃなく僕なんだよ」
隷がリニアに関する責任を負っている。
その言葉は、リニアにとっては『隷は保護者である』という程度の意味でしかなかった。
「くわしくは上の方がやったみたいで細かくは俺も知らない。まぁ、隷自身に訊くのが一番だろうな。それとリニアに関する資料は隷が持っている」
早く面倒なことは済ませてしまいたいとばかりに、飯島はまくし立てる。
「ああ、解った」
話は終わったとばかりに三人は立ち上がり、扉に向かって歩き出した。
「あっあっ」
多少遅れたタイミングで、リニアも彼らを追いかけた。

ヘリポートに向かうまでに、彼らは樹々の間を抜けて歩くことになった。
ぽとり。
甘やかな匂いをたてる果樹から、大きな実が落ちる。
樹々の下ではそれまでに落ちた果実が腐り、甘い匂いに混ざって腐敗臭をたてている。
「…………」
隷がわずかに眉をひそめた。

リニアは心配そうに隷のことを見つめながら、歩いていく男達の後に従った。

その頃には太陽は、ぎらぎらと照り付けて彼らの肌を灼いた。

飯島は眉をひそめ、額にふつふつと湧いた汗をぬぐい去った。

「真冬だっていうのに暑いな……さすが南国の島だ。神崎、お前はこんな世界の果ての孤島で一生終わらす気か?」

「ああ、もう俺は本社に戻るつもりはない。まして他の国なんてもっと行きたくない。カンパニー以外で内戦がない国なんてないだろう」

飯島は悪意を剥き出しにして笑った。

「本当に、腑抜けになったのだな。今の台詞をそのまま、お前を信奉している馬鹿な一般社員どもに聞かせてやりたいよ」

「ああ、彼らがそれで諦めるなら、そうしてもらいたいものだな」

「そうだな……」

何度目かの沈黙。

貴広はわずかに溜息をついた。

「お前の方は未だに本社でばりばり働いているようだな」

「ああ、当たり前だ。カンパニーは世界そのものになるシステムだ。やり甲斐がある。世界全てがカンパニーになる日も近い」

「ほう」

「近代国家など、非合理的なシステムだからな。カンパニー型の連合企業型がこれからのスタンダードになる。無政府資本国家に……」

「無政府のくせに国家を名乗る奇妙なシステムにか」

貴広の冷笑に、飯島は真面目にうなずいてみせる。

「国家が虚構だとしても、人は国家を欲しがる。カンパニーは企業だが、そこに住む人にとっては国家

そう言う貴広は、全く汗をかいていなかった。
「さっき道ばたに、果実が腐って落ちていた。すごく嫌な臭いを出していた」
隷はあの匂いがよほど不快だったらしい。
「上からは、多くの甘い果実の香りがしたよ。まるで、楽園のような気配だった。あんなに芳しい果実が、地べたに自らをまき散らし腐りゆく姿を感じていると忍びない」
隷は憂鬱そうにうつむいた。
「だから、その芳しい果実を消してあげられたら、よかったのにと思ったよ」
「大層傲慢な考え方だな。果実などお前に何も関係なく生まれ、そして熟して腐り落ちる」
果物の話をしているのに、何故かリニアには彼らが全く別のことを話しているような気がした。
「君の言う通りかもな。南国の風は、芳しい果実をすぐに腐らせる。芳しいものがすぐに腐敗して、醜く変じていく」
さ」
「そんなものか」
「世界は全てカンパニーに呑み込まれるのさ」
リニアは彼らの言葉の全てを理解できていた訳ではなかったが、何となくどちらの声音にも憂鬱な響きが含まれているように思えた。
飯島がヘリコプターに乗った後も、その憂鬱さは消えなかった。

「うるさい男が消えたか」
貴広は一人ごちる。
「あいつと逢うのも久しぶりだが、隷、お前とはそれ以上だな」
隷はそれには返事をせず、けだるそうに話し始める。
「貴広……ここは、暑いな。話には聞いていたが、ここは本当に……暑い」
「冬だからかなり涼しいんだがな」

「だが……腐った果実は土に還ることができる。それだけでも充分だろう」
「でも、寒さの中に閉じ込めれば、果実は美しいまま永久にそこにあるじゃないか」
決して見開かない隷の眼が、じっと貴広に向けられている。
その『視線』がせつなくて、リニアはどことなくいたたまれなかった。
「俺は、腐らない果実なんかに興味はないさ」
「……貴広は変わった。この世界で最も、闇の冷たさを知っているにも関わらず、今では興味がないと。闇の中で凍っている、腐らない果実を……」
「世界を凍らせて、美しい風景にするなんて興味はないさ」
何を言っているのか解らないまでも、この話がとても悲しいことだけは伝わってくる。
「腐らない果実は食べられもしないし、匂いもしないが……いつまでも美しい。人にとっての美しさとは何だろうね」
「さあな。そんな難しいことは考えても仕方がない問題さ」
関心なさそうに呟く貴広に、隷は物問いたげな気配を投げる。
「どうやら、俺を恨んでいるようだな。貴様から光を奪った俺を」
隷は貴広の問いに答えない。
(何だか、いつもの隷さんじゃないみたい)
黙って貴広の方を向いている隷は、重々しい気配を漂わせている。リニアには見せることのない、痛々しささえ感じる姿だった。
リニアは思わず、隷の袖をそっと引っ張った。
「リニア、僕の後ろに立つのはいいが、袖を引っ張らないでくれ。伸びてしまうよ」
「あ、ご、ごめんなさい……」
リニアは慌てて袖を離した。
その様子を貴広が不思議そうに見ている。

彼の鋭い眼がリニアを観察する。
（この人……）
萎縮してしまうような強い視線。
しかし、一瞬、不思議そうにリニアのことを見やる眼を見た瞬間、リニアの脳裏で何かが引っかかったように思えた。
（え？）
こんな冷たい印象の男性に憶えはなかった。
しかし彼のどことなく不思議な雰囲気をたたえた眼を、どこかで見た記憶があった。
胸を突くような不安感。
しかし、その感覚は一瞬で消えた。
「……こうやってみんなが集まれるなんて、夢にも思わなかった」
隷の言葉が何を意味しているのか、リニアには解らなかった。
ここに来てから、解らないことづくめだ。
「何だ、それは」
「いや、何でもない……そろそろリニアの件について、ちゃんと打ち合わせをしておこうか」
「ああ。それじゃ所長室に戻ろう」
何事もなかったように貴広と隷は歩き始める。
リニアは隷の陰に入り、貴広の死角になる位置にくるように歩いた。

所長室に戻ると、すぐに霧島がトレイを持って入ってきた。
飲み頃のアイスティは、どう考えてもいれたてのものだ。どうやら飯島にお茶を出さずに、帰るのを待っていたらしい。
貴広は冷たいアイスティをくいっと飲み干すと、リニアをじろじろと点検し始めた。
しかし、隷の後ろで脅えているリニアに閉口して、溜息をつく。
「どうにかならないか。ずっと貴様の後ろに隠れているではないか」

「貴広が睨みつけるからだ。彼女は悪くない」
「あ、ごめんなさい」
リニアはおずおずと貴広の前に出た。
「き、緊張してしまって……申し訳ありませんでした」
「緊張ね」
貴広はふん、と鼻を鳴らすと、眼鏡越しにリニアを見つめた。
「名前は?」
「あ、はい。リニアです」
「型番は?」
型番というのは何だっただろう。
一瞬、何を言われたのか解らなかった。
「あ、あの……そのっ」
「欠損しているとさっき説明しただろう」
「隷、貴様には聞いていない」
横から口を出す隷を、貴広は睨み付けた。
「リニア、どうなんだ」
「はい、ごめんなさいです。そ、その記憶が欠損していまして……」
リニアを点検してくれた部署からの答えでは、実際には欠損どころではないらしい。しかし、リニアには欠損に関する細かい区別がつかないので、こう答えるしかなかった。
しかし、貴広はリニアの答えがお気に召さないようだ。貴広の表情から察するに、『型番』というのは、本人の名前と同じくらい重要なものらしい。
「欠損はその記憶だけではないであろう」
「え? あ……」
「言語中枢にも欠陥があると書類にも書かれているが、ひどい敬語だな。本社の書類ではデータを消去した記録はないが、記憶のほとんどが欠損しているのだな? アンドロイドの言葉遣いとは思えない。まるででたらめだ」
もちろん、リニアは自分以外のアンドロイドと一緒にいる時間はほとんどなかったので、『アンドロ

イドの言葉遣い』というのがどういうものかも解らないままだった。
貴広はうんざりしたように隷を見やった。
「隷、貴様が連れてきたと言っていたが、何故こんな古い機械を連れてくる。説明してくれないか」
「リニアは古くても、優秀な機体だ。十分カンパニーのメイドとしてやっていけると判断した」
隷の言葉に、貴広は肩をすくめた。
「まともな日本語すら話せない、これがか?」
「ああ、彼女は優秀だ」
「製品番号すら不明なものを優秀だとはな」
「ごめんなさい、隷さん。やっぱりリニアでは、ご迷惑を……」
「そんなことはないさ」
やさしくリニアの頭を撫でる隷の向こうで、貴広は不服そうにこちらを見ている。
「でも」
少なくとも貴広の方では『ご迷惑』だと思っているようにしか見えなかった。
「勝手に話を進めないでくれないか。今は、俺と話をしているのだぞ」
「す、済みません」
しばらくリニアのあちこちを眺めていた貴広は、大きく溜息をついた。
「どう思う、霧島。この保証期間が終わった瞬間に壊れそうな機械」
「……可愛いでちゅね」
霧島は鷹揚に笑ってみせたが、何を考えているか簡単に察することはできなかった。
「そうか? 俺はむかつくぞ」
「はい、ごめんなさい……」
これからお世話になる予定の相手は、リニアのことを好ましく思っている訳ではないようだった。
貴広は厳しい顔で隷に訊く。
「隷、何のつもりかは知らないが、こんな事をして誰が利益を得る? この娘は大層お前に懐いている

ようだが、このままここでメイド訓練を受けても、こいつの未来は暗いものになるぞ。不幸は目に見えている。それともそれを見越してのことなのか」
「何が言いたい？」
「策略にこんな娘を使うのだとしたら、感心しないと言いたいのさ、隷。もし、俺を恨んでいるなら」
自分のせいで二人が険悪な雰囲気になっている。リニアはいたたまれず、顔を上げることもできなかった。
霧島は二人の間に割って入り、命令書を貴広に見せる。
「どちらにしろ本社からの命令でちゅ。こちら側がとやかく言う事は出来ないでちゅ」
「誰が利益を得ることなのか、俺には解らない。だが少なくとも、その娘の信頼を貴様は裏切ることになる。それだけは解るがな」
静かな口調ではあるが、貴広は明らかに隷を責めていた。
「そ、そんな事ありません。れ、隷さんは……人を裏切るなんてことはありません。これはリニアが望んだことなのです」
進み出たリニアを、貴広はねめつける。
「馬鹿が考えた風な口を利くな。場にいらぬ混乱を及ぼすだけだ」
「で、でも、これはリニアが望んだことで……」
メイドとしての訓練をしに行かないかと隷に言われた時にも、うなずいたのはリニアだった。それに、二人が言い争っているのを見るのが、とても悲しくて堪らなかった。
二人が仲直りしてくれること。
それがリニアの望みだった。
「どちらにしろ本社からの命令だ。君にとやかく言う資格などない。もし不満があるなら本社に意見書を提出すればいい」
「それが、貴様の答えなのだな」
貴広の顔はひどく憂鬱そうに見えた。

「所長。本社からの命令なのでちゅから、いいではないでちゅか」
貴広は困ったような霧島の顔と、半泣き状態のリニアの顔、そして……全く表情を変えていない隷の顔を順に見やった。
そして、再び大きな溜息をつく。
「まあ、いいさ。貴様がその気なら俺もそれに乗るしかあるまい」
「あの……もしリニアに問題があるなら、この場で処分していただいてもいいです。だから所長さん、隷さんを疑うのだけは……」
貴広は一瞬、むっとした表情になった。
「霧島、俺はこのアンドロイドを見ているだけで腹が立つ。連れて行ってくれないか」
「はい。リニアちゃん、行くでちゅよ」
「あ……は、はい」
このまま二人を置いていってもいいのだろうか。険悪な二人のことが心配でならなかったが、そっと霧島に手を引かれ、リニアは歩き出した。
閉められた扉を心配そうに窺っているリニアに、霧島は微笑んだ。
「リニアちゃんのお部屋に案内するでちゅよ」
「あの……」
「あの二人は放っておくでちゅよ。二人ともそれぞれに思惑があるんでちゅ。リニアちゃんが間に入ると、余計にこじれるでちゅよ」
「そうなんですか……?」
「そういうものでちゅ」
霧島はうなずいた。
「それより、長い間ヘリに揺られて、疲れたんじゃありまちぇんか？　確か、書類を見る限りではリニアちゃんは人間と同じようにお食事ができるようでちゅから、食堂で何か作ってもらうといいでちゅ」
「済みません……えっと」
「霧島香織でちゅ」

「はい。よろしくお願いします」
霧島は途中でいろんな場所を説明しながら、広い食堂へとリニアを連れて行った。
「こんにちは。おばさんはいるでちゅか？　新しいメイドを紹介するでちゅ」
「おやおや、今回は一人だけなのかい？」
厨房から出てきた初老の女性が、にこにこと微笑みながら出てきた。
「は……初めまして。リニアといいます」
「可愛い子だね」
「飯島や隷さんと顔を突き合わせてヘリで揺られてきたでちゅよ。疲れてると思いまちゅから、何か甘いものでも出してあげてくだちゃい」
「はいよ。それなら冷凍のデザートなんかじゃなくて、手作りのを出してあげるよ」
「それと、リニアちゃんは古い機体なので、記憶の欠落などがありまちゅ。答えられないことなどあるかもしれまちぇんが、いろいろ教えてあげてくだちゃい」
「構わないよ。素直そうで、いい子じゃないか」
おばさんは豪快に笑い声をたてた。
「この子は食べ物、いけるんだね？　そりゃよかった。アンドロイドさんは大抵ごはんを食べないからねえ。食べる子がいる方が張り合いがあって嬉しいよ」
「あ、はいっ」
他のアンドロイドはどうやら、食事の類は全くしないらしい。自分と他のアンドロイドのメイドとの差については気になるが、楽しく食事ができるのはとても嬉しかった。
「まだお昼には間があるから……そうだ。ホットケーキでも焼いてあげようね。ホットケーキは好きかい？」
「大好きです」
この時代、料理は誰もがすることではなくなって

いた。保存加工技術が上がり、シェフと呼ばれる専門職の人間以外が手ずから料理することはほぼ皆無だったのだ。
　そう説明されたことを、リニアは朧気に思い出した。
「そりゃよかった。じゃ、そのへんに座って待っておいでよ」
　おばさんはリニアの背中をぽん、と叩くと、厨房に戻っていった。
「おいしいものが食べられてよかったでちゅね。おばさんはいつもここにいる訳ではないでちゅけど、時々食堂にも来ているんでちゅ」
「そうなんですか」
　どんな仕事をしている人か解らないが、彼女の料理が食べられるのはラッキーなことらしい。
　リニアが座ったテーブルの向かいに、霧島が腰掛けると、ファイルの中から紙を一枚取り出して、何事か書き付けている。
「霧島さん、それは何ですか？」
「リニアちゃんがここで生活しやすいように、いろいろまとめておきまちたけど、何か解らないことがあったら、いつでも訊いてくだちゃいね」
　邸内の見取り図に手書きのコメントを追加してくれる。
「これでよしでちゅ。あと、食堂についてはおばさんに直接訊いた方が早いでちゅね。食堂に詰めてるメイドさん達にも紹介してもらうといいでちゅ」
　そう言うと、霧島は立ち上がった。
「私はまだ仕事がありまちゅから、先に行きまちゅ。今日はゆっくりするといいでちゅ」
「ありがとうございます」
　霧島はてきぱきとした様子でファイルを片づけ、食堂から出ていった。
　リニアは座ったままで、何となく考え込んでいた。
（やっぱり……あの所長さんは、ポンコツで役立た

ずのリニアを連れてきた隷さんのことを、悪く思ってるのでしょうか……）

厳しい印象ではあるが悪い人とは思えない貴広と、いつもやさしい隷が険悪な関係になるなどと、考えるだけでもいたたまれなかった。

（リニアが頑張ってお役に立つように努力すれば、所長さんも隷さんがリニアを変な意図で連れてきたなんて思わないでくれるかも）

リニアは溜息をついた。

「どうしたんだい？　お腹が減ったのかい？」

「あ、いいえ……おいしそうですね」

ふんわりと甘い卵とバターの匂いが漂う。

おばさんはにっこり笑うとトレイをリニアの前に置いてくれた。

いい匂いのする紅茶と、焼きたてのホットケーキにたっぷりのメープルシロップが添えてあるのを見て、リニアは嬉しくなって笑った。

「ホットケーキが好きそうでよかったよ」

「自分ではまだ上手に作れないんですけど……片面が綺麗に焼けても、片面が焦げちゃったりとか」

「シェフの訓練を受けたのかい？」

「訓練……？」

そんな大層なものを受けた憶えはなかったが、リニアの記憶が欠落しているだけかもしれない。

曖昧に首を傾げていると、おばさんが首を振った。

「いいよ。ちょっとでもお料理ができるなら、たまに手伝ってもらおうかと思っただけさ」

「あ、喜んで」

「じゃ、ゆっくりお食べ。食事には中途半端な時間かもしれないけどね」

「いただきます」

リニアがフォークとナイフを持つのを確認して、おばさんは厨房に戻っていった。

（隷さんと所長さんも、こうやって甘いものを一緒に食べたら、きっと仲良くできると思うのに）

甘いホットケーキを口に運びながら、リニアはそ

んなことを考えていた。

リニアはトレイを返す時に、ちょうど昼食の準備の為に食品を解凍しているメイド達に簡単に紹介してもらってから、食堂を出た。

食事を用意している有様は、まるでオートメーションの工場のようだった。今まで知らなかったが、これこそが現代の『食事の用意』であるらしい。

（確かに、これなら手作りのお料理を食べられるのは、とてもラッキーで贅沢なことと思っても、不思議じゃないですよ）

何となく違和感を感じながら、リニアはこの萌えっ娘島での生活について思いをはせていた。

2　きみの居場所

ホットケーキを食べ終わってから、リニアは霧島にもらったファイルの中に書かれていた社宅の方へと向かった。

「うわぁ、こっちも綺麗ですよ」

社宅という言葉に似合わない、繊細な外観を持つ建物から何人かのメイド達が出てくる。

外見だけではアンドロイドと人間の区別はつかないが、彼女達は穏やかに微笑んでくれる。

訓練所という場所柄、見馴れないメイドがいることに不審を感じていないらしい。

「あ、あの……初めまして。今日からこちらでお世話になる、リニアといいます」

「初めまして。そう言えば、さっきリニアさんのお荷物が届いたと連絡がありましたよ」

「あっ、そうなんですか。ありがとうございます」

リニアがぺこりと頭を下げると、彼女達は挨拶して立ち去った。

彼女達のお喋りを聞いている限りでは、どうやら昼食前に社宅の方へ一度戻ってきたものらしい。化粧直しや着替えなどを済ませたのだろう。

リニアは見取り図と睨めっこしながら、自分の部屋を探した。

「あっ」

それらしい部屋の扉が開け放たれており、張り紙がしてあった。まだ部屋の中はどことなくカビ臭い感じがする。

さっき他のメイドから聞いた、荷物が届いたという話と、荷物の置き場所が書かれている。

中を見ると、支給された服やその他の備品が既にいくつか運ばれていた。どれも新しいものばかりで、まだリニア自身の荷物のような気はしない。

（行かなきゃ……）

リニアは一度扉を閉めたが、カビの臭いが気になってもう一度開け放つと、廊下を小走りで移動した。

山積みになった荷物を見た瞬間、リニアは半ば放心状態になった。
「こ……こんなにいっぱいあるのですか」
隷と一緒にいた時に使っていた私物の他に、訓練の時に使うらしい備品まで、うんざりするほど積まれている。
「どうしましょう」
リニアが深い溜息をついていると、どこからかいぶかしそうな貴広が現れた。
「おい、アンドロイド。何をやっているんだ?」
「あ。しょ、所長さん……先ほどは、申し訳ありませんでした」
ぺこぺこと頭を下げると、貴広はふん、と鼻を鳴らした。
「申し訳ないと思うなら隷に言って、すぐにでも本社に戻してもらうのだな。ここにいても、お前も俺も幸せにはなれないだろうからな」
やはりリニアがここに来たことは、全く歓迎されていないらしい。
「そ、そうですか……」
頑張ろうとは思っても、あからさまに嫌がられると意気消沈してしまう。
しかし、隷の為にも自分の為にも、これでは埒があかない。
「あ、あの、所長さん」
「何だ」
「所長さんのことを、何とお呼びすればいいのですか?」
「そんなことも説明されずに連れてこられたのか。俺は……萌えっ娘カンパニー第2563号島護衛メイド最終訓練工程試験連絡洋上訓練所『KILLING MY BUSINESS AND BUSINESS IS GOOD!』所長、神崎貴広だ」
ものすごく長い肩書きは、全部聞き取ることすら

できなかった。リニアはとりあえず、既に知っている名前だけを小さく復唱した。
「……貴広さんとお呼びしていいですか？」
「ああ、それでいいだろう」
とりあえず貴広は、ありがたいことにその長い肩書きで呼べと強要するタイプの人間ではないらしい。
名前で呼んだのは、飯島が『神崎』と貴広を呼ぶ時の、独特の雰囲気が馴染めなかったので、苗字で呼びづらかったのが理由だった。
もちろん、隷が『貴広』と呼んでいるからというのも、リニアにとっては重要だった。
リニアは遠慮がちに、今までずっと気になっていたことを訊いてみることにした。
「あの、貴広さん」
「何だ」
「も、もし、リニアがこの島から消えたら、貴広さんは隷さんと仲良くできるのでしょうか？」
貴広は肩をすくめた。
「さあな。そんなことは知らん。ただ、お前が消えたら、少なくともあいつは俺に対する不信感を抱くだろうな」
「なら、リニアがどうしたら、お二人は喧嘩をなされずに済むのでしょうか」
貴広は無表情でリニアのことを見ていた。
「リニアと言ったな」
「はい……にゃ!?」
しかし、その無表情のままリニアの頬に手を伸ばし、両手で思いきりつねった。
「にゃ？　にゃっ!?　にゃにゃにゃ!?　い、痛いですよ。な、何を、なされるのでしょうかっ？」
「さっきからメイド見習いの分際で、解ったような口を利く奴だな」
「わわわ、ご、ごめんなさい」
「貴様のような中古ロボットが、いくら考えても解らないようなことが色々とあるんだ。人を心配する

前に自分の心配でもしていろ」
　貴広は一気にそう言うと、やっとリニアの頬から手を離した。頬がじんじん腫れている。
「いたたた、じ、自分の心配ですか？」
「ああ、そうだ」
　そう言われた時、リニアは少しだけ嬉しくなった。少なくとも、関係を悪化させる為にきついことを言っているのではないらしい。この人なりにリニアのことを心配してくれているのだ。
「な、何だ？」
　嬉しそうなリニアを見てぎょっとした貴広に、ぺこりとおじぎをする。
「リニアを心配してくださって、ありがとうございます。えへへ。貴広さんは、やはりやさしい方なのですね」
「はあ？」
　いい人同士が険悪にならなければならないのは、とても辛かった。
「だから、そんなやさしい貴広さんと、隷さんが仲違いするのは、悲しいことだと思います。よくないことだと思います」
　しばらくの間、貴広はリニアのことを見つめていた。
　しかし、もう一度素早い動きで頬が摑まれ、引っ張られる。
「にゃ？　にゃ!?　にゃ!?　ほ、ほっぺがちぎれてしまいますよ」
「解らない奴だな。何も、お前などが原因で喧嘩になっている訳ではないんだよ!!」
　さっきまでの冷静な口調がすっかり吹き飛んでいる。その様子を見ていると、冷静沈着な所長というよりは、乱暴盛りの年若い少年のようだった。
「はう、ご、ごめんなさい……」
「とりあえずここにいる間は、俺の下で働くことになる。気を入れて働けよ」
「はい、ありがとうございます」

リニアは深々とおじぎをした。
話はこれで終わりだというように、貴広はうなずくと歩き出した。
リニアは貴広の後ろ姿が消えるまで、黙って見送っていた。
（それにしても……この荷物、どうやって運びましょう）
結局、リニアは偶然通りかかった霧島に、戦闘モードで力を出すように言われ、ほうぼうの人達に迷惑をかけながら自室まで荷物を運んだのだった。

夕食の時間。
リニアは食堂で何人かの職員と仲良くなり、何とか食事にありつくことができた。
結局、昼食の時間は荷物を運んでいる間に過ぎてしまい、食べることができなかったのだ。
（あの時、ホットケーキを食べさせてもらって、ほんとによかったです……）
貴広からきつい言葉をかけられたこともあり、他の人と馴染めるかどうか心配もあったが、この萌え娘島の人達はみんなやさしくて親切だった。
食事を終えてから廊下を歩いていると、ちょうど隷が歩いてくるところだった。
「あ、隷さん。これから夕食ですか？」
「いや。夕食は部屋で済ませたんだ。こちらでも、仕事を済ませなくてはならないからね。お茶でも飲もうかと思って来たんだよ」
「じゃ、よろしかったら、リニアのお部屋にいらっしゃいませんか？　確か、お茶のセットがありましたから、お部屋でもいれられますよ」
隷がやさしく微笑む。
「なら、そうしようか」
二人は並んで歩き出した。
今までどんな時でも、隷はリニアを傷付けるような言動をしたことはない。

アンドロイドに『家族』という概念はないが、リニアにとって唯一家族と言える相手が隷だと思っていた。
夕食を済ませて社宅に戻る途中の職員達は、隷のことを不思議そうに見ていた。時折、脅えたような顔で見る者もなくはない。
「隷さん」
「何だい?」
「リニアはよく解らないのですが、隷さんのことを時々怖そうに見てる人がいるんですけど、どうしてでしょう?」
隷はわずかに困ったような笑みを浮かべた。
「……多分、僕が情報部の人間だからだろうね。この島はいい意味でも悪い意味でも、中央から隔離されているから、見馴れていないものに対する構えはあると思うよ」
「見馴れていないと、怖い……ですか」
こんなにやさしい隷のことを、みんながそう思っていないのは悲しかった。
「リニアだって、少しは知らないものが怖いと思うんじゃないかな」
「そう……ですけど」
「午後に掃除ロボットを壊したと、貴広が文句を言っていた」
「ひゃあ! 忘れてください」
それぞれの部屋には、一応簡単に料理ができる程度の設備が整っている。大抵は大量生産された食事セットを、適温で食べられるようにするだけのことだが、自力でしようと思えばできなくもない。
「そちらにかけてくださいね」
こぢんまりした部屋の中で、小さなお茶セットを出すと、リニアはぱたぱたと動き回った。
送ってきた荷物の中には、大好きな紅茶の茶葉もあった。隷ともよく飲んだお茶だ。
リニアは嬉しそうに薬缶にいっぱいのお湯を入れ

ると、隷のところまで戻ってきた。
「リニアはお茶をいれるのが好きなんだね」
「はい。やっぱり落ち着きますよ。とりあえず、お湯が沸くまでお話しませんか?」
リニアはひとつしかない椅子を隷に勧めてしまったので、自分はベッドに座ることにした。
ぽふん
まだ一度も横になったことのないベッドが、リニアの体を弾ませる。
「リニア、ここに来た感想はどうだい?」
「とっても綺麗なところですね。お花や果物がいっぱいで、風も気持ちいいです。それに、こんな古いお屋敷の中は初めてですから、どきどきしますよ」
「そうか。ここに馴染めそうでよかった」
「あ……」
一瞬、貴広の言葉が頭をよぎる。
『申し訳ないと思うなら隷に言って、すぐにでも本社に戻してもらうのだな。ここにいても、お前も俺も幸せにはなれないだろうからな』
決して歓迎していないその言葉は、リニアが自覚している以上にリニアを傷付けていた。
その沈んだ様子を隷は察したらしい。
「貴広のことだね」
「あ……いえ、そんな……何でもないです」
隷はリニアの頭を撫でた。
「貴広があういう態度なのは、別にリニアが嫌いだからじゃないんだ。ある意味で彼があういう態度を取るのは当然とも言える」
「そう……なんですか? でも、やっぱり嫌われてるみたいな気がするんですよ」
隷は曖昧に微笑んでみせた。
「今はそう思うかもしれないけど、君はここに来なければならなかったんだよ。そして、僕もまた……君を連れてこなければならなかった」
「……隷さん?」
本当にそうだろうか?

貴広の側からすれば、訓練についてこられるかどうか解らないような、古ぼけたアンドロイドなど、見たくもないのではないだろうか。
問いかけようとしたリニアに、隷は薬缶の方を指さしてみせる。
「お湯が沸いてるみたいだよ、リニア」
「あ、はいっ」
気が付くと、薬缶がしゅんしゅんと音をたてて湯気を吐き出していた。
リニアは慌てて簡易キッチンに駆け出した。

「お茶、ごちそうさま。おいしかったよ」
香りのよい紅茶を飲み終え、隷は立ち上がった。
「そのうち、貴広にも飲ませてやるといい。きっとおいしいって言ってくれるから」
「はい……」
あの無愛想な態度では、お茶をいれてあげられるような機会は永久に来ないような気がしたが、隷には言わないでおくことにした。
それから数十分後。
霧島から受け取った、明日から受ける訓練について書かれたレジュメに眼を通しながら、リニアは考え込んでいた。
「うにゃ……？」
さっぱり解らなかった。
言葉の意味としては何とか解るのだが、具体的にどういう訓練をするのか、さっぱりイメージが湧いてこない。
（メイドさんってお茶をいれたり、お庭の手入れをしたり、お掃除したり、お料理したりするんだとばかり思ってました……）
護身術だの爆薬処理、諜報活動などの、普段の家事から想像もつかない言葉がたくさん羅列されている。
しかも、料理に関しては一行たりとも書かれてい

ない。何かの間違いだろうかと眼を皿のようにして探すと、厨房機器の使用訓練という項目があった。
どうやら料理に関する訓練はそれだけらしい。
リニアは厨房での冷凍食品を処理している様子を思い出し、思わず溜息をついてしまった。
(何だか、リニアが思っていたのとは全然違うような……は、破壊活動というのはそもそも家事じゃないような……)
最後までレジュメに眼を通すと、リニアが現在できることは、多めに見積もってもリストの中の五分の一以下だということが解った。
(貴広さんが帰れと言うのも当然ですよね)
どうやらメイドというのは、オールマイティの技能を身につけた存在で、家事ができるというのはそのうちの一部でしかないらしい。
眩暈がしそうだった。
ばさり、とベッドの上にレジュメを置いた時、別の書類がそこから出てきたのに気付いた。
「これは……あああっ!」
支給された服などが、ちゃんと正しいサイズだったかどうかを報告する書類が紛れていたのだ。どうやら気付かずにそのままにしていたらしい。
もうかなり遅い時間だった。
そろそろ霧島は帰ってしまう時刻のはずだ。
(霧島さん、まだいるんでしょうか……)
リニアは慌てて一通りの支給品のサイズを確認し、霧島のいる秘書室まで駆け出していったのだった。
リニアが慌てて秘書室に来た時には、ちょうど霧島は何かのファイルを点検しているところだった。
「リニアちゃん、どうかしまちたか?」
「あ、あのっ……支給品の……はぁっ、サイズに関する書類を……はぁ……はぁっ」
走りすぎて喉が灼け付きそうに痛かったが、リニアは何とかおじぎをした。

「ご苦労様でちゅ」
「は……は、はい……」
　大きく息をついているリニアのことを、霧島は心配そうに見やった。
「走ってこなくてもよかったんでちゅよ。もう少し作業してから帰るつもりでちたから」
「ごめんなさい」
「それじゃ、今日はおやすみなちゃい。明日からは訓練でちゅよ」
「おやすみなさい」
　もう一度深々と頭を下げて、リニアは秘書室を退出した。

　バタン。
　リニアが扉を閉めた後、もう一回扉を閉める音が重なる。
「えっ?」
　ちょうど所長室から貴広が出てくるところだった。終業時間なので自室に帰るところなのだろう。
「あ……」
　一瞬、視線が合った。
　しかし貴広はそのまま視線をそらし、リニアなどいなかったかのように歩き出した。
「貴広さん、おやすみですか?」
「ポンコツアンドロイドか」
　貴広はわずかに眉を寄せたが、歩みを止めることはなかった。
　リニアを先導して帰るかのように、リニアが向かうのと同じ方向に歩いていく。
　しばらく歩いていると、おもむろに貴広が振り返った。
「……何でついてくる」
「え、あの……リニアは自分の部屋に戻ろうと」
　そう言うと、貴広はまるで拗ねた子供のようにむっとして抗弁する。
「うるさい。同じ道を通るな。遠回りしろ」

「あ、ごめんなさい……でも、リニア、まだ来たてなので、この通路以外に自分の部屋への行き方、知らないのです」

どちらかと言うとリニアは方向音痴だ。

不用意に広すぎる邸宅の中を歩き回ろうものなら、朝までに帰れない不安すらあった。

「なら、俺が通り終わるまでどこかで時間をつぶせ。仕事以外で、何を好き好んでお前の顔など見なければならないんだ」

ずいぶんな言いようである。

しかしリニアは申し訳なくなってぺこぺこ頭を下げる。

「はい……ごめんなさいです。でも、リニア、どこで時間をつぶせばいいのでしょうか?」

この道以外で自室に帰れないのと同じ理由で、どこともしれない暇つぶし場所に行くのも大変だ。

「なら、廊下を雑巾がけでもしていろ」

「ぞ、雑巾がけですか? でも、用事が終わって帰っている訳ですし……明日は訓練が……」

どうやら思いつきだけで言ったものらしい。

リニアの指摘に貴広は狼狽した表情を見せる。

「世の中、仕事が欲しくてもない人ばかりなんだぞ。仕事があるだけありがたいと思え」

「え……、たしかにお仕事があるだけでもありがたいですよね。でも、もう夜ですし……この時間にばたばた掃除してご迷惑ではないでしょうか」

「つべこべうるさい。やるんだよ!」

思いきり引っ込みがつかなくなったらしい。

貴広はリニアのこめかみに握り拳をねじ込んだ。

「……た、貴広さんっ。そ、そんなぐりぐりしたら駄目です。リニアのネジは取れやすくなっているのです」

「なら、逆らうな!」

貴広の拳がねじられるたびに、どこからかカラカラと軽い音が響き始める。

「あ……何だか……」

「どうした」
リニアの様子に気付いて、貴広はリニアから拳を離した。
「い、いえ、何でもありません……ただ、そ、その、何か頭の中がコロコロして……」
コロン……
リニアの耳から小さなものが落ちた。
よく見ると、それはネジだった。
「あ、何だかリニアの頭の装甲が少し歪んでネジが取れちゃったみたいです。アンドロイドの装甲を歪ませるなんて貴広さんってすごいですねえ」
そう言うと、貴広は苦い顔になった。
「そんなこと言ってる場合か。直しに行くぞ」
「直す？　どこに行かれるのですか？」
何となく嫌な予感がした。
「メンテナンスルームに行きたいところだが、さすがにこの時間では開かないだろう。ヘリポートだったら、簡単な故障くらいならアンドロイドでも何とかなるだろう」
「そうなんですか？」
不思議そうな眼を向けるリニアに、貴広は間が悪そうに告げる。
「お前を壊したことが霧島にばれたら、殺されるからな。その前に直しておこうと思って」
「あ……」
貴広は気付いていなかったが、秘書室から不機嫌そうな霧島が出てくるところだった。
霧島がつん、と貴広の肩をつつく。
「うわぁ!!　出たっ」
「出たじゃ……ないで、ちゅっ!!」
貴広の眉間に重そうなファイルが直撃した。
その後、激痛にのたうち回る貴広と、世にも不機嫌な霧島の二人がリニアに付き添って、ヘリポートまで連れて行ったのだった。
「全く……何で、そんなガキみたいなことばかりす

るでちゅか！」
　手際よくリニアのネジを留めてくれた霧島は、開口一番上司を叱りつけていた。
「うめぼしぐらい、上司とのスキンシップの一環として認めてくれよ」
　どうやらあの攻撃は『うめぼし』と言うらしい。リニアは妙に感心しながら聞いていた。
「ったく……大体、リニアの頭のネジが外れているのがいかんのだぞ！」
「はい。申し訳ありません。貴広さんと霧島さんにご迷惑をかけてしまって」
「ああ、感謝しろよ」
　偉そうにうんうんとうなずいてみせる貴広に、再びファイルが炸裂した。
「霧島、痛いって！　ファイルを縦にして殴るのやめてくれ！」
　霧島は貴広にはつん、と知らん顔をして、リニアに向き直った。
「リニアちゃんも、あまり所長のなすがままでは駄目でちゅよ。この人は基本的には、こんな性格なんでちゅから」
「は、はい……」
　冷静そうな外見とはずいぶんな違いである。
「ちゃんと、メンテナンスルームの整備長のおじさんに一度診てもらうでちゅ」
「そうだな。一度は診てもらう必要があるだろう」
　メンテナンスルームという言葉を聞いて、リニアは思わず逃げ腰になっていた。
「さすがにこの時間では開けられませんでちゅが、来週の月曜なら」
　この島の電気事情は、普通なら考えられない惨状らしい。人間の住む場所ではないと、来る前に飯島がぼやいていたのを思い出した。
「では、私はこれで失礼するでちゅ。所長、ちゃんとリニアちゃんを部屋まで送ってあげるでちゅよ」
　そう言うと、霧島は扉の方へ向かった。

「な、何で俺が……」
霧島の冷たい視線が刺さり、貴広がうなだれる。
「じゃ、リニアちゃん。おやすみなちゃい」
「ありがとうございました」
去っていく霧島に、リニアは頭を下げた。
二人きりで取り残されると、やはり居心地が悪い。きついことを言われるのではないかと思うと、やはり身がすくんでしまう。
「では、リニアも失礼させていただきます」
「こら、勝手に出ていくな」
「な、何でですか？」
「お前を送っていかなければならないからだ」
「あ、そんな……大丈夫ですよ。大した故障じゃなかったし、それに貴広さんにあまりご迷惑はおかけできませんよ」
わざわざ社宅まで所長直々に送ってもらうというシチュエーションだけでも緊張するのに、ついさっきポンコツであることを自ら証明してしまったばかりだ。肩身が狭すぎる。
できれば遠慮したかった。
しかし貴広はきっぱりと告げた。
「うるさい。付き添うといったら付き添う」
口ではきついことを言いながらも、多少は気遣ってくれるのだろうか。
「……ありがとうございます、貴広さん」
そう思うと、何となく嬉しかった。

人気のない夜の庭を二人は抜けていく。
庭の果実は夜になると一層甘く香る。
リニアは黙ったまま、暗がりの中を貴広に先導されて歩いた。
社宅が見えてきた頃、リニアはおずおずと口を開く。
「あ、ありがとうございます。貴広さん、リニアと一緒にいるの嫌なのに……付き添っていただいて」
貴広は軽くリニアの頭を小突いた。

「いた……」
「……冗談と本気の区別ぐらい、つけられるようにしておけ」
ぷい、と眼をそらしつつ、貴広が独り言のように呟く。ほどなく社宅の前まで着くと、貴広はリニアの頭をぽんぽんと叩いた。
「着いたぞ。とっとと部屋で休め」
「あ、あの、貴広さん……」
やさしいのか意地悪なのかさっぱり解らない所長は、軽くうなずいてリニアの言葉を促した。
「ありがとうございます……」
リニアが一礼して歩き出そうとすると、貴広は眉をひそめて呟いた。
「リニア」
「はい?」
「……やはり、お前は訓練に堪えられる体だとは思えない」
眼鏡が灯りを反射して、貴広の表情を窺うことはできない。
「隷に言って、本社に帰してもらった方がいい」
何も言えないリニアを、貴広は一瞥すると歩き出した。
リニアは闇に消えていく貴広の後ろ姿を、ただ黙って見送った。

廊下にはわずかに電灯が灯っているが、中はかなり暗かった。リニアは一度瞼をきゅっと閉じて、暗闇に眼を馴らした。
しばらくして眼を開けると、さっきよりよほど明るく感じる。リニアはすり足をするように自分の部屋に向かった。
ここで使われている電灯は、かなり旧式のものらしい。隷と一緒にお茶を飲んだ時にはあまり気にならなかったが、一人で歩くとやはり暗く感じる。
(お……お化け、出そうですね)
生活音がほとんど響かないので、余計に心細い。

思い出せる記憶の範囲内では、リニアはほとんど隷と一緒にいるか、異常に明るいメンテナンスルームや研究室にいるかのどちらかだったのだ。
たった一人で、暗さに脅える機会はほとんどなかったはずだ。
リニアは慌てて自分の部屋に入り、服を着替えてベッドに潜り込んだ。
（やっぱり、帰してもらった方がいいのかもしれないですね）
命令を無視して帰れば、ポンコツのリニアはスクラップにされてしまう。それは解っていた。しかし、貴広の言葉をはねのけて戦おうという元気がどうしても湧いてこない。
（明日、隷さんに頼んでみよう……）
リニアは無理やり頭から毛布をかぶって眼を閉じてしまった。

●
●
●

お化けがいるよ。
お化けがいるよ。
父の裾を引いて、子供がすすり泣いている。
『怖い夢を見たの』
見上げる子供の涙を、父は拭ってやる。
『大丈夫だよ。お父さんがちゃんと見張ってるからね……お前はもうおやすみ……』
父に抱かれてベッドまで連れて行かれた子供は、いつとも知らず眠りに就いた。
もうお化けは現れない。
お父さんがいてくれるから。
名前を呼んでくれるから。

●
●
●

「ん……」
朝が来て、リニアはけだるい体を起こしながら声を漏らした。
(さっきの夢、何だったんでしょう……)
ネジが取れないように気を付けて頭を振ると、枕元に置いたスケジュール表を確認した。今日は敷地内に馴れるのを兼ねて、庭の掃除だった。食事や休憩の時には、霧島が点検を兼ねて知らせに来てくれるらしい。
(でも、早めに行かないと……リニア、とろいから今日中に掃除できないかも)
今日は普段の予定表より早めに朝食をとっておくべきだろう。
リニアは制服のピナフォアドレスに着替え、身支度をすると部屋から出ていった。
早朝の食堂はまだほとんど人気がなかった。
ほとんど無人の食堂の中で、おばさんとツナギ姿の初老の男性が向かい合って食事を摂っている。
どうやらこれも手作りの食事らしい。
「おはようございます」
「おや、リニアちゃん。おはよう。早起きだね。あんた、リニアちゃんだよ」
「おう、この子がリニアちゃんか……」
にこにこと笑う男性は、嬉しそうにリニアを見やった。まるで可愛い孫を見るかのような笑顔に、リニアも思わず嬉しくなってしまった。
「うちの亭主だよ。整備長なんだ。メンテナンスルームに行く時には、リニアちゃんも顔出してあげとくれ」
「初めまして、リニアです」
「よろしくな。若いもんは俺のことをおやじさん、なんて呼んでるから、そう呼んでくれればいい」
「はい……おやじさん、ですか」
「そうそう」
リニアは頭を下げた。

「じゃ、あたしはリニアちゃんに何か作ってあげるから、ちょっと相手してあげとくれよ」
おばさんはエプロンの紐を締め直し、自分達のトレイを持つと、厨房に向かった。
おばさんが視界から消えると、おやじさんは声を低くしてリニアに訊いてきた。
「そう言えば、霧島の嬢ちゃんに聞いたんだが、リニアちゃん……昨日、ネジが外れたんだって？」
「あ……済みません」
リニアは間が悪そうにうつむいた。
「メンテナンスルームに誰もいなかったのが悪いんだから、そんなにかしこまることはねえよ」
「そんな……その、えっと」
「そのうちちゃんと診てやるから、時間の空いた時にでも、メンテナンスルームに来てくれや」
そう言うと、おやじさんは席を立った。
リニアは笑顔で会釈をしながらも、ひとつのことが頭から離れなかった。
（でも……メンテナンスルームでお世話になる前に、リニア、スクラップ行きかもしれないですよ）
所長である貴広に『本社に帰してもらった方がいい』とまで言われてしまったのだ。
この島は、あまり出来のよくないメイドの訓練所だというのに、そこで訓練を受けることができないほどの、限りなくお粗末なレベルだと太鼓判を押されたのと同じだった。
「うちの宿六はもう行っちまったのかい？　ほら、リニアちゃん。たくさんおあがり」
「あ、は、はいっ……いただきます」
鮭の切り身に大根の味噌汁。元気の出そうなオクラのおひたし。家庭的な朝食を見て、リニアは少しだけ悲しい気持ちが消えた。
この島にいる人達は、まだ来たばかりで、しかもポンコツのリニアに対しても、とてもやさしい。
この島の緑豊かな景色もまた、リニアの心をなごませていた。

いつ、この萌えっ娘島から去らねばならないか、リニアには予想がつかないが、それまでの短い間だけでも、ここでの生活を感謝して、楽しんでおこう。
そう思った瞬間、リニアの中から小さな記憶が転がり出る。
食事の前に……誰かがしていたこと。
「いただきます」
リニアは自然に掌を合わせてから箸を取った。

「まだちゃんとメンテナンスを受けてないでちゅから、今日はあまり無理をしないでくだちゃいね」
物置の中身をレクチャーを受けた後、霧島に心配そうにほうきとちりとりを手渡された。
「まだ本調子じゃないですから、掃除ロボットは使わない方がいいでちゅ」
「は、はい……」
もちろん、そんなものを使う気は全然なかった。昨日少し触ってみた時には、どうも動作が怪しく、これからもまともに使いこなせる自信はなかった。
触らずに済めばそれにこしたことはない。
「後で点検に来まちゅから、敷地に馴れるつもりでゆったりやるでちゅ。それじゃ、頑張るでちゅよ」
霧島が立ち去ると、リニアはポケットから見取り図を取り出した。一人では一日で掃除し終わるのは不可能な広さだった。
明らかに汚れている場所を掃除したり、片づけものをしながら場所の把握をしていくということなのだろう。
今日は風も気持ちいいし、お散歩日和だ。リニアは嬉しくなって、ほうきを持ったまま歩き出した。
風が、果物や花の匂いを乗せてそよぐ中を、リニアはほうきを動かしながら歩いた。
（いいお庭ですね）
植物の生育が早い南の島では、フランス風の幾何学模様に刈り込んだ樹々などはないが、丁寧に手をかけられた庭は、とても居心地がよかった。
「あ」
隷が貴広に対して、腐った果物を例に挙げて話をしていた場所に差しかかる。
腐った果物は、熟れすぎた果実独特の、吐き気のするような甘さとカビ臭さを放っていた。
（隷さん、この臭いを嫌がってましたよね）

リニアは、腐った果物をちりとりに載せる。
その時、ふと脳裏に貴広の言葉がよぎる。
『だが……腐った果実は土に還ることができる。それだけでも充分だろう』
しばらく考えてから、その果物は樹の側に穴を掘って埋めることにした。
どのみち、樹からまた果物が落ちれば同じことが繰り返されるのは解っているのだが、何となく土に還らないように捨ててしまうのは嫌だった。
リニアは掘り返して新しくなった土をしばらく見ていたが、やがて歩き出した。

掃除をしつつ歩き、歩いては片づけを繰り返しているうちに、すっかり陽が高くなっていた。
「はぁ……はぁ……ひ、広いですよ……」
この広い庭は思った以上に入り組んでいて、霧島が敷地に馴れるつもりで、と言ったのは当然の言葉だと納得してしまった。
いつの間にか息が上がってしまっている。
勾配のきつい坂こそないものの、曲がりくねった通路を通ったり、花壇などを迂回していくと、相当歩くことになるのだ。
「あれ？」
前から風が流れてくる。葉ずれの音がさわさわと響き、リニアは立ち止まって耳を澄ませた。
「気持ちいい……」
髪が揺れ、くすぐったそうに瞼を細める。
リニアは風を辿って、歩き始めた。

「うわぁ」
突然、視界が広がった。
なだらかな丘の上に立ったリニアは、真っ青な海を見下ろしていた。
(こんな風に海を見たの、初めて)
リニアは瞼を閉じて、風の音に耳を澄ませた。
潮風は髪にも肌にも体内の部品にも悪いらしい

が、風に吹かれていると、とても心地よかった。
（あ、音が……聞こえる）
耳をかすめるわずかな音。
髪の揺れるさらさらという音ではない、もっと、リニアが馴れ親しんだ音。
（何？）
規則的な、決して重くないおもちゃのような音は、心の中に響き、繰り返す。リニアは集中して、その音が何なのか捉えようとした。

ちっく、たっく、ちっく、たっく

（この音は、何？）
心の中を温める、小さな響き。
リニアはその音が何なのか、欠落した記憶の残りから探し出そうとした。
その時。
「リニア？」
「隷さん」
振り返ると、丘に隷が上がってくる姿が見えた。
「こんなところでどうしたんだい？」
「いい風が吹くんですよ。さっき見つけたばかりなんです。海も綺麗だし、すごく好きになっちゃいました」
「そうか」
隷はリニアの隣に立った。
「ここで、風の音を聴いていたんです。何だか懐かしいみたいで」
「風の音、か。そうかもしれないね」
隷はわずかに笑みを漏らした。
「隷さんはお散歩ですか？」
「……そうだね。そんなところだよ。あと、リニアを探していたんだ。霧島さんからの伝言を伝えようと思ってね」
「そうなんですか？」
「もうお昼なのに見当たらないから、昼食を摂るよ

うに伝えてほしいと言われたよ。それと、体が心配だから根を詰めないように、とね」
そこまで言うと、隷は笑みを消した。
「ネジが外れたらしいじゃないか。あまり無理をしてはいけないよ」
「あ、でも、そんなに大したことじゃないんですよ。霧島さんにネジも留めてもらって、もう元気ですから。ほら」
リニアは元気であることを見せようと、ぴょんと跳ねてみせた。
「それで、貴広とはうまくやっているかい？」
「あ……」
本来なら間髪入れずに『よくしてもらっています』と返事をすべきなのだろうが、言葉が出なかった。
悪い人ではないのだけは解るし、時折リニアを気遣ってくれている様子もあるのだが、やはり本社に帰れと言われたのが堪えているらしい。
笑顔を作るタイミングが遅れてしまう。
「何か言われたんだね？」
「そんな……こと、ないですよ」
「リニアは、嘘をつくのに向いていないよ。何かの行き違いや誤解があるのかもしれない。話してみれば、案外何でもないことかもしれない」
「そうでしょうか」
「そうでなかったとしても、お互いに考えていることが解った方がいいと思うよ。解らないままで悩んでいるよりはね」
リニアは小さくうなずき、貴広との会話について話し始めた。
隷は話を聞き終えるまで黙っていたが、やがてぽつりと呟いた。
「リニア、彼が何と言おうと、僕は君を本社に連れ戻すつもりはないよ。もちろん、貴広にもそれを強制する権利はない」
「お仕事のこと、だからですか？」
「それもあるけど、それ以上に……ここに来ること、

貴広と君が出逢うことは、君にとって大切なことなんだよ」
リニアは言葉の意味を摑めず、小さく首を傾げた。
「あの、もしかして貴広さんとリニアは、知り合いだったのでしょうか？」
「……リニアは、神崎貴広と出逢ったことなど、彼が生まれてから一度もないよ」
隷は曖昧に笑った。
「そういうことではなくて、もっと根元的な部分で、君達は出逢わなければならなかったんだよ」
「えっと……」
「今は解らなくてもいいよ。そのうちきっと解るから。あと、貴広には僕から伝えておこう。彼は素直な方とは言いがたいしね。だからリニアも懲りずに頑張ってみてほしい」
「済みません……ありがとうございます」
リニアが肩を落とすと、絶妙のタイミングでお腹が鳴った。それを聞いて隷がくすくす笑う。

「そろそろ昼食を食べに行った方がいいね。ずっと君を見つけられなかったら、霧島さんに叱られてしまうよ」
隷がリニアの肩をぽん、と軽く叩く。
「リニアはやさしい子だから、僕に対するみたいに貴広にも接してやってくれないか。彼みたいな風変わりな男でも、リニアの笑顔を見ているうちにきっと心を動かしてくれると思うよ」
「はい」
隷の言葉は多分、他の相手から言われれば恥ずかしくて真っ赤になってしまうようなものだろう。
しかしリニアは素直にうなずいていた。
「じゃ、行こう」
二人は連れ立って歩き始めた。
その時隷が海の方を冷たい視線で確認していたことに、リニアは全く気付かなかった。

午後は夕陽がどっぷりと暮れてから、霧島が息を

切らしながらリニアを探しにきた。
「リニアちゃんはよく働くでちゅね。でも、無理はしちゃ駄目でちゅ」
「済みません」
「夕食を摂ったらすぐ、メンテナンスルームに行くでちゅよ。おやじさんに頼んでおいたでちゅ」
「あ、でも……」
メンテナンスルームに行くのは、明日ではなかっただろうか。
やはり、ポンコツ状態には自信のあるリニアにとって、メンテナンスルームは怖い場所なのだ。リニアは思わず身構えてしまった。
リニアの態度を違う意味に解釈したのか、霧島はにっこりと笑ってみせる。
「大丈夫でちゅよ。お歳を召してはいまちゅけど、おやじさんの腕は確かでちゅよ。それに、今日は様子を診るだけでちゅ」
その笑顔のせいで、ただ単にメンテナンスルームが怖いとは言えなくなってしまった。
「解りました。行ってきます」
リニアはそう言うしかできなかった。
リニアは見取り図と首っ引きで地下のメンテナンスルームを探し当てると、やっと薄暗い階段を下りて向かうことができた。
「こんばんは」
「嬢ちゃん、やっと顔を出してくれたかい」
おやじさんの顔は、笑うとくしゃっと眼がなくなる。緊張していたリニアは、そのことに気付いて少しだけほっとした。
「その子がリニアちゃんなんですか？　可愛いっすねえ。おやじさんばっかり話してないで、俺達にも紹介してくださいよ」
奥の方から若い整備員が声をかけてきて、リニアは思わず赤面してしまった。
「全く……普段は休みに出てきもしないくせに、女の子がいるとずいぶん真面目じゃねえか」

「あ、あの……」
「最近、アンドロイドの子が来なかったから、女っ気がなくてよ。それに初期型ってえと、そろそろ部品自体もいかれてきてるんじゃないかと思って、こいつらにもいろいろ話してたところだよ」
どうやらリニアは知らないうちに、いろんな場所に心配をかけていたらしい。
「貴広も嬢ちゃんが壊れてないか心配していたよ。今日は休みだからしっかり診てやることはできんが、応急処置よりはましなメンテをしてやるからな」
おやじさんに言われるまま、軽い点検を受けたり、ネジを締め直してもらったリニアがメンテナンスルームから出ることができた頃には、外はすっかり寒くなっていたのだった。
（貴広さん、リニアを心配してくれてたんですね）
夜になり、少しだけ肌寒くなってきた空気を感じながら、リニアは社宅の方へ歩いていた。
既に空は暗く、星がまたたいている。
しかしまだ、仕事をしている者はいくらかいるようで、時折メイドや男達が歩いていた。
（ちゃんと、貴広さんとお話するべきかも……）
隷もおやじさん達も、貴広は多少偏った性格ではあっても、決して悪意を持っていないと考えているようだ。だとしたら怖いと思ってしまうのは、リニアの気にしすぎなのかもしれない。
（親切にしてくれてる人を怖がってるままじゃ……やっぱり駄目ですよね）
勇気を出して、貴広と話をする機会を持つべきなのだろう。お茶でもいれて、ゆっくりとなごんでもらえるようにすれば、少しはぎくしゃくした雰囲気も消えるかもしれない。
もし自分なら、多少うまくいかない相手であっても、その人がお茶をいれて、お話ししようと言ってくれれば、例え相性の悪い相手であっても、何とか心を開く努力をするような気がする。

リニアは小走りで自分の部屋まで急いだ。

用意を済ませ、そこに座っているリニアに、少し早めに仕事を終えた霧島は不思議そうに視線を投げる。

「何してるでちゅか？」

「貴広さんをお待ちして、お茶を飲んでぃただこうと思いまして」

「……所長は残業だから、もう少しかかると思いまちゅよ」

しばらく呆気にとられたようにリニアを見ていたが、やがて小さく溜息をついた。

「……終わったら片づけておいてくだちゃい」

「はい」

にこにこしながら返事をするリニアにうなずいてみせると、霧島は廊下を歩いていった。

それから一時間二十分くらいたった頃。所長室の扉が開き、貴広が出てきた。

「あ、貴広さん。お仕事お疲れさまです」

貴広はしばらくの間口を利かなかった。

硬直したようにリニアと、その下に敷かれている茣蓙を見つめていたが、やがて声を出した。

「……何だ、これは」

「お仕事が終わったら、おいしいお茶でもおいれしようと思いまして」

眼をきらきらさせながら微笑むリニアに、どっと疲れた様子で貴広が訊く。

「いや、お茶なら仕事中でもいい……というか、お前、ここで俺が終わるの待っていたのか？」

「はい、リニア、これといって特技はないのですが、人を待つのは得意な方ですよ」

貴広は深い溜息をついた。

「お仕事中だとお邪魔になるかなと思ったのですが、やはり仕事が終わった後でも駄目でしょうか」

「廊下でティーセットを広げるというのは、なあ」

そこまで言うと、貴広はゆるゆると首を振った。

「お前に頭ごなしに怒っても、解らないだろうな」
諦めてその莫蓙に座ると、とりあえず莫蓙の上に置かれている物体が気になったらしい。
いぶかしそうに視線を投げた。
当然である。
綺麗な板の上にシュンシュンと音をたててお湯が沸いている茶釜があり、他にも普段見ることのないような道具が一通り揃っていた。
「あのな、リニア」
「はい、少しお待ち下さいね。お菓子、どうぞ」
リニアは貴広に練り菓子を勧めた後、柄杓でお湯をすくって茶碗に入れると、すぐにお湯を捨てた。
「お、面白い……お茶の入れ方だな」
「これは抹茶といって、日本のお茶なんですよ」
「抹茶？　グリーンティーのことか」
どうやら貴広は抹茶を一度も飲んだことがないらしい。緑色の粉を珍妙な物体を見るかのように見入っている。
細かい説明をすると長くなるし、リニアもちゃんと説明できるかどうか怪しかったので、曖昧に照れ笑いを浮かべた。
「はい。まあ、細かい作法は抜きにしてますが」
貴広は物珍しそうに素朴な餡の玉を口に放り込みながら、リニアの動作を見ている。
その間にリニアは手早くお茶をたて始める。緑色の液体を凝視しながら、貴広がぽつりと呟く。
「ほ、本当にグリーンなんだな」
「はい。緑色で、とっても涼しげでいいですよね」
貴広は感慨深そうに鮮やかな緑色の液体と、リニアの茶筅さばきを交互に見ていた。
「……」
その間に呆れたような表情が消え、何事か考え込んでいたようだった。
リニアはややためらったが、茶碗を貴広に差し出して声をかけた。
「あの……」

「何だ？」
「できましたよ」
やはり考え事をしていたのだろう。貴広ははっと我に返った。
「あ、ああ……ありがとう」
背筋を正して一礼すると、茶碗に口をつけてゆっくりと飲み干した。
その後、わずかなタイムラグを経てから、自分が口を付けたところを拭う。
渋みの強いお茶を飲んでも、貴広の表情は変わらない。
「あ、あの」
「うまい。こんなお茶は飲んだことがない」
貴広が微笑んでくれる。
その顔を見ていると、今までできついことを言われたことなど吹っ飛んでしまうほど嬉しかった。
「わぁ、本当ですか。よかった。何となく残っている記憶だけで作ってみたので、うまくいくかどうか心配だったのですよ」
「うまいのだが……リニアな」
「はい？」
「廊下でお茶なんていれるもんじゃないぞ」
「あ、そ、そうでしたか」
結局叱られてしまったが、それでも今までよりも貴広の言葉もやわらかい。
「まあいい。これからは廊下でお茶はいれるなよ」
「はい。これからは廊下ではお茶をいれないようにします……」
ぺこりと頭を下げた時、貴広が体の向きを変えた気配がした。
「お茶をいれているのかい、リニア」
「あ、隷さん、こんにちは」
廊下を歩いてきたのだろう。いつの間にか隷がそこにいた。
隷は靴を脱いで、莫蓙の上で正座をする。
「僕にもいれてくれるかな」

「はい……あ、でも……」
戸惑ったように貴広を見ると、貴広は小さくうなずいた。
「いれてやれ」
「はい、ありがとうございます」
隷には確か、前もお茶をたてたことがある気がした。その記憶には間違いがないらしく、隷は馴れたように自分のお茶がたてられるのを待っていた。
「どうだ、貴広。優秀な娘だろう」
「お前はそんなこと、本気で言っているのか?」
「ああ、僕は冗談は好きではない。戯れなんかでそんなことなど言わないさ」
「本気で言っているとしたら、お前にはこの仕事は向かないだろうな」
低い声で話す隷の前に、リニアは茶碗を置いた。
「はい、隷さん。はいりましたよ」
隷が作法通りに飲み干すの姿を、やはり以前にも見た憶えがある。多分、過去にも同じことをしたのだろう。
こういう時には記憶の欠落がもどかしい。
「結構なお手前」
「ありがとうございます」
リニアはぺこりと頭を下げた。
「相変わらず見事だね」
「見事とか見事じゃないとか以前だろうが」
「こういう場所でも茣蓙さえ敷けばお茶は楽しめる。それでいいじゃないか」
「そんな訳ないだろうが」
呆れて肩をすくめる貴広に向かって、隷はわずかに微笑む。
「お茶の場所などセッティングの問題だ。ここだって、充分お茶を楽しめるロケーションだよ」
「……そうか?」
「それに大事なのは心だ。リニアが貴広をもてなそうとする、その心こそが大事なんだよ」
「はいはい、解ったよ」

「あ、でも、こういう場所ではやってはいけないと教わった方がいいですよ。だから、貴広さんに感謝してますよ。隷さん」
「そうか……」
「はい」
隷はリニアにうなずいてみせた。
「さてと、お茶会はお開きだ。とっと片づけてしまってくれ」
「はい」
リニアは茶道具を隅にまとめ始める。
莫蓙をたたんでいるリニアから少し離れ、貴広と隷が話をしていた。
「いつまでここにいる気なんだ、隷」
「何故だ？」
「そりゃ、島の管理者として聞くだろう」
「あと数日……いや、いられる限りここにいる」
ばさっ、ばさっと莫蓙をはたく音で、二人に声が時折聞こえなくなる。
一番重い茶釜と莫蓙を片づけに戻って、小物を取りに来た頃には、ちょうど隷が貴広の側を離れようとしているところだった。
「……ああ。時計は、バラバラだった時をひとつにまとめる魔法の機械だ。だから、大切にするんだね」
(時計？　何のことでしょうか？)
そこだけしか聞いていなかったリニアと同様に、貴広もいぶかしそうな表情を浮かべている。
「何だそれは」
「ふっ、解らなくていいさ」
リニアは小物を入れた箱を持って、二人にぺこりと頭を下げる。
「これで終わりです。それではリニアも部屋に戻らせていただきます。お疲れさまでした」
「ああ」
「僕もそろそろ部屋に戻るよ。貴広」
リニアが戻ってきたことで、話は何となくお開きの形になったらしい。三人はそこで別れてそれぞれ

の部屋に戻ることになった。

翌日、訓練の後で、貴広に付き添われてもう一度メンテナンスルームに行った時には、さすがにリニアの体調もかなりよくなった。
「それにしても……今時、回転扉をくぐれない奴がいるとは思わなかった」
「済みません」
メンテナンスルームに入る時にも、回転扉を高速で回してしまって顔をぶつけるというドジを踏んだせいで、運ばれた時には余計に壊れた可能性もかなり高かった。
「どうだ、リニア。具合はよくなったか」
「はい。大変楽になりました」
リニアは不自然な笑顔を浮かべている。
しかし、それでも取り替えていない部品が今もなお錆び続け、摩耗し続けているのが解る。
自分の中で響く不協和音。

いつ壊れるか解らない体であることを、おやじさんもきっと、貴広に説明したことだろう。
そして、リニアが帰るべきだと思っている貴広は、間違いなく『役立たず』の烙印を押すに違いない。
そう思うと、眼の前が真っ暗になった。
地下のメンテナンスルームから、黙って上がっていくリニアは、考えれば考えるほど悲観的な気分になってきた。
「あの、リニアの体……すごく、古かったですよね。やっぱり……」
「まあ、そりゃそうだな」
「かなり、ガタがきてましたでしょうか」
死刑宣告一歩前、というリニアの表情に気付かず、貴広は言葉を続ける。
「ああ、そうらしいな。俺はよく解らないが、おっさんはそれらしきことを言っていた」
やはりそうなのだ。
自分でこうだろうと思っているだけの時と違い、

心がすうっと冷えていく。
自分のことを信じてくれた隷や、ここで出逢った人達に対して、お荷物以外の何物でもないというのが辛かった。
萌えっ娘島は確かに、文明的な生活とは無縁の場所で、ここでの訓練は田舎暮らしという穏やかなイメージよりも、絶海の孤島での悲壮さを思い起こさせるらしい。
樹々や花の生々しい匂い、潮風。最近の人はそういうものたちから隔絶されている。
それが『よい暮らし』なのだと、大多数の人達は思っているらしいのは知っている。
しかし、リニアにとってこの島はとても居心地のいい場所だった。ここにいる人達も好きだった。
だからこそ、何もできないまま、この島から追い出されたくはなかった。
「あのですね、貴広さん」
「何だ？」
「あの……リニア、古くても、できる限りのことをします。リニア、自分でもかなり古い機械なのは解っているのです……それでも、リニアはできる限りのことはします……」
貴広は黙ってうなずくと、リニアの言葉を促した。
「でも……それでも、も、もし……もしですよ。今の検査で、もう使い物にならないぐらい古いのが解ったのでしたら……あの……」
ただでさえ、リニアの働きは他のメイド達と較べてもあまり優れていない。
家事などの為に導入されている最新鋭の機械も、当然のように触れない。それどころか壊してしまうありさまだ。もちろん、その『最新鋭』にしたところで、リニア以外のメイド達にとっては昔から馴染んだ機械だ。
リニアがつまずくポイントを貴広を含めた全員が予想できず、アドバイスが後手に回ることも多い。
うまく言葉が出てこなかった。

処分してくれ、返送手続きをしてくれと、それだけ言えば済むことなのに、喉の引っかかったように吐き出すのが辛かった。
「それは、もう……仕方ないかなあと思います。リニアがここにいられなくても、それはそれで仕方ないことだと思います」
貴広の眼にはどんな感情が浮かんでいるか、眼鏡越しでは全く解らない。
それでもリニアは言葉を紡いだ。
「貴広さんや隷さんに、これ以上ご迷惑をおかけできませんから……だから」
貴広は長い間何も言わなかった。
そして。
パコン
軽い音を立てて、リニアの頭を叩いた。
「いた……」
「貴様、そんなことでメンテナンスルームを嫌がっていたのか。現状では貴様は、俺が本社から預かっているものだ。どんなポンコツでも最後まで面倒は見る。それがこの島の管理者としての俺の仕事だ」
貴広の視線は相変わらずの眼鏡越しで、細かい表情などは解らなかったが、それでも何となく気配のやわらかさは伝わってくる。
「あ、ありがとうございます」
眼を輝かせて見上げるリニアに、貴広は軽くうなずいてみせた。
「せいぜい一ヶ月ほどの研修だが、頑張るんだな」
「はい！」
あまり期待してはいないが、という含みを匂わせつつも、一瞬だけ、貴広の口許に笑みのようなものが浮かんでいた。

貴広と別れ、社宅の方へと歩いていくリニアは、庭を歩く人影を発見した。
「あ、隷さん」
「リニア、メンテナンスしてもらったのかい？」

「はい。ネジがコロコロしなくなりました」
「よかったね」
暗がりの中で、隷が微笑む気配がする。
「僕がいなくなっても、リニアはちゃんとやっていけるね」
「え」
リニアは思わず言葉に詰まってしまった。
「もう、帰っちゃうんですか?」
「仕事があるからね。ここで済ませることが終わったら、当然帰らなくてはならないよ」
「でも、貴広さんもきっと、もう少し隷さんとお話したいんじゃないかと思うんですけど」
「貴広は、どうかな」
隷の口から、かすかに溜息のような笑みが漏れる。
「どのみち、第25663号島での用件が済んだら、本社でいろいろしなければならないこともあるからね。旧友と親交を深めている余裕はなさそうだ」
「そんな……」
リニアが見る見るうちにしょげてしまうと、隷は穏やかな気配を向けてくる。
「隷さんは、寂しくないんですか?」
隷はしばらく黙っていたが、やがてゆるゆると首を振った。
「僕と貴広は、昔の仕事仲間でしかないからね。それに貴広の方は僕がずっと居座っていたら、きっと落ち着かないだろうな」
「そうなんですか?」
「前の部署は、ここほどなごやかな場所ではなかったんだよ。親睦を深めるようなこともなかった。彼から学んだことも……決してリニアに教えられるようなことじゃない」
初めてこの島に来た時の隷達の態度から、彼らの関係が楽しいものではないことは薄々察していたが、こんなにやさしい隷が誰かのことを割り切った口調で話すのは悲しいものだった。
「隷さんは、貴広さんがお嫌いなんですか?」

「……いや」
隷は曖昧に笑ってみせた。
「嫌いで済まされたら、どれだけ楽かと思うこともあるけどね」
多分、隷と貴広の間にあったのは、リニアが入り込めないような緊迫した関係なのだろう。良きにしろ悪しきにしろ、その時間は隷に大きな影響を与えている。
そういうことなのだろう。
(でも、貴広さんって無愛想でちょっと変な人みたいに見えるんですけど……)
しかし、どうやら貴広はこの島に来る前と、人となりが変わってしまったらしい。もしかしたら以前は緊張感に溢れた怖い男性だったのかもしれない。
(そう言えば飯島さんって人は、怖い感じの人でしたよね)
リニアに向けられた酷薄そうな眼は、時々すくみ上がりたくなるような冷たさをたたえていた。彼と同じ冷たさを貴広が内包しているというのは、あまり考えつかなかった。
「ほら、リニア。そろそろ部屋に帰った方がいいんじゃないか。明日も訓練だからな」
「はい。でも、隷さんは？」
「僕は、もう少し夜風に当たっていくよ。おやすみ、リニア」
「おやすみなさい」
小さく手を振る隷に頭を下げて、リニアは歩き出した。

●●●

空を見ていた。
窓から見える空は小さくて、風に当たることもできないけど、それでも空を見るのが好きだった。
またいつか、あの丘に行けるかな。

約束をしたから、もう一度、あの場所に行かなきゃいけない。

あの丘で、待ってるひとがいる。
小さな約束のために、待っててくれるひとがいる。
だから、私は……

自分の耳に聞こえなくても、ガラス越しでも風の音に耳を澄ます。
丘の上であの子が聞いている音を、私も聞けたらいいのにと思いながら、ただ、耳を澄ます。

●●●

「あ……」
頬が濡れていた。
夢を見ているうちに泣いてしまったらしい。
窓を見ると、まだ外は暗い。目覚まし時計が鳴る時間まで、まだ少し余裕があった。
隷と一緒に本社にいた頃には、これほど頻繁に夢を見ることはなかった。
耳のあたりまで濡れた涙を、指でなぞる。どうやらある程度長い時間泣いていたものらしい。
リニアはピナフォアドレスに着替えて軽く身支度すると、顔を洗って外に出た。
(今日は、貴広さんを起こしに行く日でした)
この時間にはまだ活動している人数は多くない。時折すれ違う人に頭を下げながら、貴広の自室を目指して歩く。
この時間まで仕事をして、朝になって眠る為に自室へ戻るメイドもいるようだ。深夜までかかるカリキュラムもあるらしい。
頑張らないと、と心の中で呟きながら、リニアは廊下を歩いた。

4　夢の気配

「こら！　リニア。寝るなあああっ！」
耳許で貴広の声がするのに気づき、リニアは瞼を開けた。
「あえ？」
さっきまで寝心地のいいベッドに突っ伏していたリニアは、しばらくの間ぼんやりと貴広を見つめていたが、再びぱたりと伏せてしまう。
「この馬鹿野郎」
ぽかりと頭を叩かれ、徐々に眠気が醒めてくると、やっとリニアは自分がどういう状態なのかを悟った。
「あ、たかひろさん……おはようございます」
「貴様、こんな場所で何をやっている」
貴広は険悪な顔でリニアを睨んでいる。眠気のあまり、まともに返事もできないリニアの頭が、再び叩かれる。
「貴様、オレをなめているのかあああっ!!」
周囲に響き渡る大声で、やっとリニアの頭ははっきりと覚醒した。慌てて体を起こし、ぺこぺこと頭を下げる。
「ごめんなさい。貴広さんを起こしに来て、寝てしまったようですっ」
リニアの答えは当然貴広の気に召すものではなく、またリニアの頭を叩かれることになった。
メンテナンスルームに行く前だったら、ネジがいくつも外れているところだろう。
荒い息をつきながら、貴広はじろりとリニアのことを睨んだ。
「貴様、一体何で俺の上で寝ているんだ」
「え」
そう詰問された時、今まで朧気だった記憶がすっかり甦った。
この部屋に入ってきたリニアは、気持ちよさそうに眠る貴広の顔を見た時に、起こすのが気の毒にな

ってしまったのだ。
そのまま時間ぎりぎりまで見ていようと思ったのが敗因だったらしく、寝息をたてる貴広の顔を見ながら自分も眠ってしまったらしい。
真っ赤になって説明するリニアのことを、貴広は呆れたような眼でしばらく見ていたが、おもむろに息を吸う。
「今度から速効で起こせ」
そう告げると、貴広はもう一回リニアの頭をペシンと叩く。
(貴広さんって、いじめっ子なのかも)
他の人間なら逢った当日に解りそうなことを、リニアはやっと気付いたのだった。
それから朝食を摂り、訓練に戻ったリニアが向かわされたのは庭だった。
庭木の剪定と鋏の手入れの為に、あちこちを走り回っている最中、食堂から出てきた整備員の男性に声をかけられた。
「今日、本社から来た人、帰っちゃうよね。リニアちゃんは見送りに行かないの?」
初耳だった。
昨夜は隷がそれらしい話をしていたが、昨日の今日でいきなり帰ってしまうとは思わなかった。
「それ、いつですか?」
「ちょっと前にヘリが来たから、もうそろそろ行くんじゃないかな」
「ありがとうございますっ」
リニアは選定鋏を目立たない場所に片づけると、慌ててヘリポートに向かって走り出した。

ヘリポートで貴広と話をしていた隷は、今にもヘリコプターに向かって歩き出そうとしていた。
「隷さん、帰ってしまうのですか!」
スカートをひるがえしながら、リニアは隷に駆け寄った。

「ああ、そうだ。僕は君のご主人様じゃないからね。だから帰るよ」
うつむいたリニアの頭を、隷はそっと撫でる。
「時は、また刻み始めるよ……必ず」
「えっ？」
意味を掴みきれないで戸惑うリニアに、隷は黙って微笑んでみせると、そのままヘリコプターに乗り込んだ。

ヘリコプターの音が消え、青空に浮かぶ小さな点が雲に隠れてしまうまで、二人はそこに立っていた。
「リニア、さっきのは……」
「はい？」
不思議そうに見上げるリニアの顔を見て、貴広は首を振った。
「いや、いい。隷の一件で急にこっちへ来たから、約束に遅れてしまう」
「お約束ですか？」
「ああ。今から灯台に」
そこまで言いかけると、貴広はわずかに表情をやわらげた。
「リニアもついてくるか」
思いがけない言葉に、リニアはうろたえてしまう。
「あの、お供してもよろしいのですか？　ありがとうございます。リニア、まだこの島の灯台を見たことがないのです」
ヘリポートに降りていく時、一番最初に眼を引いた灯台に、まだリニアは行ったことがなかった。
「どっちにしろ、そろそろ昼休みだしな。あそこで飯を食うか」
「リニアも御一緒していいんですか？」
「ああ。本当は貴様と一緒に食べるのなんか、嫌なんだが」
「あ、なら、貴広さんの目障りにならないように、隠れて食べてましょうか？」
「冗談だ。もう少し、ましな反応をしろ」

貴広は肩をすくめて歩き出した。
一緒に食事をするのが嫌だという言葉ほど、貴広の態度からは棘は感じなかった。
リニアはぱたぱたと貴広の横を歩き始めた。

「貴広さん、このお荷物は一体何ですか？」
灯台に向かって歩く貴広は、人の頭くらいのものが入った袋をぶら下げていた。
「キャベツだ」
「キャベツですか」
「約束したからな」
貴広はそれ以上説明せず、リニアにペースを合わせて歩いている。しばらく黙っていたが、わずかに眉を寄せて貴広が訊いてきた。
「そう言えば、さっきのはどういう意味だ。リニア」
「えっ？」
「隷が言っていた言葉だ。時はまた刻むとか何とか」
「あれは……リニアにもよく解らないです」

何を意図して言ったのか、何を意味して言ったのか、推測することもできなかった。
「そうか。貴様にも解らないのだな」
「はい」
貴広はそれ以上追及しなかった。
灯台の入口に辿り着いたのだ。

「おや、二人で来たのかい？」
迎えてくれたのはおばさんだった。
「約束していたキャベツが今日届いてたから、とりあえず一個持ってきたぞ。あれは……確か俺の故郷の料理だったと思ったが」
「故郷の料理ですか？」
リニアが首を傾げると、おばさんがうなずいた。
「冷凍じゃないお好み焼きを食べたことがないって言うからね。それでキャベツが手に入ったら作ってあげる約束をしたんだよ」
「お好み焼きですか。リニアも大好きです」

「リニアちゃん、ニホンニアの料理を食べたことがあるのかい?」
「え……」
ニホンニアという単語が引っかかるが、少し遅れて日本のことだと思い出す。お好み焼きに関するデータが早く参照できたのとは大違いだった。
「あ、はい。日本ですね。リニアも……ニホンニアで作られたらしいので、お好み焼きはよく食べました。下手ですけど、お店で焼いたこともありますよ」
「それなら充分だ。鉄板持ってくるから手伝って。おいしいのを食べさせてあげるから。じゃ、椅子を並べて」
おばさんが鉄板を取りに行ってから、灯台の横にある水蒸気を噴き出す機械から出ている管の周囲に、貴広は勝手知ったる何とやらとばかりに椅子を並べ始めた。
おばさんが野菜をどんどん切ると、リニアは言われたとおりに野菜を運ぶ。馴れないながらもおろし金で山芋をおろし、中華麺を炒めるのを手伝う。
普段はもたもたしていると思われているリニアの手は、案外手際よく麺を炒めていた。
愛想がいいとは言えない貴広にも、おばさんは容赦なく指示を飛ばす。
「ほら、貴広。鉄板をパイプの上に載せなさい」
一通り材料の下ごしらえが終わると、おばさんは鉄板を指さした。
「ああ」
貴広が文句も言わず、熱を持った管の上に鉄板を載せると、馴れた仕草で油を引いた。
流し込んだ生地は限界まで薄く、その上に手早く載せられていく材料をリニアと貴広は眼を丸くして見入っていた。
「リニアちゃん、そこで卵焼いて。目玉焼きね」
「はい」
おばさんは見事な手際で、お好み焼きをひっくり返し、蒸し焼きにしていく。何度か言われるままに

手伝っていたのに、ほかほかの湯気を立てるお好み焼きが完成した時には、気持ちのいいマジックでも見ている気分だった。
「すごくおいしいですよ、おばさま」
「ほれ、どうだい。言った通りおいしいだろう」
「冷凍のお好み焼きと大違いだ。と言うよりは違う作り方のような気が……」
熱いお好み焼きを口に運びながらも、貴広は首を傾げている。
「お好み焼きには広島風と大阪風があるんだよ。私が作ったのは広島風」
「リニアが知っているのとは少し違いますね」
「作り方はそれぞれ違うかもしれないからね。リニアちゃんは広島風も大阪風も知ってたみたいだけど」
「あ、でも……リニアはおばさまみたいにうまくは作れないですよ」
リニアが照れたようにうつむくと、おばさんは豪快に笑い飛ばした。
「何言ってるんだい。あれだけうまく焼きそばを炒められたら見事なもんだよ」
一層照れて真っ赤になってしまったリニアを、貴広は何事か考え込むように見つめていた。
「どうしたんだい、貴広」
「いや……大阪風と広島風のお好み焼きの両方を知っている人間というのは、おばさんの世代では結構残っているものなのかと思ったのだが」
おばさんは軽く首を傾げた。
「そうだねえ。あんまりいないかもしれないね。そもそも、どっちも食べたことがある人間ってのは、かなりお好み焼きが好きなんじゃないかい?」
「お好み焼きというのは、シェフなら誰でも作れるポピュラーな食べ物なのか?」
「そうじゃないね。お好み焼きっていうのは、それ単品で気楽に食べられるものだから、ボリュームのあるおやつのような感じかねえ」

のんきな食べ物談義をしているはずなのに、貴広の表情は真剣だった。
「ニホンニア全土で、どこでも同じように食べられた訳でもないしね。それがどうかしたのかい？」
「いや。リニアの出所を推測する参考になるかもしれないと思ったんだ。例えばシェフの訓練を受けた初期型のアンドロイドとなると、多少はターゲットを絞れるかもしれないだろう」
真面目に議論しながらも、決して箸を動かす手を止めることはない。
「うーん、どうかねえ。お好み焼きってのはシェフの作るような『ちゃんとした料理』じゃないんだよ。庶民的な食べ物だからね」
「そうなのですか？」
「今は流通の関係でめったに生ものを回せないから、結果的になくなっていく料理も増えている。まあ、そうなったのもこの会社のせいとも言えるが」
やや内省的な雰囲気になった貴広に、おばさんは笑いかける。
「ま、世の中そんなもんだわな。今だって悪い世の中じゃないわよ。便利でいいじゃない。よかったって、だけなんかない。悪かったって、だけなんかない。それでも人間は進む、ってね」
「何だそれは」
「うちの死んだじいちゃんの口癖」
肩をすくめている貴広の横で、リニアはお好み焼きをかじりながら嬉しそうに微笑んだ。
「よかっただけでもなく、悪かっただけでもなくですか……いいですね」
リニアが小声でその言葉を反芻しているのを見ながら、おばさんは貴広を小突いた。
「それ見ろ。あんたみたいに心が荒んだ人間には解らないけど、リニアちゃんは感動したって」
「口にいっぱいお好み焼きを頬張って、感動したも何もないだろう」
「う……す、済みません。で、でも、お好み焼きに

も同じく感動してるからですよ」
「そうだよ。リニアちゃんはお好み焼きにも同時に感動しているからいいのよ。さあ、次のを焼いてあげるからもっと食べなさい」
おばさんは新しいお好み焼きを焼く為にもう一度おたまを手に取った。

すっかりお好み焼きを堪能してから、二人は元来た道をゆっくり歩いていた。
「おばさまって、整備長のおじさまの奥様なんですよね？」
確か一度そう聞いたことがあったはずだ。
「ああ、そうだ。俺が赴任するより前からこの島に住んでいる。二人とも全然性格が違って喧嘩ばかりしてるんだが、仲はいい」
「いいですね。憧れちゃいますね」
「そうか？」
呆れ顔を向ける貴広に、リニアはうなずいてみせた。
「何だかいいじゃないですか。あんな歳になっても仲良くできるなんて、憧れちゃいますよ」
ややあってから、貴広もうなずいた。
「そうかもしれないな」
満腹のせいか、普段より穏やかな気分で二人は歩いていた。そんな時だからこそ、貴広は世間話の続きのように言葉を続けたのかもしれない。
「リニア」
「何ですか、貴広さん」
「リニアはお好み焼きを焼いたことはあるか？」
「広島風のは焼いたことないです。それに、あんなに上手には焼けないですし」
「別に焼いてみせろと言ってる訳じゃないんだが、ちょっと興味が湧いてな。リニアが食べた時には、あれは自宅で焼いているのか？」
「えっと……おうちでは、焼いてなかったかと」
「では、その記憶は昔、主人に店に連れていかれた

時のものなのか」
お好み焼きのおいしさや、自分で焼いた時のどきどきする感じは憶えている。しかし、その場面をはっきり思い出すことはできなかった。
貴広の言うように『主人』に連れていかれたのか、そもそも誰と店に行ったのか全く憶えていない。
「お前の記憶はささやかな昔のことが、こまぎれになっているようだな」
「何だか変かもしれないですね。大事なことは思い出せなくて」
「いや、不思議なことではない。記憶というのはそういうものなのかもしれない。それに、失う記憶を選ぶこともできないだろう」
「そう……ですね」
「お前の記憶の欠落は部品の消耗が原因だ。罪悪感を抱く必要はない。それに、本社の連中も馬鹿ではないだろう。しばらくすればリニアの出自を何とか調べてくるはずだ」
「た、貴広さん……」
思いがけない時に励まされ、リニアは言葉に詰まってしまった。
潤んだ眼で見上げるリニアを見ているうちに、何か疑問が湧いたのか、貴広は話を変えた。
「隷とはお好み焼きを食べに行ったのか?」
「えっ?」
思いもかけないことを訊かれ、リニアはきょとんとした表情を浮かべた。
「いいえ。ありません。隷さんに拾われてからは、体の点検などで外に出られることはほとんどなくて、食べに行くなんてことは……」
リニアの答えに、貴広は苦笑した。
「よく考えれば当然のことだな。そもそも、今のニホンニアで生ものを使って調理しなければならないお好み焼きを出す店などあるはずもない」
「そうなのですか?」
「ああ。冷凍のお好み焼きをわざわざ店で出す必要

もないしな。それに、隷がお好み焼きを食っている
ところなど想像もつかん」
　リニアは隷と貴広と一緒に、お好み焼きを食べる
ところを想像してみた。
　隷のことだから、リニアのように口に青のりをく
っつけたりせず、優雅な箸さばきで食べるのだろう。
　交替でお好み焼きを焼いたり、世間話に興じなが
ら楽しい時間を過ごせるのではないだろうか。
「いいですね」
「……そうか?」
「そのうちリニアも、おばさまにお好み焼き作りの
特訓をしてもらって、貴広さんと隷さんにお好み焼
きを食べてもらいたいです」
　幸せそうに笑うリニアに、貴広はそれ以上何かを
訊くことはなかった。

●●●

　隷の乗ったヘリコプターが本社に戻った時、待ち
構えていたのは飯島だった。
「ずいぶん長逗留だったな、隷」
「迎えに来たのか?」
「いや、偶然だ。今から出るんだよ」
　そう言うとおかしそうに含み笑いを漏らす。
「次の便で例のものを送る。あのポンコツアンドロ
イドは、どんな具合だった? 例のものが間に合わ
ないほど壊れちゃいないだろうな」
「いや」
　飯島のからかうような言葉の響きを、隷は黙殺し
た。
「神崎も衰えたもんだぜ。俺達のことを何も見抜い
ちゃいねえ。お前が……」
「疲れてるから、早く戻りたいんだ。これから忙し
くなるからね」
　飯島の言葉を遮り、その横をすり抜けて隷は歩き
出した。

「……相変わらずだな。じゃ、俺はこれからあれの引き取りに行ってくる。事が始まるまで、ゆっくり休んだらいいさ」
渇いた笑いを浮かべ、飯島もまた歩き出した。
足音が遠ざかっていくのを聴いていた隷の表情は、険しく、冷たくなっていた。
「リニア、貴広……君達はどうするんだろうね」

●●●

日曜日には訓練はない。貸与されたピナフォアドレスを着ていさえすれば、何をしていても構わないことになっている。
社宅でもメイド達はゆったりと時間を過ごしたり、明日からの訓練に備えて、真面目に予習しているメイドもいる。リニアはそんなメイド達に挨拶だけして、庭の方に出た。
隷も帰ってしまったことだし、休みだからと言って特に何かすることがある訳でもない。何となくいつものように、掃除に精を出してしまっていた。
ここの庭は広くて歩くのも楽しいし、最新鋭の設備に触って壊したりする危険もなく、気持ちよく庭の手入れに専念できるのだ。
冬とは言っても落葉樹がほとんどない庭なので、落ち葉はあまりない。
それでも細かい手入れをしていくと、樹々はそれに応えてくれるかのように生き生きとし始める。
休みで人気もないので、ゆったりとほうきを動かすことができて、リニアは何となく嬉しかった。
しばらくあちこちを掃除していると、貴広が歩いてきた。図書室に行っていたのか、本を抱えている。
このご時世に紙製の本を読むというのはアナクロな趣味らしい。しかし、貴広にはそういうアンティークなものが似合うように思えた。
「リニア、今日は休みだぞ」
「日曜日と言ってもすることがありませんので、お

庭のお手入れをさせていただいてるのですよ」
貴広はリニアと手に持った移植ごてを一瞥すると、穏やかな笑顔を向ける。
「いい心がけだな。庭の手入れは楽しいか？」
「はい。草木に囲まれて、本当に気持ちいいですね」
広々とした庭を手入れできるなどという機会など、今までなかったので、余計に楽しいのかもしれない。
「まあ、気分よく過ごせる為にあるのが庭園だからな。仮に人を不快にさせる為の庭園っていうのがあったってなあ」
何やら貴広はとんでもないことを考えているらしい。リニアは驚いて首を振った。
「ひ、人を不快にさせるための庭園って、そ、そんな想像しては駄目ですよ」
「しかし貴様がちゃんとこの庭園の管理をしなければ、人からそう思われような庭園になるやもしれんぞ。人を不快にする為に作られた庭園だってな」
今までなら厳しい口調で指摘されたはずの言葉は、少しやわらかく感じる。リニアは脅えることもなく、素直にうなずいていた。
「そうですね。皆様にご迷惑のかからないように、理想の庭園を造り上げなければなりませんね」
リニアは決意に満ちた表情で、移植ごてを握り締めた。そこで初めて貴広は怪訝そうな顔になった。
「……で、何だ？　その、リニアは今、何をやっているんだ？」
「あ、アリの巣を移動しているのですよ」
貴広の顔が、いきなり険しくなった。
「あ、あの。貴広さん、どう」
なさったのですか、と続ける間もなく、貴広の拳が頭を襲った。
「いた」
「何でそういう馬鹿なことをしているんだ」
「だ、だって……これから殺虫剤をまくから、避難しなければ、アリが死んでしまいます」

「移動させたら殺虫剤をまく意味がないだろうが。で、その他の避難者リストは？」
　ふつふつと溢れ出る怒りを堪えながら、貴広が不自然な笑みを浮かべる。
「ええと……アブラムシとテントウムシとカナブン……それからですね」
　虫の名前を言うたびに、貴広の拳がゴンゴンと炸裂する。
「いた、いたたたたっ」
　半泣きのリニアに向かって、貴広は吐き捨てるように宣告する。
「俺は虫が嫌いなんだ……」
「え？　そ、そうなんですか？　じゃ、大きなアリの巣なんて見ない方がいいですよね」
　ぽろりと漏らした言葉を聞いて、貴広の眼は凶悪なほど冷たく光る。
「それはどこにある」
「あ、あの。貴広さん眼が少し怖いのですが」
「どこにあるか言えっ！」
　リニアは涙目のままで、今まで手入れしてきたルートを逆戻りすることになった。
　そのアリを見た時、貴広の声は珍しく頼りない響きになっていた。
「うわ、何だ。この気味の悪い色のアリは」
「このアリはマラブンタっていうのですよ」
　笑顔で説明するリニアに一度うなずいてから、貴広は首を傾げた。
「聞いたことがあるな……待て。マラブンタってアリは、確か肉を」
「はい、肉食ですよ。油断していると大きな動物も骨ごともって行かれます。ちなみに、食べるものがなくなると大移動するので有名なんです」
　貴広はしばらくの間、わなわなと震えていたが、おもむろにスーツの胸元に手を突っ込んだ。
「た、貴広さん。な、な、何を？」

それは、スプレーだった。貴広は眼にもとまらぬ速さで、アリにスプレーを噴射していた。
「わわわわっ。駄目ですよっ」
静止しようとしたリニアに、スプレーを持っている右手の甲がヒットする。
「いたたたた……」
「アホか、死ねっ！　マラブンタって言えば、人だって食うようなアリじゃないか！　どこの世界に人食いアリを庭で飼っている屋敷があるんだ！」
ものすごい剣幕の貴広に、しょげたリニアが気弱な声で抗弁しようとする。
「そうですが……珍しいのですよ、このアリは」
「珍しいかどうかって問題じゃない。他はどこだ！　正直に言えっ」
今まで見たこともない様子に、リニアは思わず怯んでいた。仕方なくリニアが順繰りに貴広を案内していくと、とあるものを見て貴広の顔色が土気色になった。
「……アリ塚じゃないか」
地の底から響くような声で呟くと、優に1メートルはある物体に念入りに殺虫剤をかけていく。
結局、リニアが大事に庭で育てようと思ったゲジゲジやマダガスカルゴキブリ、数多くの珍しい昆虫の類は、全て貴広に駆除されてしまったのだった。
すっかり駆除が終わった頃には、空は濃い赤で染められていた。貴広の姿もリニアのピナフォアドレスも、何もかもが赤みがかっている。
「全く、こんな不気味なもので庭を埋め尽くすな。もう少し他の人間が命の危険にさらされないようなものにしろ」
「はい。あの……では、空いている花壇があるのですが、そこに新しい植物とか植えてもよろしいでしょうか」
「植えてもいいが、何を植えるつもりだ？　ラフレシアとか食虫植物とか言わないだろうな」

疑わしそうにこちらを見る貴広に、リニアはぷるぷると首を振ってみせた。
「トマトの苗があるのですよ。それをここに移してもよろしいでしょうか」
「トマトだと？」
「だ、駄目でしょうか」
貴広は少し考え込んでいたが、やがてうなずいた。
「ま、まあ、目立たない場所ならいいが。トマトならいきなり噛み付いてくることもないだろう」
「ありがとうございます」
リニアは嬉しそうに頭を下げた。
二人が水場を通りかかった時、貴広がリニアの手を引いて連れていく。
「貴様は、変な虫を触っていそうだからな。丹念に俺が洗ってやる」
「だ、大丈夫ですよ」
「大丈夫じゃないよ。汚れてるだろう」
貴広は蛇口をひねって水を出し、リニアの手を水流にさらそうとした。
ぐきっ、と変な感触がする。
「え？」
貴広の動きが止まる。
「あっ、その……」
強く握られた訳でもないのに、リニアの手に軽い痛みが走る。
「大丈夫なのか」
心配そうに見やった貴広とリニアが身動きしないでいる間、水の流れる音だけが響いた。
ややあって我に返った貴広が蛇口をひねると、耳障りなほどうるさかった水音も消える。
「は、はい。ちょっとひねってしまっただけですから、何でもないんですよ」
「そうか。気を付けろよ」
貴広はいつもよりもゆっくり歩き、時々手首をさするリニアのことを社宅の側まで送っていった。
「夕食はちゃんと食べられるか？」

「はい。お腹空きましたね」
「そうではなくて、箸だのナイフやフォークの類だのを握れるかと訊いているんだ」
「あ……」
痛みはきつくないが、あまり右手に力が入らないようだった。
「食堂の方に、スプーンで食べられるものを出してもらえるように頼んでおくから、とりあえず虫に触った服など着替えてしまえ」
貴広は何となく憮然とした様子で、リニアに背を向けて歩き出した。

その後、リニアは四苦八苦しながらピナフォアドレスを脱いで新しいものに着替えると、やや人気の少なくなった食堂で、リニアの為に作ってもらったオムライスを食べてから休んだ。
(今日は、楽しかったですね)
ふんわりした卵に覆われたごはんを口に運びながら、リニアは幸せそうに微笑んでいた。

●●●

それは、雪の日だった。
とても寒くて、お出かけしちゃいけない日だったけど、私はその場所を目指して急いだ。
返さなきゃいけないものがあった。
今日逢えなかったら、もしかしたら返せないかもしれないものだった。
だから、大好きなそれを返そうとしたけど、あの子は受け取ってくれなかった。
代わりに握ったままの私の冷たい手を、あの子が握ってくれた。
風のせいで、感覚も鈍くなっていたけど、少しず

つ、少しずつ、体温が染み入ってくる。
「私の手、冷たいからだめだよ」
それでも、私の手はあの子の手みたいに温まることはなくて、すごく悪い気がした。
手を引っ込めようとしたけど、温かい手が私のことを止める。
「大丈夫だよ。温かいだろ」
あの子は真剣になって温めてくれる。
明日からは入院しなくちゃいけない。
もうしばらくは逢えない。
だから、返さなきゃいけないものがあったのに、結局あの子は受け取ってはくれなかった。
その代わりに、私は大事な約束をした。
守れるかどうか解らない約束だった。
「うん、約束だよ。そしたら、いつもの時間に逢おうね」
あの子の笑顔のやさしさだけが、心に染みた。

●●●

「寒い……」
南の島だから、この島は他よりはよほど暖かいはずだが、朝起きた時には妙に肌寒かった。
ベッドから出たくないような気候だったが、思いきって外に出て服を着替えると、お茶をいれることにした。
お湯が沸く間に身仕度を済ませると、マグカップに薄めのハーブティをいれた。こんな寒い日にはミルクティの方がいいのだろうが、部屋に牛乳を置いていないので、ミルクティは無理だった。
もちろん食堂に行きさえすればゆったりと飲むこともできるが、リニアは何となくベッドに座ったままで、さっきまで見ていた夢のことを考えた。

何故少年がそれを受け取ってくれなかったのか、夢からさめたリニアには謎だった。
ただ、入院を控えた少女が抱いていた寂しい決心や、雪の降る静けさ、少年の体温が、リニアの心の中に残っている。
「……何なんでしょうね」
お湯が沸き、リニアは小走りで火を止めに行くと、手早くハーブティをいれた。
少し冷めてからこぷこぷと口に含んでいるうちに、夢について考える気分は失せていた。
そんな穏やかな時間から始まった日が、とんでもない日になることを、そして、歓迎できない客人が萌えっ娘島に現れることを、リニアは全く予想していなかった。
災厄の前兆は、リニアがお茶を飲み終わって間もなくヘリポートに降り立った。

（寒かったから、あんな夢を見たんでしょうか）
夢の中では雪の日だった。
現実でも雪が降っているのだろうかと思い、窓を覗いてみたが、どんより曇っているだけで雪は降っていなかった。
灰色の空を眺めていると、何となく頭を切り換えるのが難しく、夢のことをぼんやり考えていた。
（あの中の約束……どんな約束だったんでしょう）
夢の中の『私』は、まだ子供と言ってもいい年齢の少女だった。彼女がさして年齢は変わらないと思われる少年と交わした約束。
夢の中では、リニアは少女の思いを自分のことであるかのように身近に感じていたのに、醒めてしまうと何を思っていたのかさっぱり解らない。
心に残っているのは、彼女にとってその約束がとても大事なものであって、彼女が返しにきたものが少年の宝物だったことくらいだ。
何を返しに来たのか。

5　軋み

　まだ早朝といった時間に、招かれざる客人が来たらしいという噂は、朝の食堂などでもいろいろ囁かれていた。
　貴広とわずかな時間だけ話をして、そのまま帰ってしまったらしいが、来訪者はどうやら飯島らしいという話を聞いて、リニアは少しだけ興味を持った。
（飯島さん、島は嫌いだってずっと言っていたのに、貴広さんの顔を見たくなったんでしょうか？）
　この島に来る為には、中央島からヘリコプターで長い間乗ってこなければならないのだ。別件の用事など何もなかったリニアですら、ここまでヘリコプターに乗ってくるのは大変だった。
　少なくとも激務の合間に顔を出しに来るほどには、飯島という人物が貴広を好きだとも思えなかった。
　しかし、カンパニーの人間がどんな思惑でここを訪れるかなど、訓練中のメイドに過ぎないリニアに解るはずもない。
　思い当たる節もないまま、ぼそぼそと囁かれる噂を聞きながらリニアは食堂を出た。
　植え替えたトマトの苗の様子を見に、庭を歩いているとおやじさんの声が聞こえた。
「おう、あんまり傾けんな。何が付いてるか解りゃしねえんだ」
　おやじさんに指示されて、若い整備士が大きな箱を担がされている。棺桶を思わせるサイズの箱に、リニアは驚いていた。
「こんにちは、おじさま。それ、重そうですね」
「リニアちゃんじゃねえか」
　おやじさんが一瞬だけぎょっとした顔になるが、すぐに笑顔を作った。
「もしかして、その箱は棺桶なのでは……そ、その、リニアはお化けは苦手で」

「それはないんだが……ただのパーツ見本だ。つまらん作りだが、最新鋭なんでこっちに回ってきたんだ」
「そうなのですか」
「機密だから、こいつの話はこれでおしまいだ」
「はい。リニアも苗の様子を見ないといけないので、これで失礼しますね」
「苗？」
「トマトの苗を植えさせてもらったのです。実も付きかけているので、うまくいくかどうか不安なのですけど。うまく育ったら持っていきますね」
「そりゃ楽しみだ」
リニアはぺこりと頭を下げて、トマトの苗を植えた花壇に向かって歩いた。

ある程度寒くなったせいか、トマトの調子はいいように見えた。暑すぎると、いいトマトに育たないという話を、どこかで聞いたことがあった。

（……どこでしたっけ？）
データを参照できないのは、些細なことの方がストレスを感じる。しかし、とりあえずトマトの手入れをする方が先だ。たくさん実がなったら、みんなに分けてあげよう。
手入れをしている間にも、いい風が吹いてくる。朝には肌寒いと思っていたが、陽が高くなるに従って、気持ちのいい気候になってきた。
昼休みには、丘の上で風に当たろう。
ゆったりとした気分になれるに違いない。

昼休みまで頑張って働いたリニアは、なるべく急いで昼食を摂り、丘の上までやってきた。
「うわぁ」
さわさわとそよぐ風が頬や髪を撫でる。リニアはくすぐったそうに瞼を閉じ、草の上に横たわる。
耳許で草が風に揺られて、かすかな音をたてるのと、上の方を風が流れていく音が同時に聞こえるの

が心地よい。
いつの間にかリニアは瞼を閉じて、うとうとと眠りに就いていた。

気が付くと、妙に息が苦しかった。
どうやら鼻から呼吸ができなくなっているらしい。リニアが口から空気を吸おうとすると、すかさず口が塞がれた。
「くくく。苦しいか、リニア。俺が憂鬱なのに、貴様だけ気持ちよさそうにしているからだ」
すぐ側から聴き憶えのある声が聞こえる。
「むーっ?」
ぱちりと瞼を開くと、すぐ側にしゃがんでいる貴広がリニアの呼吸を妨げていた。思わず手足をばたばたさせると、貴広はすぐに解放してくれた。
リニアは肩で息をつきながらも、貴広の用事を済ませる為によろよろと起き上がる。
「な、何かご用でしょうか? できましたら、ご用の時は、肩などを叩いていただければ起きますので……息を止めるというのはリニアも辛いので、勘弁していただきたいのですが」
「いや、用はない。ただ、貴様があまりに気持ちよさそうに寝ていたので、むかついただけだ」
どう考えてもわがまま千万の言葉に気付かずに、リニアはぺこぺこ頭を下げていた。
「はう、そうでしたか。済みません。これからは、あまり気持ちよさそうに寝ないよう心がけます」
一生懸命苦悶しながら眠るところを想像したが、できるかどうかは怪しいものだった。
「それにしても、息ができないというのは、かなり辛いのですね。あまり試したことがなかったので、リニア、少し驚きを隠せませんよ」
貴広は呆れたようにリニアを見ていたが、やがて深い溜息をついた。
「人がいいと言うか何と言うか……少しは自分が何をされてるか考えろ」

「はい、気を付けます」
貴広は、まだふらついているリニアのことを軽く支えてやった。
「そろそろ昼休みが終わるから、昼寝は終わりにしろ。午後は室内の掃除だったんじゃないか？」
「はい。そうでした」
掃除はカリキュラムの中でリニアが満足にできる数少ない仕事だった。できないものを無視する訳ではないが、できるものくらいはちゃんと役に立つところを見せたかった。
二人は丘を下って歩き始めた。

午後から廊下の掃除だった。
（ここをぴかぴかにするまで頑張らなくては）
掃除ロボットを使って掃除しても、完全に綺麗になる訳ではない。隅の部分はどうしてもおざなりになるので、そういう部分はどのみち手作業になる。
得手不得手を言ってはいけないのだろうが、やはりリニアとしては機械を触るのは最低限で済ませ、手作業の効率を上げることで補いたかった。
掃き掃除は得意だし、手が冷たくなる雑巾がけも手抜きをしようとは思わないが、機械関係はどうしても腰が引けてしまう。
（やっぱり、壊してしまうのは問題ですよね）
壊すつもりでやっていることではないだけに、余計に始末が悪かった。壊さない為には触らないでおくくらいしか考えつかなかった。
地道に埃を落とし、雑巾をかけていく。
しかし、自力で済ませることができそうな場所を何とか掃除した後、リニアは廊下の隅を途方に暮れた顔で見つめた。
（あの下もやらなきゃ、お掃除じゃないですよね）
それは、リニアの身長よりも大きな整理箪笥だった。もちろんアンドロイドなら、特殊な機材など使わなくても、戦闘モードになりさえすれば簡単に動かせるものである。

（も、もしかしたら見た目ほど重くないのかもしれないし、少しずつずらせば何とかなるかも）
リニアは何回か深呼吸して、はかない期待を抱きつつ、がっしりと箪笥に取り組んだ。
「んーっ、んーっ」
びくともしなかった。
しかし、リニアは顔を真っ赤にしながら箪笥にへばりつくしかできなかった。
しばらく箪笥と取っ組み合いをしていると、後ろから呆れたような声がした。
「何をやっているんだ、お前は」
「あ、貴広さん」
箪笥にへばりついたまま、顔だけを貴広の方に向けると、理解不能だと言うように大きく溜息をついているところだった。
「何故貴様は、廊下の真ん中で箪笥と抱き合っているのか？」
「こ、恋？　ななな、何を言っておられるのですか」
リニアは真っ赤になってぶんぶん首を振った。
「ほう、違うのか？」
「ち、違いますよ。いくら何でも箪笥には恋はしませんよ」
「なら、何故箪笥と抱き合わねばならないのだ？」
至極真顔で訊かれ、リニアは言葉に詰まってしまう。相手が真顔で冗談を言っているとは考えてみもしなかった。
「そんなに抱き合っているように見えますか？」
「ああ、そのままセックスでもするのではと、はらはらだったぞ」
別に全然『はらはら』などしていない様子で貴広が呟くと、リニアは思わず箪笥から離れて飛び退いてしまった。
「なななな、何をいいい言っているのですか！」
「何でそんなに焦るんだ、お前は。下ネタに弱いアンドロイドだな」
「だ、だだだ、だって……駄目ですよ。そそそ、

そんなこと言っては……だ、駄目なんです。そ、そういうのは大人のお話で」
「俺は大人だ」
「リニアはまだまだ子供ですよ」
もはや何を口走っているか解らない状態だった。
「何を言っているか！」
久しぶりに貴広の拳がこめかみを襲う。
「痛いですよ。うめぼしは危険ですってば」
「全く何が子供だ。そもそも何をやっている？」
「掃除ですよ、普通に。少なくともリニアは掃除をしているつもりなのです」
「箪笥と抱き合うのが掃除か？」
「抱き合っていた訳じゃないですよ。運ぼうとしていたのですよ」
貴広はリニアと箪笥を交互に見やると、疑わしそうな顔になった。
「……あれが？　ずっと箪笥に張り付いていただけではないか」
「とても重くて、それで」
貴広はしばらく黙っていた。
そして、ものすごい速さでリニアの頭を叩く。
「いた……」
「重いなら、戦闘モードでやればいいだろうが」
「そうなんですがリニアは出来損ないなので、戦闘モードは歯止めが効かないじゃないですか。前もそれで皆さんにご迷惑をかけてしまったので、なるべく使わないように……」
眼鏡越しに貴広の眼が冷たく光る。
「ほう。それで箪笥に張り付いてたのか？　うまく制御するように努力しろ。できないからしないのでは一生できん」
「で、でも。危ないですし」
貴広の言葉が、子供に言い聞かせるような口調になっている。
「危なくするな。させるな。怖がって挑戦しなければ、お前はいつまでも大掃除の時に、箪笥にへばり

つくというパフォーマンスをすることになるぞ」
短気なところのある貴広が、怒らないでしっかり言い聞かせようとしているのを見て、リニアはぶんぶんと首を振った。
「はい。わ、解りました」
「なら、戦闘モードに切り替えろ」
「はい」
戦闘モード自体も、リニアにはあまり馴染まないものだった。あまり自分が持っている力のような気がしないせいか、怖々扱っているような感じだ。
モードが切り替わる音がリニアの体内から響くと、リニアは貴広にぺこりと頭を下げた。
「あの、危ないですから。貴広さんは下がっていてください。リニア、何をしでかすか解りませんから」
機能上では間違いなく、箪笥を軽々と持ち上げることができるはずだ。
リニアは再び箪笥に手をかけ、力を入れた。
感覚がないので、軽々と持ち上がっていくのが不思議だった。
「できるじゃないか」
「は、はい」
笑顔を向けたその時、腕から奇妙な音がした。
ボキ……
「今、変な音が鳴らなかったか?」
貴広が眉をひそめ、リニアの腕を見ている。
「リニアの手は逆にも曲がる仕様だったか?」
「曲がりませんが……何か曲がってますよね。リニアの手、逆に」
「折れてないか?」
あまりにも異常な形で曲がっている腕を見ても、感覚がないせいか自分の腕のような気がしない。
そのせいかリニアは無感動な声を出していた。
「折れてますかね、やっぱり」
「痛くないのか……?」
「い、痛くはないですよ。戦闘モードの時は痛みは一切感じないので」

「なら、通常モードに戻したら……」
とても痛いのではないか、と続けようとした貴広の様子に気付かず、リニアは逆に曲がった腕に負担を掛けないようにしながら、箪笥を床に置いた。
モードを切り替える。
その瞬間、腕にとんでもない感覚が走った。
ややあって、それが激痛であるということが解る。あまりに痛すぎて、一瞬痛みであることすら気付かなかったほどの痛みだ。
リニアの眼からぼろぼろと涙が流れ出る。
「……いたいですいたいですいたいです。ひっく、すごく……痛いです……ごめんなさい。ごめんなさい……！」
とめどない涙で視界はすっかりぼやけている。
「ごめんなさい？　何が？」
「だって、だって箪笥持っただけで、リニアの手、壊れちゃって。リニア役立たずです……箪笥すら運べないなんて……役立たずです」
痛みを緩和しようとしているのか、無意識のうちにリニアはひどく饒舌になっていた。
「まあ、役立たずだな」
「ごめんなさい。もう、壊れないように頑張りますから」
「壊れないように頑張る、って言われてもな」
貴広の言葉は半ば聞こえていなかった。
「頑張ります……頑張ります。迷惑をかけるなら、送り返されても仕方がないと思っていました。ずっと、そう思っていました……でも、でも今は……、それがわがままだと解っていても、それでもここから離れたくありません……貴広さんや、この島のみなさんと離れたくないんです……」
リニアは泣きながら、ただ訴えた。
しゃくり上げる体力すらも消え果てそうな痛みの中で、意識を保つには喋り続けるしかなかった。
「リニア、もう壊れませんから。直ってほしい……もうリニア壊れませんから」

泣き続け、謝罪し続けていたリニアの意識は、突然、薄らいでしまった。

ごめんなさい。
ごめんなさい。
泣きながら、ずっと謝り続けていた。
いいから眠って疲れを取れという言葉が、誰から言われたのか解らなかったし、腕が折れたと思ったのが、関節のネジが外れただけだと説明を受けたのも、どんな状況だったか憶えていない。
カプセルに入れられている間も、体こそ回復していくものの、心の痛みは消えなかった。
(貴広さん……)
必要とされずに帰されてしまうメイドになりたくなかった。口の悪い、不思議なところのある所長に、もういらないからと言われるのが嫌だった。何を言われてもいい。罵られてもいいから、この島に留まっていたかった。

『たかひろ……さん……』
唇だけが、貴広の名を紡ぐ。
そこでリニアの意識は、眠りへと落ちた。

●●●

低い声で、語りかけてくれる人がいる。
愛おしむように、やさしい声がする。
「この先にお前を待っているのは、何もない暗闇かもしれないのに……そこでは、お前が望んだものは、全てお前を裏切ることになるかもしれないのに」
その人の声はとても辛そうだった。
『ここに来た瞬間から、その闇の道は始まっている。それでもお前は、隷や俺を信じ続けるのか』

(隷……さんの、話?)
しかし、答えが与えられることはなく、そのひとの言葉は続く。
「俺は、お前を最後まで守ることはできない。あと数日間、研修期間が終われば、俺はお前がどんなに望もうとお前を手放すことになる。この島にいる間だけしか、お前の心を受け止めることが出来ない。お前の望みは裏切られる。その先には、闇しかない」
悲しい言葉だった。
しかしそのひとの言葉は、とても温かかった。
「それでもいいのなら……俺は精一杯、お前を守ってやるさ。せめてここにいる間だけは、お前を守ってやるから、俺を信じていろ。安心して眠れ……お前を途中で放り出したりはしない」
(貴広……さん?)
きっと、ただの夢なのだろう。
口の悪い貴広が、役立たず極まりないリニアに向かってこんなにやさしい言葉をかけるはずがない。
しかし、すぐ側に感じられるぬくもりと息遣いが、リニアを幸せな夢の中に導いていった。
夢でもよかった。
こんなに幸せな夢なら、眼がさめてからもきっと幸せに違いない。
そんな風に考えながら、リニアの意識は再び眠りへと引きずり込まれていった。

●　●　●

「あ……」
瞼を開けると、そこに見えたのは自分の部屋の天

井だった。
リニアはしばらくの間何も考えられなかったが、数分かけてやっと現状を把握できた。
箪笥を持って腕が逆に曲がったこと。
激しい痛み。たくさん涙を流したこと。
貴広にメンテナンスルームへと連れていってもらったこと。
（えーと……）
その後で意識を失ったらしい。
おやじさんがネジを留めてくれたことや、カプセルに入ったことは朧気に記憶に残っていたが、他のことはほとんど憶えていなかった。
（何だか、すごくいい夢をみた気がするのですが）
誰かに包まれたかのような、幸せで安心できる気持ちがリニアの体の中に残っている気がした。
しかし、それが何なのかリニアには解らない。
今までもそうやって失ってきた思い出がいっぱいあったに違いないが、それらと同じようにリニアの中から消えてしまったのだろうか。
今までも記憶が欠落していることは再三指摘されていたが、データがなくなったことを理解したのは初めてだったこともあり、ひどくショックだ。
（どんなに幸せなことでも、忘れてしまう可能性があるんですね）
幸せな思い出なら忘れない。知らないうちにリニアはそんな風に思っていたのかもしれない。
何となく寂しい思いでベッドから降りた。

その後の訓練は、最初の頃に較べてずいぶん楽になってきた。
しかし、それはリニアが経験を積んだからというよりは、訓練そのものをリニアの老朽化した体に合わせて調節している節があった。
重いものを持たされることもなく、リニアに扱えない最新鋭の機器を触ることもなかった。
「どうしてなんですか？　最初のカリキュラムと、

ちょっと違うような気がするんですけど」
　昼休みに、食堂に来た霧島に訊いてみた。しかし霧島は、曖昧に微笑んでこう答えるだけだった。
「訓練は画一的なものではありまちぇん。それぞれに必要なことは違いまちゅ」
「でも……」
「リニアちゃんはカンパニーに属するメイドでちゅから、その体を壊さないような訓練を受けさせるのも調整のうちでちゅ」
　霧島はてきぱきとナイフやフォークを操り、食事していることを感じさせないような食べ方をする。
　リニアが問い質そうとした時には、既に霧島の食事は終わっていた。
「午後は仕事が詰まっていまちゅから、そろそろ行くでちゅよ。リニアちゃんはゆっくり食べるといいでちゅ」
「あ」
　霧島を追おうと思ったが、リニアのトレイには半分以上の食事が残っていた。さすがにこれだけの食べ物を残しては、午後に活動できない。
　逃げられてしまった、と思いながらも、リニアはおとなしく食事の続きをすることにした。

　訓練に余裕が出てきたおかげで、リニアはせっかく植えたトマトを丹精こめて育てることができた。
　生ものが贅沢品であるこのご時世に、よく熟れたトマトをもいで食べることができるのは、とても素敵なことだ。
(これならリニアがいなくなった後でも、ちゃんと根付いてくれますね)
　リニアは丁寧な手つきでトマトをもいでいく。
真っ赤なトマトは濃密な匂いを振りまいている。匂いを嗅いでいるとお腹が空いてきそうだった。
　ほとんどの人に、生の野菜に触れる機会がないということは、こんな風にとれたての香りを味わうこともできないということだ。

多分、もったいなく感じているリニアの方が、大多数の人から見れば奇異なのかもしれない。
そよぐ風も流れる雲も、籠の中のトマトも、何もかも美しいのに、見つめている人はいない。
作り物の心しかないはずのリニアが、これほどまでに美しいと思うのに、他の人は気付くこともないのだろうか。
(でも、トマトは食べれば誰でもおいしいですよね)
きっと『おいしい』ということも、美しいことに含まれるのだ。それならほんの少しでも、誰かにお裾分けすることもできる。
リニアは何となく浮かれながら、真っ赤に熟れたトマトに手を伸ばしていた。

リニアが籠を下げてヘリポートに向かうと、ちょうど整備員達が休憩に入ったところだった。
「こんにちは。お庭で育てたトマトが熟れてきたので、お裾分けしようと思ったのですけど」
リニアの言葉に、休憩している整備員だけでなく、まだ作業している整備員もわらわらと寄ってくる。
「リニアちゃん、こんなにもらってもいいの?」
「はい。みなさんでひとつずつ分けるくらいはあると思います。よかったらどうぞ」
整備員達は真っ赤なトマトを嬉しそうに手にとって、ある者はがぶりと噛み付き、ある者はにこやかな顔でトマトを眺めたりしていた。
かぶりついたトマトから、瑞々しい匂いが漂うと、彼らは先を争ってリニアの方へ押し寄せてきた。
「あっ、てめえ。トマト多く取りやがったな!」
一人がもごもごと口の中に丸一個のトマトを押し込んで、片手にトマトを持って逃げていく。
「あっ、駄目です! 一人分しかないのですから、足りなくなってしまいます。仕方ないですね。リニアの分をあげますよ。はい」
ひとつだけ残ったトマトを、リニアは整備員の一人に手渡した。

はしゃいでトマトを食べる整備員達を見ていると、リニアは嬉しくなってきた。
「大丈夫ですか？　みなさんに行き渡りましたか？」
「はーい」
「それではみなさん、お仕事お疲れ様でした」
「はーい」
無骨なツナギ姿の男達が一斉に返事をする姿は、かなりインパクトがあった。
彼らが散らばっていくと、やや離れた場所に貴広の姿があった。
「あ、貴広さん」
もう籠にはトマトはひとつもなかった。
「済みません。もうトマトがないのですが」
「ヘリポートまで、わざわざ貴様のトマトを食べに来たのではないが……」
貴広はリニアの背後にいる整備員達の視線を受けて、乾いた笑いを浮かべた。
「もう用は済んだから帰るところだ。おやじさんに納品関係の書類を渡しに来ただけだからな」
「そうなのですか」
「そういう訳だ。じゃ」
貴広が歩き出そうとすると、リニアは反射的に貴広のジャケットの裾を掴んでいた。
「あ、あの。お帰りになるのなら、リニアもご一緒してもよろしいでしょうか」
貴広は、後ろにいるギャラリーを苦笑しながら見やると軽くうなずいた。
「ああ、勝手にしろ」
「はい、ありがとうございます」
二人は後ろから殺気に満ちた視線を浴びながら、ヘリポートから立ち去った。
夕食を終えてから、リニアは終業まで窓拭きをする予定になっていた。
もちろん使うのが怖い掃除ロボットは起動させ

ず、バケツと雑巾持参で仕事場所に向かった。
「あっ」
歩いている途中、水を張ったバケツが変な具合に揺れて、水をこぼしてしまう。
「あれ？」
バケツを持った右手の手首の感覚がおかしかった。このまま落としてしまいそうになり、慌ててバケツを置いた。
廊下には小さな水たまりができていた。
リニアは床にこぼした水を拭こうと膝をつく。
雑巾を持つ手の感覚がなかった。
取り落とした雑巾を拾おうとする指は、ふにゃふにゃと動くばかりでちゃんと力が入ってくれない。
「どうして……」
仕方なく左手で雑巾を拾おうとするが、そちらも右手よりはましなものの、筋肉がふわふわとした感じで頼りなかった。
（もしかしたら、昨日の場所がまた壊れたのかも）
しっかりと直してもらったはずなのに、昨日の今日でこんなになってしまうほどリニアの体は老朽化しているのだろうか。
それ以上に両手が壊れたままでは、頑張ろうにも何もできない。
（これじゃ……やっぱり役立たずです）
リニアは途方に暮れていた。
しかしこのままうなだれていても、仕事は決して終わらない。
しばらく考えていたが、雑巾を一度だけ苦労して絞った後、リニアは比較的まともに動く左手で雑巾を右手にぐるりと巻き付けた。
腕は動くのだから、多少面倒ではあるがこのまま拭けば大丈夫のはずだった。
（頑張らなきゃ）
役立たずのまま、ここを去りたくなかった。このまま『使えないポンコツアンドロイド』だったことしか思い出してもらえないのは嫌だった。

リニアは唇をぎゅっと噛むと、不器用に窓を拭き始めた。
予定の半分ほど窓拭きを済ませた頃には、空には月が浮かび、リニアを照らしていた。
既に電気はほとんど消えている時間だった。
それでもリニアはひたすら窓を拭き続けていた。

どのくらい時間がたったのだろう。

「リニア」
突然後ろから呼びかけられた。リニアが振り返ると、貴広が渋面を見せて立っている。
「貴広さん、こんばんは。お仕事終わりましたか？　大変ですね」
にこやかに挨拶をすると、貴広はもっと厳しい顔になった。
「お前、何をやっているんだ。こんな時間まで」
「す、済みません。リニア、仕事が遅いので、まだ終わっていないのです」
「終わらないって……」
貴広が戸惑ったようにリニアを見つめる。
「どうもグズなので……えへへへ。いつも、こんな時間になってしまうのです」
感覚のない手を、笑いながら必死でいつものように動かそうとする。
「いつも……だと？　お前、いつもこんな時間まで拭き掃除をやっていたのか？　手作業でこの膨大な数のガラスを磨いて回って、終わる訳がないだろう」
貴広の言葉に詰問の響きが混ざる。
「いいえ。そんなことありませんよ。頑張れば結構、手作業でも終わるものなのですよ」
必死で笑顔を作っているリニアのことを、貴広はぎょっとした眼で見やった。
「リニア。貴様の雑巾の握り方は、何だかおかしくないか？」
心拍音が大きく響いた気がした。

「え、そ……そうですか？」
「何でそんな風に……まさか昨日の」
強張った顔になった貴広に、リニアは激しく首を振ってみせた。
「ち、違いますよ。あれは腕の関節じゃないですか。関係ありませんよ。今日は、ずっと雑巾がけしていたら、手が冷えたみたいで……握力が少し弱くなってしまって」
「少し見せてみろ」
「雑巾を持った手なんか汚いですし」
貴広は有無を言わせずにリニアの手を取った。
「冷たい。体温調節がうまくいっていないようだ」
沈痛な表情でそう呟いた。
「……ほら、リニアってでき損ないだから体温調節機能がしょぼいんですよ。えへへへ」
「馬鹿が。こんな状態になっているのに、何故メンテナンスを受けに行かない？」
リニアはわずかに沈黙した。
「定期的にちゃんと、メンテナンスしていただいてますよ。だから大丈夫ですよ。人だって冷たい雑巾をずっと触っていたら握力がなくなるじゃないですか。それと一緒で、冷たい水をずっと触っていたから手が冷えてしまっただけですよ」
「人間なら、そんなになるまで冷たい水に手をつけていたら、間違いなくおかしくなる」
「大丈夫ですよ。リニアはアンドロイドなんですから」
貴広は痛ましそうな表情で一瞬、リニアのことを見つめた。
そして、拳がぽかりとリニアの頭に降りる。
「大丈夫な訳がないだろう。こんな無茶な仕事の仕方があるか。どちらにしろ、手が動かなくなるまで窓を拭くのはやめろ。そんなに冷やしても、いいことなど絶対にない」
貴広が真剣に自分を案じてくれている。満足に働けないことは悲しかったが、そのことは嬉しい。

「え、あ、はい……申し訳ありません」
リニアの頬はほんのりと染まっていた。
「どうした？」
ごまかし笑いを浮かべようとすると、貴広の拳は素早くもう一度リニアの頭を叩いた。
「い、痛あっ」
「調子に乗るな。お前は本社から預かっている大切な商品だ。それ以上でもそれ以下でもない。今日の掃除はこのくらいにしろ。続きは明日だ」
「はい」
「じゃ、部屋まで送ってやる」
そう言うと、貴広は床に置いたバケツを持って歩き出した。
「バケツの水とか捨てなきゃいかんし、これ以上、水回りの仕事はするな、と言ったばかりだからな」
「で、でも、そんなこと……」
うまくいっている姿を見せたい当の本人にばかり、こんな無様なところを見られているのが悲しかった。
「メイドのくせに口答えをするのか。言うことを聞かないと、本当にスクラップにして本社に送るぞ。主人のやさしさなんていうのは、黙って受け取っていればいいんだ。どうせ、大したものではないのだからな」
無愛想な言葉を吐きながらも、貴広の声は心配げだった。壊れて迷惑をかけることを恐れるリニアの為に、あえてぶっきらぼうな口調を装っている節が見える。
言うことを聞かないと、本当にスクラップにして本社に送るぞ。
「はい……ありがとうございます」
この言葉の後ろにある温かさが嬉しくて、リニアは涙を堪えるのに苦労した。
社宅にあるリニアの部屋の前まで来ると、貴広は渋面を見せながら呟いた。

「手が動かなくなるまで、雑巾がけをするなんてこと自体が非常識なんだ、自己管理がなっとらん」
「はい。済みません……」
貴広はうつむいてしまったリニアの手を取ると、指先で軽く押したりしていた。
「まだ冷たいな」
「た、貴広さん、な、何を」
「貴様の手がまだ冷たいかどうか、確かめていたんだ。不服か？」
リニアはぷるぷると首を振った。
「い、いいえ、そんな不服だなんて。でも、なら、もう結果は解った訳ですし……あの」
離してください。
その言葉を言う前に、貴広が言葉を続けた。
「ついでに温めているんだ。静かにしろ」
貴広の掌は骨張っていて大きい。リニアの小さな掌がすっぽりと包まれてしまった。
徐々に体温が染み入ってくると、少しずつ感覚が戻ってくるように感じた。それでも時々動かす指にはまだ力が戻らない。
しかし、男性に手を握られている状態というのは、どうにも気恥ずかしい。手が動かないことよりずっとパニックになっていた。
「それでは貴広さんの手が冷えてしまいます。リ、リニアは……大丈夫ですから」
リニアはおずおずと自分の手を引っ込めた。
「貴様の意見など聞いとらん。温めて、お前の手の保温状態をチェックしているんだ」
貴広はもう一度、有無を言わせずリニアの手を包み込んだ。
貴広の温かさに触れている部分がやっと、彼の肌のやわらかさを感じるようになってくる。やはり、感覚が麻痺していたのだけは間違いない。
「た……貴広さん。私の手、冷たくて不快じゃないのですか」
「ドライアイスを握っている訳ではあるまいし、こ

の程度の冷たさが不快な訳がなかろう……どうだ？」
最後の質問で、リニアは顔が熱くなってしまう。
「え、あの……その、貴広さんの手の中はあったかくて、その、気持ちがいいです……はい」
「馬鹿。そんなこと訊いているんじゃない。少しは楽になったかと訊いているんだ」
どうやら、とんちんかんなことを言ってしまったらしい。
「え、あ……す、済みませんっ」
リニアは動転しながら、頭を下げたりあさっての方を向いたりしてしまう。
「だ、大丈夫です。かなり良くなりました」
リニアは恥ずかしさを堪えながら、今度はもう少しおとなしく手を引いた。今度は貴広も、もう一度手を取ったりはしなかった。
「外部から温めてやれば、通常の保温状態には戻るようだな。後は、自分でよく手を温めておけよ」
「あ、はい」
温まった手をふにふにと指で触ってみる。
貴広の温度が残っている場所は、他の部分よりもやわらかく、温かい。手を離した今でも、自分の手が貴広に握られているような感じがした。
「早く自分の部屋に入ったらどうだ？　いつまで自分の手を見ている。まだ手に異常があるのか？」
「そそそ、そんなことはありませんよ。だだだ、大丈夫ですよ」
リニアはきびすを返して部屋に入ろうとした。
しかし、開けていない扉はリニアを迎え入れてくれるはずもなく、そのまま派手な音をたてて激突する羽目になった。
「本当に大丈夫か？　今のは少し面白かったが」
リニアはごまかし笑いを浮かべた。
「大丈夫ですよ。リニアがポンコツで、おっちょこちょいなのは、いつものことじゃないですか。それでは、おやすみなさい」

ぺこりと頭を下げ、ドアノブを掴むと貴広の掌が肩に載せられた。
「リニア」
「は、はいっ？」
貴広はしばらく黙っていた。
眼鏡越しに見る彼の視線がとても辛そうに見え、リニアはドアノブを離した。
「もしかして、リニアの手が冷たかったのですか？」
「馬鹿。そんなことで辛い訳がなかろう。さっきのは、俺の気の迷いだった。だから、もういい」
「あの」
「そんな手になっているのだ。休んでおけ」
「はい……おやすみなさい」
情けないドジをこれ以上見せないように、リニアは扉を開けてそそくさと自分の部屋に入った。
（貴広さんに手を……握られてしまいました）
リニアは自分の手を掴んだまま、ベッドにぽふんと転がった。
決して解りやすい態度を見せてくれる訳ではないが、無愛想な貴広にさりげなくやさしくしてもらえると、何となく幸せな気分になれる。
男性に手を握られたのは初めてだった。
しかし、まるで大事な家族がそうしてくれたかのような、不思議な安心感があった。
そのぬくもりが何故か懐かしく感じる。
（こんな風にされたこと、どこかで……）
貴広に握られた掌が、とくん、とくんと脈打つ。
その響きが何かを、とても大切なものを思い出させるような気がした。
胸の高鳴りを持て余したままで、リニアは早々に眠りに就いた。
自分がどのくらいで壊れていくのか。
いつまで貴広やみんなと一緒にいられるのか。
そして先刻の貴広の憂いげな表情に思いをはせる前に、夢も見ずに。

6　動かない腕

朝起きたリニアが一番最初に確認したのは、自分の手がまともに動いているかどうかだった。
結んで、開いてを数回繰り返し、弱いながらも何とか動かすのに支障がない程度になっているのを確認すると、仕度をして自分の部屋を出た。

（やっぱり、握力が落ちているみたいです）
食堂でフォークやナイフを握る時にも、今までより力を込めないといけなくなっていた。
朝食にはボリュームのある大きな肉などは出てこないが、夕食の時などには気を付けた方がいいかもしれない。
そんなことを考えながら食事を終え、トレイを戻しに行く。少なくともトレイを持てないほど握力が落ちている訳ではないことにほっとした。
（隷さんは……今のリニアのこと、どう思うんでしょう）
ふとそんなことが気になった。
しかし隷なら間違いなく、リニアが故障しかかっていることを悲しみ、慰めてくれるだろう。
どんなことがあっても、隷は自分を決して見捨てない。だからこそ、余計に逃げ帰らなければならない状況は避けたかった。
（隷さん……リニアは、訓練を最後まで耐えきって隷さんに逢うことができるんでしょうか）
自分にできることを止めてしまうと、どんどん何もできなくなっていくような気がして怖かった。
ささやかなことでもいいから、何かし続けていたかった。
（あ、そろそろ行かないと）
今日の訓練も掃除だった。
リニアは昨夜やり残した窓拭きを終える為に、バケツを取りに行った。

普段、ただ『窓を拭く』とひとくくりで考えている作業が、数多くの動きを複合させたものであることは、あまり自覚しないものだ。

バケツに水を汲み、雑巾を固く絞って窓に手を伸ばして拭き漏らしのないようにきちんと動く。

ひとつひとつは単純な動きだが、どれかひとつでもできにくくなると、たちどころに何でもない作業ではなくなってしまう。

(指の力が入らない)

昨日ほどではないが、指先や手首を使う作業には、わずかに滞りが出ているようだった。

(でも、できなくはないんだから頑張らないと)

リニアはしばらくの間根を詰めてガラスを拭き続けていた。

一時間ほど経った頃だろうか。

図書室のある方から本を持って歩いてきた貴広が、リニアの姿に気付く。

「相変わらず窓掃除をしているようだが、手の調子はどうだ。その後、おかしくはないか?」

「て、手ですか? だ、大丈夫ですよ」

自分の力が減っていることを見透かされたようで、リニアは思わず眼をそらした。

「どれ」

その様子に気付いたのか、貴広はリニアの手を掴んだ。

わずかにリニアが指を動かすと、貴広は厳しい顔になった。

「リニア、俺の手を思いきり握ってみろ」

「え、あの」

リニアはうつむいて言葉を濁した。

「何を躊躇している。戦闘モードで俺の手をつぶせと言っている訳ではないのだ。思いきり握れ」

どうやら言い逃れは効かないらしい。

リニアは覚悟して溜息をついた。

「あの……わ、解りました。では」

しばらくの間、リニアは渾身の力を入れた。

真っ赤になりながら手を握っているリニアのことを見て、貴広は真剣な顔になった。
「それで……いっぱいいいっぱいか？」
「あ、はい」
貴広は溜息をついた。
「感心できない握力だな。ほとんど病人みたいな握力だ」
貴広の、まるで痛ましいものに向けるかのような気配を感じると、リニアは無理に笑顔を作った。
「だ、大丈夫ですよ。リニア、通常モードの時はひ弱じゃないですか。ここに来たときからこんな握力ですよ。そういう仕様なんですよ、リニアは」
もちろん嘘だった。
貴広はリニアの表情を確認するようにしばらく見つめていたが、やがてうなずいた。
「まあ、昨日みたいに雑巾も握れないということはないようだが」
「リニアはポンコツだから、ただ非力なだけですよ。心配なんかされなくても大丈夫ですよ」
「大丈夫ねえ」
貴広は全く信じていないようだった。
しかし、リニアは大丈夫だと繰り返すことしかできないのだ。
リニアの手を、貴広はそっと握る。
「で、この手の温度は何だ。氷みたいに冷たいぞ」
「あ、だ、大丈夫で……」
リニアの言い訳は貴広に遮られた。
「当分、雑巾がけは禁止だ。お前がポンコツだからという理由もあるだろうが、それにしてもこの状態は普通ではない。病人のような握力、死人のような冷たい手、どれをとっても異常だ。明日から窓拭きはそれ専用の機械にさせろ……命令だ」
貴広の言葉は、冷たくすら感じられるほど厳しかった。
「で、でも……これはリニアに与えられたお仕事ですし」

「何度も言わせるな。これは命令だ。お前は、ここにメイドとしての最終訓練を受けに来ているのだ。窓を磨く為にいるのではない」
「で、でも、他のロボットさんにできること、リニアだけができないなんて……そんなことでは」
そこでリニアの言葉が止まった。
この時代、アンドロイドの口から出るとは思われていないくしゃみが、何度も出た。
「お前、くしゃみまで出るのか。どういう仕様でくしゃみが出るかは知らんが、あまり良い知らせではないのは確かだろう。おとなしく命令に従え」
貴広はリニアの手を引き寄せた。
その時になると、既にリニアには貴広の掌を感じられなくなっていた。
きょとんとした顔で引き寄せられたリニアを見て、貴広は首を振った。
「手の感覚がないのだな。お前の反応は人間でいうところの痺れているのと同じだ。こんな状態を続けていたらどんなことになるか、馬鹿なお前でもそれぐらい解るだろう」
温かいのに、貴広の手の感触はリニアの手に伝わってこなかった。ただ、温度だけが染み入ってくる。
そのことに動転する余裕もなく、リニアはうつむいた。
「あ、あの……そ、それより、ぞ、雑巾がけをしていたので汚いです。そんなに強く握られては」
貴広の掌から手を引き抜こうとしたリニアは、麻痺していて力の調節ができないせいもあってか、そのまま手を握られているばかりだった。
「ふん。ポンコツが……やはり、温度調節がうまくいってないな。一度整備のおやじさんに見てもらえ。解ったな」
「は、はい……でも、その……リニアの手を触っていたら、ばい菌がついてしまいますよ」
「うるさい。手を温めて、保温状態を見ているんだ。邪魔をするなポンコツ」

「あ、はい。ありがとうございます」
貴広のぬくもりを受けた掌は、わずかずつしか温まらない。しかし、何もしていないリニアの頬は秒単位で赤く染まっていく。
恥ずかしかった。
何度されても、男の人に手を握られるのは恥ずかしくて堪らない。
「あ、あの……た、貴広さん。リニアは大丈夫ですから、その、そろそろ……ですね」
「ふん、何が大丈夫だ。温めてやって、やっと手が少し動くようになった分際で」
「温めていただいたから、大丈夫なのですよ」
リニアはうつむいて自分の手を引き抜いた。
「午前の仕事はこれで終わりだ。このままメンテナンスルームへ直行しろ。午後の仕事もメンテナンスの終了時間が遅ければ休養に回す。いいな」
「はい」
「リニア、今からおやじさんに頼んでやるからついてこい」
そう言うと、貴広は歩き出した。
リニアは貴広に見えないように、そっと自分の手を胸元で握り締めた。
貴広のぬくもりが自分の手に残っているような、そんな安心感があった。

霧島から新しい仕事の分担を教えてもらってから、リニアはメンテナンスルームに向かった。
(今度はお庭の手入れですか)
庭には植えたトマトもあるし、他にも手入れしたい植物があった。窓拭きを最後までやりとげられなかったのは残念だが、嬉しい仕事だった。
「こんにちは。メンテナンスを受けに来ました」
「おう、リニアちゃん。待ってたぞ」
リニアは物陰でピナフォアドレスを脱ぐと、勝手知ったるカプセルに潜り込んだ。
メンテナンスルームのカプセルから、リニアが解

放された時には、もう昼休みを過ぎていた。
「昼メシを残してもらってるから、ここから出たら食堂に行きな、リニア嬢ちゃん」
「はい」
おやじさんにカプセルを開けてもらって、リニアは床に降りた。
「リニアの体、やっぱり駄目なんですか?」
「部品が古くなってるからなあ。一応、こっちで何とかなるような部品があるかどうか、リストアップしてるから、なるべく体を酷使しねえようにな」
酷使も何も、日常的に体を使うだけで、どんどん壊れていくのだ。
おやじさんの作業を手伝っていた整備員が、眼を輝かせながら口を開いた。
「おやじさんっ、この前来たボディ、改造したら何とかいけませんかね?」
「ボディ?」
リニアがきょとんとして首を傾げると、おやじさんは整備員を一喝した。
「馬鹿野郎! あんなもん、絶対に使えるか!」
おやじさんがものすごい剣幕で怒鳴るのを見て、リニアは思わず息を呑んだ。
「あ、あの……ボディというのは?」
「ああ、済まねえ。ひとつだけ替えのボディがあるんだが、難ありというか……リニアちゃんのようなアンドロイドに付けちゃいけねえものなんだ」
真剣な顔でおやじさんが告げる言葉の意味は、あまり解らなかった。
何故『付けちゃいけない』ものなのかは解らないが、そのボディに対しておやじさんが嫌悪感に近いものを感じているらしい。
「あの……リニアが聞いてはいけないお話なら、失礼させていただきます」
「済まねえな、嬢ちゃん。こっちでも何とか努力するから、さっきの話はとりあえず忘れてくんな」
「はい……」

「ああ、そうだ。貴広が午後からの仕事はしなくていいから休めってよ」
「解りました」
リニアは話が気になりつつも、そのままメンテナンスルームを立ち去った。

（ボディの交換……ですか）
昼食の時間を過ぎ、人があまりいなくなった食堂で食事を終えたリニアは、予定外に休みができてしまったので、広い庭をゆったりと歩きながら考えていた。
胴体を交換するというのは、全く考えてもみなかったことだった。もちろんアンドロイドなので、それ自体が難しい訳ではないのだろうが、どうしても馴染まない考え方だった。
（首と今の体が離れて……それで）
具体的に想像するとかなり不気味だった。本社で体を調べられた時にも胴体を外した時があるはずだが、意識のない状態だったので憶えていなかった。
そんな状態など想像もできない。
リニアは頭と体と生き別れになったところを考えるのはやめることにした。
とりあえず、今は考えても仕方がないし、自分がアンドロイドであっても、アンドロイドに関する知識はあまりなかった。
多分、おやじさんに一から説明してもらっても、聞いたこともない単語の数に眩暈がすることだけは間違いない。
そのくらいなら、貴広が言付けてきたように、休んでいる方がずっとましだろう。
リニアがやってきたのは丘だった。
誰もいない草むらに、リニアはふわりと横になると瞼を閉じる。
（気持ちいい）
草の上で横になって、風のそよぐ音に耳を澄ます。

その音を聞き続けていると、心の中にある焦りのようなものが、少しずつ薄らいでいく。
しばらくそうしているうちに、リニアはまどろみの中に落ちていった。

●●●

すぐ側で、手を握ってくれる人がいる。
その人の姿は見えない。
眼の前は真っ白で、なんにも見えないけど、その人が私の掌を包むようにして、側にいた。

ねえ、あなたは誰？
どうして、そんな眼で見ているの？
どうして、そんなにやさしく笑ってくれるの？
答えはなかった。
だけど、私は何となく解っていた。

この人は、私のことを包み込んでくれる。
ちっく、たっく、ちっく、たっく……
そんな単調な音が響く中、その人は黙って私の側にいてくれた。
ただ、そうしていてくれた。
ねえ、あなたは……こんなにも、私どかけ離れた場所にいるはずなのに、どうしてそんなにやさしく笑ってくれるの？

その質問を口にすることは、結局なかったけれど。

●●●

「おい、リニア。またここで寝ていたのか？」
リニアの体がゆさゆさと揺さぶられた。
瞼を開けると、すぐ側に貴広の顔があった。

「またこんな場所にいたのか、お前は」
「でも、貴広さんこそ、よく丘に来られますね」
そう言うと、貴広はふっと視線をそらした。
「リニア、体の調子は悪くないか」
「か、体ですか？　だ、大丈夫ですよ。何ででしょうか？」
「何でじゃないだろう。昨日も今日も、手の様子がおかしかったではないか」
貴広の眼は真剣だった。
最初は冷たくて表情のない男性だと思っていたが、思ったよりも細かく感情の変化があった。
「で、でも、お仕事、変わりましたから。これからはもう大丈夫ですよ」
「仕事は何に変わったんだ？」
「休みの日に、お庭のお手入れをさせていただいていたので、それをそのままやらせて頂くことに」
貴広はわずかに笑った。
「そうか、お前に向いた仕事ではないか」
「はい。お庭の手入れはとても楽しいですよ」
「そうか、ならばいい」
貴広は大きく溜息をついていた。
よく見ると、何となく貴広の顔には疲れが残っているようだった。顔色もよくない。
リニアは心配げに貴広を見つめた。
「何だ？」
「何だか最近、貴広さんの方が辛そうです。初めてお逢いした時より、顔色が悪くなっていますよ」
「そんなことはないさ。俺は相変わらず元気だ」
貴広は全く表情を変えなかった。
しかし、わずかに伝わってくる痛みのようなものを、リニアは見逃さなかった。
リニアを見て、貴広は一瞬だけ痛ましいものを見るような視線を向けたのだ。
貴広がリニアに対して、表情を消し損ねてしまうようなことは、ふたつしかない。
自分の体が近いうちに壊れてしまうことが解った

か、隷についてよくないことがあったかだ。
「貴広さん。もしかして隷さんのことで何かあったのですか」
貴広はしばらく沈黙した後、ぽつりと言った。
「いや、隷は関係ない」
その沈黙の長さが、言葉を裏切っていた。
しかし貴広はそれ以上その話題について話すことなく、別の話を切りだした。
「リニアには、隷との一番古い記憶というのがどんなものか解らないのだったな」
「はい。隷さんはいつでもリニアの側にいてくれましたから」
隷がリニアを拾ったというスクラップ工場について、リニアは全く憶えていなかった。
物心ついた時から親と一緒にいた子供のように、リニアの『始まり』は朧気だった。
「そうか……」
貴広は物問いたげにリニアを見つめていた。
(貴広さんは、どうしてこんな悲しそうにリニアを見るんですか)
貴広はしばらくリニアのことを黙ってみていたが、やがて立ち上がる。
「リニア、少し散歩につきあえ」
「はい。お供させていただきます」
貴広は座っているリニアに手を差し伸べて立ち上がらせると、そのまま歩き出した。丘をそのまま下りていくと、森が続いている。
貴広が向かっているのは、そっちの方らしい。
一人では迷ってしまいそうな森も、貴広に先導されて歩いていると、鳥のさえずりや葉ずれの音に耳を澄ませながら歩いていけた。
小道を抜けると、突然視界が開けた。
明るい広場の中央に、大きな廃墟があった。
まるで、物語の中にでも出てきそうな古びた館に
リニアは感嘆の声をあげた。

「すごいです。この島にはこんなものがあったのですか？」

「建物自体はかなり古いものらしい。何でも中世ヨーロッパのものだそうだ」

「そ、そうなんですか？　それっておかしくありませんか？」

　この萌えっ娘島のある地域は、かつてヨーロッパと呼ばれたあたりからはかけ離れた場所だ。

　貴広は笑い声をあげた。

「馬鹿のくせに、古いことはよく知っているのだな。そうだ。中世ヨーロッパの建物なんか、世界の果ての島なんかにある訳がない」

「そ、そうですよね」

　だとしたら、何故ここにそんなものがあるのだろうか。問いを発するよりも先に、貴広が廃墟に近づきながら説明する。

「ある富豪がヨーロッパの城を購入して、それを別荘代わりにする為に南の島まで持ってきたらしい」

「ま、丸ごとですか？」

　想像を絶する話だった。

「ああ、世界の終わりと呼ばれる日以前の話だから、どんな人間だったのか解らないが、萌えっ娘島の屋敷もここを手本にして作られている。何の為に、そんなことをしたのかは知らないが、そのおかげで、あの屋敷は不便なんだよ。設計がそのまま中世だから、最新鋭のものがほとんど置けない」

　確かに、この島にある最新鋭の機器は、どことなく肩身が狭そうに置かれている。フルタイムで使うこともできないのだ。

「でも、リニアはあのお屋敷が好きですよ」

　あの屋敷は今まで見たどの場所よりも、人と建物が気持ちのよい形で共存しているように見えた。

「お前は自分が古いから、何でも古いものに愛着が湧くのであろうが」

　そんなことを言いながらも、貴広は微笑んでいる。多分、貴広は不便さを含めてこの館が好きなのだ

ろう。
リニアはそう思った。
「えへへへ、そうかも知れませんね」
二人はしばらくの間、何を話すこともなく、朽ちていくばかりの館を見ていた。
そんな時間が心地よかったせいで、リニアは貴広に隷のことを訊くのを忘れてしまっていた。

貴広と別れた後、休んでいてもいいとは言われたが、リニアは庭に向かっていた。
あの廃墟を見る為に森を歩いたせいか、気分もよかったし、何となく植物を触っていたかったのだ。
無心に庭を手入れしている間は、自分が今にも壊れるかも知れない身であることを考えないでいられる。
やさしい葉っぱや花びら、樹々の感触。
こうしているだけで、心の中にある大切なものがほんわりと温かくなる気がする。
(隷さんとはお庭を見たりしませんでしたよね)
リニアの研究やメンテナンスの為に、隷は常に最新鋭の設備がある閉鎖された場所にしか、リニアを連れて行かなかった。
そのせいで、こんなに自然豊かな場所があること自体を忘れかけていたこともあった。
(もしかしたら、隷さんは植物が嫌いなのかもしれないです)
初めてこの島に来た日、隷は腐った果実の臭気に眉をひそめていた。
今のご時世に庭いじりをしたいと思うのは、リニアの体並みに古い趣味なのかもしれない。萌えっ娘島で自然に触れながら訓練するのを、ここを訪れるメイド達は歓迎していないのかもしれない。
思い出してみれば、休憩時間にゆったりと散歩を楽しんでいる人物など、所長である貴広くらいしか思い当たらなかった。
(そう言えば、貴広さんはお散歩途中によく逢いま

すよね）
もちろん貴広はリニアと違い、所用で歩き回っていることも多いのだろうが、ささやかな共通点を見つけたことで少し嬉しくなった。
（また……一緒にお散歩できるといいな）
リニアは頬を染め、しばらくの間貴広のことを考えていた。

庭いじりをしてほどよく疲れたせいか、その夜リニアはゆったりと休むことができた。
その夜が安らかに眠れる最後の夜だということを、リニアは知らなかった。

（体が……重たいです）
起床時間になっても、リニアの体はひどくだるかった。何とか上半身を起こしたが、それだけで相当体力を使ってしまっていた。
腕に触れてみると、ひどく冷たかった。

（でも、昨日割り振られて今日お休みするのでは、あんまりですよね）
もう一度ベッドに潜り込み、リニアは自分の体をさすった。少しずつだが体が温まり、しばらくしてから何とか動くことができるようになってから仕度を始めた。

どうやら、本当に体調が悪いらしい。
朝食を無理やり呑み込んでも、まともに味すら感じ取れない。
（朝食べて、それから庭の草むしり）
頭の中で今日の予定を繰り返す。
そうしていないと、そもそも自分が何をしているのか忘れそうだった。
トレイを返して、よろよろと食堂を出たリニアは、そのまま庭の方へと歩いていった。

リニアの視界がひどく狭くなっていて、草むしり

しようと思った場所に辿り着くまでに、リニアは体のあちこちをぶつけていた。
(草むしり、しないと……)
しゃがもうとした時、突然胸が苦しくなった。
「あっ」
掌で胸を押さえようとしたが、がくがく腕が震えてまともに上がらない。それでもやっと胸まで掌を持ってくると、苦しい部分を押さえた。
座り込んでしまいたかった。
しかし脚が棒になったかのように、ほとんど動かない。無理に動かすと、変な具合に転んでしまいそうだった。
必死で踏ん張り、何とか立っているリニアの前が暗くなった。
「リニア」
暗くなったと思ったのは、貴広のスーツの色だったらしい。リニアは慌てて笑顔を作った。
「どうした。具合でも悪いのか?」
「い、いいえ。そんなことは……ありませんよ」
昨日の今日でここまで悪化しているのを見たら、少し当たりのやわらかくなってきた貴広が、もう一度態度を硬化させてしまうかもしれない。
「こ、ここは……緑がいっぱいあっていいですね。心が、落ち着き……」
声が震えて、どう考えても心が落ち着くような状態には見えない。
貴広がリニアの肩に手を置くと、リニアは弱々しく首を振った。
「リニア、お前」
「だ、大丈夫ですよ」
このまま自分の体の不具合を、貴広に悟られないようにしたかった。
リニアはよろよろと貴広から離れようとする。
しかし脚の消耗は思ったよりもひどく、二、三歩歩いただけでリニアの体は大きく傾いだ。
貴広の腕が、崩れ落ちるリニアを支える。

リニアは泣きたい気持ちで答える。
「さ、最近です……本当にごく最近なんで。多分、リニアの体は古いので……単に動きが鈍いだけで」
そう言っている間にも、リニアは自分の感覚をほとんど感じられなかった。しかも自分の体が小刻みに震えているのが見える。
貴広は舌打ちすると、リニアの額に自分の額を当てた。
「わっわっ。あ、あの……えっと、貴広さん」
貴広の額は異常に熱かった。
ややあってから貴広が額を離し、眉をひそめる。
「体中の温度調節が滅茶苦茶じゃないか。ものすごく冷たいぞ」
「だ、大丈夫ですよ」
しかし貴広はおもむろにリニアを抱き上げ、そのまま歩き出した。
「きゃあ！　だ、駄目、駄目です。そんな……」
ばたばたと動かす四肢は、貴広の体に頼りなく当

「まともに立てもしないのか」
「だ、大丈夫です……よ」
貴広はしばらく黙っていたが、やがて低い声で命令した。
「手を動かしてみろ」
リニアは言われるままに、腕を上げようとしたが、そもそも神経が通っていないかのように動かなかった。
「また手が動かないのか」
「大丈夫ですよ……そんなに心配しなくても、すぐによくなりますから……」
「水仕事している訳でもあるまいし、手が動かないほど冷たくて大丈夫なはずがあるまい」
リニアはうなだれていた。
しかし、それ程度ですらも、まともに筋肉を動かすのは一苦労なのだ。
「いつからだ。いつから手が動かなくなり始めんだ」
貴広の声は厳しい。

たるだけだった。
「た、貴広さん、駄目ですよ。風邪がうつってしまいますよ」
「馬鹿。お前のは風邪じゃない。俺にうつる訳がないだろう。何故こんなになるまで俺に言わないんだ」
貴広の体がひどく熱い。
しかし、どうやらそれはリニアの体が冷え切ってしまっているかららしい。
「あの、リニアはポンコツだから……こんなことは当たり前で」
貴広は早足でリニアを抱えて進んだ。
抱きかかえてくれる貴広のスーツの胸元を、リニアはそっと握った。
「どうした?」
「あ……す、済みません」
ひどく心細かった。
抱いてくれる貴広のぬくもりを、無意識のうちに求めていた。
リニアはいつの間にか伸ばしていた手を離した。
しかし、貴広はだらりと垂れ下がった手を握り、もう一度自分の胸元に寄せた。
「すぐに謝るな」
「……ごめん、なさい」
まるで親を求める子供のように、貴広に寄り添おうとするリニアを、貴広は胸板にもたれかかれるように位置を変えた。
スーツ越しでは胸の鼓動は聞こえない。
しかし、リニアはまるで貴広の心音を聞いているかのように、徐々に安らいでいった。
「貴広さんの胸、温かいですね。な、何だかメイドがご主人様の胸に抱かれてるなんて……おかしいですよね。そんなメイドなんて、いらないですよね」
多分、今回のことでリニアは本社に帰されてしまうのだろう。
貴広に自分の働きを見せるどころか、彼のやさしさに感謝する機会すらないかもしれない。

「リニアは、いつでも貴広さんに迷惑ばかりかけてしまいますね。何でなんだろう」
じわりと涙が滲む。
リニアは貴広に泣き顔を見られないように、深くうつむいた。

●●●

夢を見ていた。
それは、夢というのもおこがましい、ささやかすぎる夢だった。

リニアがいて、貴広がいて、隷がいる。
特別なことなど何も起こらない。
一緒にお茶を飲んで、お喋りをして、笑いながらリニアが作ったおやつをみんなで食べる。
ただ、それだけの夢だった。
リニアの体が壊れることもなく、貴広も隷も大変な仕事に追われることもなく、のんびりと暮らす。
そして、また同じような明日が来る。
野心家が聞いたら鼻で笑いそうなほど、ささやかすぎて言葉にも出せないような。
そんな夢を見たんだよと、夢の登場人物にすら言えないような、そんな物語を、彼女は胸の中に抱いていた。

●●●

瞼を開けると、すぐ側に貴広の顔があった。
「ああ、起きたか」
「あ……おはよう、ございます」
体はまだけだるいが、ずっと楽になっている。
貴広は肩をすくめる。
「おはようございますじゃない。今はもう、真夜中

だ」
「夜中!?　夜中なのですか？」
「ああ」
確かに部屋は暗く、窓からは夜空が見える。
「夜中に何故、貴広さんがリニアの部屋にいるのですか？」
自分がとんちんかんな問いかけをしているのに、リニアは気付いていなかった。
「何故って」
「何か怖い夢でも見たのですか？」
ぼんやりとした口調でリニアは問う。
「アホ。何で怖い夢を見たら、お前のところに来なければならないんだ」
「だって、怖い夢から醒めて一人だったら、寂しいじゃないですか。だから、貴広さんは怖い夢を見たからここに来たのかな、と」
リニアの意識は奇妙な状態だった。
まるで昔起こったことを思い、重ねているような気分だった。今なら過去に体感した思いをもう一度味わうことができるような気がする。
しかしそんな気分は、数秒ほどたつと突然消えてしまった。
「あれ。貴広さん、どうなされたのですか？　こんな場所で」
「とっとと寝ろ。少しメンテナンスしただけで、全然直っていないんだからな」
「メンテナンス」
その言葉を聞いて、やっとリニアは自分が倒れたことを思い出した。
「あの、貴広さん。その……今日はありがとうございました」
「あまり手間をかけるなよ」
リニアは悲しそうにうつむいた。
「済みません……本当にメイド失格ですよね。ご主人様である貴広さんに、ご迷惑ばかりかけてしまって」

うなだれるリニアの髪を、貴広はくしゃくしゃと撫でる。
「だから、ここにいるんだろう……リニアは。ここはメイドの訓練場だ、完璧なメイドならここには来ない。違うか」
　完璧でないメイドの自分を、貴広は受け入れてくれる。ここに来るものは誰も完璧ではないのだから、気を楽にしてもいい。
　貴広のさりげないやさしさが、リニアの心に染み入ってくる。
「はい……ありがとうございます」
「ああ、解ったら寝ろ」
　リニアが眠りに就くまで、貴広は側についていた。

7　流れゆく雲

お味噌汁の匂い。
ごはんの湯気や焼き魚の匂い。
（おなか、空いた……）
リニアがうっすらと瞼を開けると、トレイを持った貴広が立っていた。どうやら、そのトレイに朝食が載せてあるらしい。
「貴広さん、おはようございます」
「どうだ、調子は？」
貴広はサイドテーブルにトレイを置くと、椅子に腰掛けた。
「もしかしてリニアの様子を見に、わざわざこんな朝早くに」
「たまたま早く目がさめたからだ」
そう言いながら、貴広は簡易テーブルを取り出してリニアのベッドへと運んだ。慌ててリニアは上半身を起こした。
何もできず、ただ世話を受けているだけの自分がリニアは悲しかった。
「本来なら、リニアが貴広さんを起こしに行かなければならないのに」
「とりあえずそんな反省は後だ。メシが冷えるからとっとと食え」
リニアは眼を丸くした。
「もしかして、この朝食はリニアの為に？」
貴広が早めの朝食を、自分の部屋に持って帰る途中で寄ってくれたのだと何となく思っていたのだ。
貴広はてきぱきと簡易テーブルの位置を調整している。
「これも仕事だ。出来損ないのメイドのせいで仕事が増えてたまらんがな」
「ごめんなさい。今日からちゃんと仕事をします。もう動けますから」
リニアは上半身をずらし、簡易テーブルがちょうどいい位置にくるように移動した。

「完治してもいない貴様が動けば動くほど、俺の仕事が増える。だから当分は休みだ。人に迷惑をかけるくらいなら、ベットでおとなしくしていろ」
「はい、済みません」
ぐうの音も出ないとはこのことだった。
「……体を壊して、少しは学んだと思っていたが、まだそんな認識なのか。馬鹿は死んでも直らないというが、本当にお前の馬鹿は直らなそうだな」
「直りませんか」
「ああ、お前の馬鹿は直らんな」
真面目な顔で貴広はとんでもない返事をする。
リニアが何か言おうと思った時、お腹から音が鳴った。
貴広は呆気にとられたような顔でリニアを見ていたが、やがて溜息をついた。
「とっとと食え。メシが冷える。せっかく俺が買ってきたメシだ。温かいうちに食べてしまえ」
「貴広さんもご一緒にどうですか？」
「俺ならもう食った。さっきお前のA朝食を買ってくるときにな。だから、もういい」
そう言うと、貴広は立ち上がった。
「貴広さんと、お食事をご一緒できたらよかったですね」
「まあ、ゆったりと食べるんだな」
夢の中で、みんなと食事をしていたからだろうか。
一人っきりで食事をしなければならないことが、ひどく寂しく思えた。
リニアは貴広の上着の裾を力なく掴んでいた。
「あの……リニアのわがまま、聞いてくださいませんか？」
「何だそれは？」
「……本に、人間は病気になると少しだけわがままを聞いてもらえるって書いてありました。リニアも、今日、ひとつだけわがままを言っては駄目でしょうか」
貴広が溜息をつきながら振り返る。

「だ、駄目ですか？」
「仕方ないな。この馬鹿メイドめ」
憎らしいことを言いながらも、貴広はもう一度椅子に座り直してくれた。
それだけで、ひどく安心できた。

箸を持とうとしたが、まだ麻痺が残っているのかどうにもうまく持てない。箸を構えようとした時に、一本落ちてしまう。
「おい、のろま。手が動かなくて、箸が摑みにくいんだろう」
「あ、あの……」
貴広はうろたえるリニアの手から、そっと箸を奪った。
「ご主人様がお前のわがままを聞いてやっているのだから、いちいち口答えするな。アホ」
「ごめんなさいです」
うつむくリニアに、貴広がいかめしく宣告する。
「ほれ、食わせてやるから、貴様は口だけをアホの子のように開けておれ」
リニアが言われるままに口をぱっくりと開けると、貴広はまじまじとリニアの顔に見入った。
「本当にアホの子みたいだぞ」
「だ、だって貴広さんが」
「うるさい。ほら、口をアホの子みたいに開ける！」
口に入れる時にさんざん遊ばれ、むせたりメインディッシュである鮭をほとんど食べられてしまったりしたが、リニアは貴広の箸を動かすペースに合わせて急いで嚥下していく。
「けほっ、けほ……っ」
米粒が喉に当たり、リニアはむせてしまった。涙を滲ませながら、リニアは何度も咳き込んだ。
「仕方ないな。ご主人様が何故こんなことをしなければならないのか……」
ぼやきながら、貴広はサイドテーブルにある水差しを取って、グラスに注いだ。

何口か飲み干してから、やっとリニアは息をついた。
「ありがとうございました。貴広さんがあまりに早く箸をお使いになるので、リニアも急いで食べたのですが」
「そんな無駄なことはするな。人にはスピードというものがあるからな」
「スピードですか？」
「そうだ。人にはそれぞれ、生きるスピードがある。それに準じて食べる速度も違うんだよ。お前はのろまだから、のろまはのろまらしく食べるんだ。アホの子の顔してな」
「アホの子の顔は、貴広さんがやらせているような気が……」
「うるさい。とっとと食え。ほら、口を開けろ」
夢の中で、三人でおやつを食べた時のように静かではなかったが、文句を言われつつ口を開くリニアは今の状況を幸せだと思った。

食事を終えると、貴広はトレイをよけて簡易テーブルをしまった。
「ありがとうございました。リニアのわがまま聞いてくださって。貴広さんが、こんなにやさしくしてくださったからには、リニア、今日一日おとなしく寝てます。頑張って風邪を治しますよ」
リニアは微笑んだ。
「いや。風邪じゃないだろう、お前のは。まあ、お前が寝ていればこの屋敷にも平和が訪れるから、願ったり叶ったりだが」
全く持ってその通りである。
「反論ができません……」
しょげかえるリニアに、貴広は苦笑した。
「まあいい。養生していろよ」
空になったトレイを持って、貴広は部屋から立ち去った。
リニアはしばらくの間、貴広が出ていった扉を見

つめていたが、やがてもう一度ベッドに横たわった。
（生きる……スピード）
他人と自分が必ずしも同じスピードを持ち合わせているとは限らない。
今まで考えてもみなかった視点を示され、リニアは思わず真剣に考え込んでしまっていた。
人よりゆっくりとしか、仕事をこなせない自分のことをコンプレックスに感じていたリニアは、貴広の言葉で思った以上に励まされていた。
（貴広さん……）
リニアは貴広の言う通りに瞼を閉じ、ゆるゆると眠りに就いた。

ノック音で眠りから醒めたリニアは、上半身を起こした。
「リニア、いるか？」
貴広の声がドア越しに聞こえる。
「少々お待ち下さい！」
リニアはベッドから慌てて下りると、急いでピナフォアドレスに着替えて、身繕いすると扉を開けた。
「わざわざ来て頂いて……言ってくだされば、リニアの方から出向きましたのに」
「お前がそうやって動かなくても済むように、わざわざ来てやったんだ。おとなしく寝ていろ。本を持ってきてやったぞ」
貴広の腕には何冊か本が抱えられていた。
この時代に製本した旧式の本などはめったにないが、萌えっ娘島はそういったものの宝庫らしい。
やさしい色遣いの綺麗な装丁の本が、一番よく見える位置にある。
「わあ、ありがとうございます」
数冊の本を受け取ると、リニアはバランスを崩して倒れそうになる。
貴広はリニアの体を支えて、安定するように立たせてやった。
「相変わらず非力だな、貴様は。この程度の数の本

でよろめくとは」
「あっ。す、済みません」
リニアは慌てて貴広の腕の中から抜け出すと、熱くなった頬を持て余しながら、サイドテーブルに本を置いた。
「お前がどんな本なら読めるのか、解らなかったんでな。俺の本棚から適当に持ってきた」
リニアはサイドテーブルに積んだ本の背表紙を、少しかがんで確認する。置いた時に一番上になった意味不明のタイトルの本は、かなりいかめしい印象だった。
「何だか難しそうな本も混ざっていますね」
貴広は眼鏡を直しながら、リニアが手に取った本を見やった。
「数学的な本の方が、アンドロイドには読みやすいのではないのか？　そんな話を聞いたことがあったぞ」
「……ぷ、ぷりんきぴあ・まてまてぃか？　だ、題名でしょうか、これ」
どう考えても謎の呪文としか思えなかった。
しかし貴広は軽くうなずき、口を開いた。
「ああ、『数学原理』だな。ラッセルとホワイト・ヘッドの共著だ」
もはや難しいを越えて、渇いた笑いを漏らすしかない状態だった。
「な、何だか面白い名前の人ですね。呪文みたいな題名の本ですし……でも、リニア、アンドロイドですが、数学的なご本はちょっと苦手っぽいです」
「そうなのか」
リニアは堅苦しくなさそうな本を探して手に取る。
英文で書かれた詩のようだが、いくつか知っているものもあるようだ。かなりポピュラーなものらしい。
「それは昔あった童謡の詩集だ。英語の原文で書かれているがな。今じゃメロディもなくなったものも

多いらしい。そんなものが読めるのか？」
「はい……何だか、知っている曲もあるみたいです」
英詩を見ているだけではすぐにメロディは出てこないが、いくつかは思い出せそうだ。
「
貴広の読書歴はかなり偏っていたが、リニアにはあまり解らなかった。
今も手に持っている童謡の本に見入っている。
「どうした。その本がどうかしたか？」
「いいえ。あ、ありがとうございます。ベットの中で読ませていただきますよ」
貴広はリニアの着ている服が、仕事用のピナフォアドレスであるのを、さりげなく視線で咎める。
「休めと言うのに、仕事用の服を着ているのだな」
「あ……何だか誰かが来たら寝間着じゃ失礼かなと思いまして」
それに、今のように貴広を含めた男性が入ってきた場合、寝間着姿で応対するのは恥ずかしかった。
「どこの世界の病人が見舞いに気を遣うんだ」
「で、でも、寝間着じゃやっぱり……それに、もう体の調子もいいんですよ」
「ふん、貴様の調子がいいは当てにならんだろうが。さてと、そろそろ戻るか」
扉の方へ歩き出した貴広に、リニアはおずおずと呼びかける。
「あの」
「何だ」
「……そろそろ仕事してもいいでしょうか？」
貴広は呆れたようにリニアを見やったが、やがて大げさに溜息をついた。
「貴様は何度言わせれば……」
しかし、何かを思いついて小言を引っ込める。
「そうだな。なら、お前にひとつ仕事を与えよう。この中の本から一冊だけでいい。一冊だけちゃんと読め。部屋で落ち着いて本を読め。それがお前の仕事だ」

「はい」
　貴広の思いやりが身に染みた。
　しかし部屋に閉じ籠もったままでいると、自分が他人の役に立てないお荷物だという劣等感に、時々耐えられなくなってしまう。
　わずかでもいい。誰かの役に立ちたかった。
　半泣きになっているリニアのことを、貴広はさりげなく見やった。
「天気がいいな。いい風が吹いているみたいだから、散歩に連れて行ってやろう」
　貴広が窓を開け放つと、気持ちのいい風が部屋に入り込んでくる。
「本当ですか？」
「あまり部屋に閉じこめて置くと、お前は何をしでかすか解らないからな」
　貴広はリニアの手を引いて、部屋から出た。
「うわぁ、いい風ですね」
　外に出るとやや風が強く、リニアは眼を細めた。
「寒くないか？」
「あ、大丈夫ですよ。ちゃんと厚着してますから」
「そうか。ならいい」
　貴広はいつもよりもゆっくりと、リニアのスピードに合わせて歩く。
　二人はどこに行こうと言うこともなく、何となく丘を目指していた。
　この時期に似合わないほど、空は澄んで青かった。
　風にちぎられ、流れていく雲の白さは決して青と混ざり合うことなく、飛ばされていく。
「あ……」
　風の音に混ざって、何かが聞こえた。
　リニアはその音を聴き取ろうとして、思わず立ち止まっていた。
　風に乗って、世界中の音が流れていく。
　ささやかな音、何気ない音も、心を打つ美しい言葉も、痛ましい争いの音も。

全てが平等に風に乗り、地球を巡っている。
「どうした。体の調子でも悪いのか？」
「いいえ」
先に進んでいた貴広が戻ってくると、リニアは微笑んだ。
「心地よい音ですね」
「音なんて聞こえないが」
リニアは眼を閉じて耳に手を添えると、数多の音を求めるようにもう一度耳を澄ました。
「そうですか。リニアには、心地のいい音が聞こえます」
貴広はしばらく首を傾げ、自分も耳を澄ませてみたが、やがて首を振った。
「聞こえないな、何も。俺にはただ、風の音しか聞こえない」
「そうですか」
今、風の中に響く美しい音色を、貴広は聴くことができないのだ。そう思うと残念だった。
「貴広さんにも、この音が聞こえればいいのに」
「お前と俺では違うからな。アンドロイドの鋭敏なセンサーだから聞こえるんだ、その音とやらも、人間である俺には聞こえない」
貴広は何事かを考えながら、空を見上げる。
「ここには……何の音もありはしないさ」
「そんなことはないじゃないですか。ここにはいろいろな音があるじゃないですか」
リニアの言葉を、貴広は黙って聞いている。
しかし、世迷い言と斬り捨てる様子はない。
「風がいろいろな音を運んできます。それを捕まえてあげて……」
「捕まえる、ね」
幾千の音、幾億の音。
ただひたすらに青い空を駆け巡る、無限の音。
貴広は瞼を細めながら空を見ている。
「風が強いな」
「風が雲をどこかに運んでいきますね。どこに行く

んでしょう」
「雲はどこに行こうが関係ないさ雲には心がない。どこに流されようがお構いなしだ」
「そうなのですか?」
貴広の眼は、憂鬱そうに空を見続ける。
「心がなければ、どこに流されようが関係などない」
「雲には……心が、ない」
あんなに楽しそうに、自分の行き先へと流れていく雲に対して、貴広は『心がない』と言う。
口を開こうとしたリニアに、貴広が問いかける。
「リニアは、空を見るのが好きなのか」
「はい」
「そうか……俺は嫌いだ」
空が嫌いだと言う貴広のことが、何故かひどく悲しく思えた。
「そうなんですか?」
「ああ、青い空は嫌いだ。特に白い雲が嫌いだ」
「でも、貴広さん。よくここに来られているじゃないですか?」
「雲はお前と同じだからだ。風によって、あたかも自分の意志があるように動いているように見えるが、実際はそう見えるにすぎない。だから……」
辛そうな眼で、貴広はリニアを見やる。
「雲もお前も嫌いだ」
「リニア、貴広さんにまた嫌われてしまいましたね。でも、仕方ありませんよね。ご迷惑ばかりかけているのですから」
貴広はいつものように憎まれ口を叩くこともなく、ぽかりと一発頭を叩くこともない。
ただ、黙ってリニアを見ている。
「でも、雲は嫌わないでほしいですよ。だって、雲にはちゃんと心があるんですもん」
リニアは貴広に微笑みかけた。
「リニアは貴広さんの言う通り、ただの機械人形だから心がないかもしれないけど、雲は心を持ってますよ」

夢見がちな言葉だと笑うことなく、貴広は低い声で呟いた。
「何故、そんなことが言える？」
「リニアですね、雲が大好きです。ってことは……雲の中に大好きって心があるんだと思います」
「言ってる意味が解らんな」
「だって、心がないはずのリニアが、雲を大好きになるなんておかしいです。リニアにも雲にも心がなければ、大好きって思いはどこにもなくなってしまいます。大好きって思いは、どこかの心にあるんだと思います。だから……リニアに心がないのなら、雲の方に心があるんですよ」
貴広は長い間リニアを見ていた。
しかし、しばらくしてから眼をそらし、吐き捨てるように言葉を漏らす。
「馬鹿馬鹿しい。大好きなんて思いはどこにもない」
「そんなことはありませんよ。大好きって心は、ここにありますよ。その『ここ』は、リニアの中なのか、雲の中なのか解りませんが、でも、大好きという心が『ここ』にあるというのは、確かなことです」
ごく自然に、リニアはそう説明していた。
その説明を聞いて、貴広は眼をそらす。
「ふん、俺はそういうことを言うお前が嫌いだし、この空も、そしてこの雲も嫌いだ」
貴広は何もかもを『嫌いだ』と言っているのに、リニアは何となく嬉しくなって笑みを漏らした。
「嫌いなのに、ずっと見ているのですね。この丘に散歩に来るのは、リニア以外には貴広さんだけだったのに。貴広さんはずっと、空を見上げてましたよ」
「嫌いだからだろう」
「そういうことにしておきますよ」
貴広は軽く、ぽかりとリニアの頭を叩いた。
「いた……」
「生意気なことを言うな。アホのくせに」
「えへへ、ごめんなさい」
あれだけ嫌いだと言った空を、貴広はひたすらに

見上げる。
「雲に心があったとして、何故雲は流される。ただ風の力に自分の運命を任せてしまうんだ」
それは、本当に雲の話だったのだろうか。それとも、リニアのことを指しているのだろうか。
解らないまま、リニアは答える。
「雲は、風の力を信じているからですよ。雲は、風のことが好きだからですよ。だから雲は、風に身を任せられるのですよ」
風の向きが変わって、貴広がリニアをもう一度部屋に連れていくまでの間、二人は青い空を見上げたまま、そこに立ち尽くしていた。
「この音色、いつか貴広さんにも聞こえる。そんな気がします」
「多分、近いうちに足りない部品が揃うから」
部屋の前まで送ってくれた貴広がそう言う。
「えっ?」
「だから修理まで自分の体を壊さないように、おとなしくしていろ。解ったな」
「はい。ベッドで本を読んでいることにします」
「ああ」
リニアが微笑むと、貴広は居心地悪そうな雰囲気になった。
「なあ、リニア」
「はい?」
「隷が、もしお前を……」
「え」
失言だったと言うように、貴広が唇を噛む。
「いや、何でもない。俺が何とかする」
「あの」
「すぐに着替えてベッドに戻れ」
貴広の有無を言わさぬ態度に、リニアはそれ以上訊くことができず、おとなしく寝間着を手に取った。
それを確認して、貴広が扉を閉める。
まだ眠くはなかったが、リニアは寝間着に着替え

るとベッドに潜り込んだ。
（貴広さん、隷さんのことで何を言おうとしたのでしょう）
『隷が、もしお前を』
この言葉に何を続けるつもりだったのだろう。
それは間違いなくリニアに関することだろうと想像できるが、質問しても答えてくれるような貴広ではないだろう。
しばらくその言葉について考えていたが、全く思いつかなかったので、諦めて本でも読むことにした。
気になっていた童謡の本を手に取る。
古びてはいるが手の込んだ装丁の本は、見ているだけでやさしい気持ちになれる。
英詩はどれも平易な言葉で書かれた、子供の為の遊び歌だった。
リニアはめくったページに描かれている子供達の他愛ない振り付けや、みんなでくるくる回って踊る姿を微笑ましく見つめた。
（……こんな風に、みんなで遊びたかったなって、いつも思ってましたよね。ほとんど、お友達と遊べなかったから）
リニアは笑みを漏らしてから数秒たって、自分自身にその記憶がないのを理解する。
中途半端にしか残っていない記憶というのも、こういう時にはもどかしい。いくら部品の問題だと言われても、深く思い起こそうとするたびにこれでは時々悲しくなってくる。
しかし、何を懐かしがっているのか思い出せないまま、リニアはほんわりとしたノスタルジーに身を任せ、読み進めていく。
詩のいくつかはメロディと共に思い出せるほど、よく馴染んでいたもののようだ。
時折、その歌を口ずさみながら、リニアはページをめくった。
「あ」
ひとつの英詩に、リニアの眼が釘付けになる。

My grandfather's clock was too large
for the shelf

So it stood ninety year on the floor

It was taller by half
than the old man himself

Though it weighed not
a pennyweight more

It was bought on the morn of the day
that he was born

And was always his treasure and pride

But it stopp'd short , Never to go again,

When the old man died

　どこから湧き上がってくるのか解らない思い出が口からこぼれ出るように口ずさんでいるうちに、リニアは眠くなってきた。
　その本に栞を挟むとリニアは横になり、吸い込まれるように眠りに落ちていった。
　まだ夜の明けぬうち、最後の部品が運ばれた。

「リニア」
　そっと揺り起こされ、リニアは瞼を開けた。
　まだ眠いままで貴広に微笑みかける。
「あ、貴広さん。おはようございます」
「リニア、部品が全て揃ったそうだ。手術ができる状態になった」
　貴広はやさしい表情を浮かべていた。
　最近、貴広はリニアに穏やかな顔をしてくれる機会が増え、何となく嬉しかった。

「本当ですか。ありがとうございます」
「今、起こしてやる」
貴広がリニアの背に腕を回した時、胸ポケットに入っている固いものに気が付いた。
リニアはそっと胸ポケットに触れた。
「ポッケがふくらんでますね。これ、何ですか」
「ああ、これか」
貴広はポケットから、古めかしいデザインの懐中時計を取り出した。
「この機械は何ですか?」
「時計だ」
「時計ですか。この子が……」
今のご時世、時計にしか使えない上に場所を取るようなものは大抵の人間は持ち歩かない。
いたるところに時間を知ることができる道具はあるが、専用機などは萌えっ娘島のこの邸宅のあちこちに置かれた置き時計でしか見たことがなかった。
持ち歩きできる専用機など、実際には初めて見ることになる。
「ああ、隷が渡してくれたんだ。俺の忘れ物だと言っていた」
「隷さんが……」
手の込んだデザインの懐中時計に、リニアはそっと手で触れる。
「すごく、古いですね。ずっと……ずっと前からあるのですか」
「ああ、俺が生まれるより、お前が生まれるより、ずっと、ずっと昔からある時計だろうな」
何となく、囁くような声で二人は語り合っていた。
「この子、昔は時を刻んでいたのですか」
「ああ。こんな形だが時計だからな。昔は時を刻んでいた」
「もう、動かないのですか」
「ああ、動かない。たぶん永久に」
リニアはその冷たい時計に頬を寄せた。
「そんなこと、ありませんよ。この子、動きますよ。

「みんなと同じ時間を過ごしたいんですもの。その思いが近くで抱いてくれるなら、この時計はまた時を刻みます」
貴広はしばらくの間、時計を愛おしむリニアを見つめていたが、やがてリニアをそっとベッドから下ろす。
「そろそろ、手術だ」
リニアは貴広に付き添われ、メンテナンスルームに向かった。
手術の直前、部屋の前でリニアは貴広に告げる。
「時計さんも、また動きますよね」
長い長い手術だった。
しかしカプセルに入っている間、アンドロイドの意識はない。
おやじさんや整備員達の苦労を見ることなく、リニアはその間、長い夢を見続けていた。

何となくなんですけどね」
古くても、今こそ動いていなくても、まだこの時計は死んでいない。
リニアにはそんな気がした。
「何でそう思う?」
「時計は、みんなの時間を一緒にする為に、世界にあるのですよ」
「何だそれは?」
「リニア、貴広さんが持ってきてくれた詩集を読んでいたんです。その中に時計の童謡がありました。おじいさんの時計という」
リニアはベッドで見ていたあの歌を口ずさむ。
「あの詩には、メロディがあったのか?」
「本当にこうだったのかよく解らないのですが、何だか記憶にあるのですよね、こんなメロディが。おじいさんと時を共にした、昔、昔の大きな時計の歌です」
リニアは愛おしそうに時計に頬ずりする。

●●●

そこは、風の吹く丘の上だった。

少女はいつも、そこで遊ぶ子供達を見つめたり、鳥の歌声を聞きながら、ただ立っていた。

自分も、いつも他の子供と一緒に遊びたいと思っていたが、それが叶えられたことはなかった。

少女の体は、子供達の何気ないふざけあいや追いかけっこなどに耐えられるほど丈夫ではなかったし、今までずっと大人以外とまともに口を利いたこともない彼女は、子供達に何と話しかけていいのか解らなかったのだ。

子供達の方も悲しそうに見つめているだけの少女を、仲間に入れようとはしなかった。

だから少女の数少ない友達は、父が買ってくれた本と、決してもの言わぬそよ風や白い雲、花の匂いに鳥のさえずりだけだった。

少女のことを心配する大人達も、多忙や具体的にはどうしたらいいのか解らないこともあり、少女が病弱で内気な子供なのだから、友達がいなくても仕方がないのだと思うことにしていた。

そこにいた少年は、特に他の子供達と変わっていた訳ではなかった。

多少整った顔立ちをしてはいたものの、友達を率いるリーダーシップを誇示することもなく、たくましい体を持っていたり、金持ちらしい服を着ている訳でもなかった。

少女が少年に気付いた理由のひとつは、ごくささやかなことだった。

彼は大抵一人で遊んでいて、それを苦にする様子もなかった。そのことが少女の気になったのだ。

丘に来ると、一人でも楽しそうに遊んでいる少年を見つけるたび、少女は何となく嬉しくなった。

しかし、同世代の子供に話しかけたことのない少

女は、ただ見ているしかできなかったし、一人で遊ぶ少年は誰かが見ていることに気付くこともなかった。

そう、あの日までは。

●●●

低い声がすぐ側で聞こえた。

「何がいらなければ送り返してくれだ。このアホが。みんなからこんなに愛されて……今までにこんなにみんなに愛してもらったメイドなんかいないぞ、リニア……」

そっと髪を撫でる感触に、リニアはうっすらと瞼を開く。

「貴広さん、いてくださったのですか？」

声を出そうとすると、かなり力を消耗する。

手術の直後なので、体が回復していないのだろう。

貴広はそんなリニアに微笑みかけると、大きくうなずいてみせた。

「ああ。俺だけじゃなくて、他のみんなもいてくれたぞ。あまりにもお前の目覚めが遅いから、みんな帰っちまったけどな。おやじさんとか、お前がトマトをやってたヘリポートの若い連中とかいただろう。あいつらもお前が目覚めるのを待っていたぞ」

みんなが自分の目覚めを待っていてくれたことも、それを嬉しそうに告げる貴広のやさしさも、リニアは嬉しくて堪らなかった。

「ありがとうございます」

「ああ、みんなに感謝するんだな。みんな、お前の為に頑張ってくれたんだからな」

「はい」

じんわりと涙が滲む。

リニアは涙で視界がくもりかけたまま、貴広に微笑んだ。

「じゃあ、俺もそろそろ寝るから、お前も充分休んでおけ。解ったな」

「はい、おやすみなさい」
貴広が出て行ってから、やっとそこが自分の部屋であることに気が付いた。
たくさん眠ったはずなのに、扉が閉まるとすぐ、リニアは眠くなってしまっていた。

その後、かなり長い間リニアは夢も見ずに眠った。だからこそ、貴広がおやじさんと深刻な顔を突き合わせて今後について話しているのも知らなかったし、海の向こうからやってくる不穏についても知るよしもなかった。
ただ、物言わぬ風と力強く羽ばたいてこの島を目指す鳥だけが、予兆を運んでくるのだった。

8　なくなった機械の音

元気になったら何をしよう。
寝込んでいた間に放置していた庭も手入れしたいし、体力が戻っているなら掃除もしたい。
この古めかしい邸宅を慈しんであげたい。
まどろみの中、リニアはそんなことを考えていた。

しかし、朝一番に様子を見に来た貴広は、厳しい顔でこう言ったのだった。
「今日一日は安静にしていろ。おやじさんが今日一日は絶対に動かすなと言っていたぞ」
「一日中ですか?」
「ああ、今日一日はこの部屋で過ごせ。何かあったらブザーで誰か呼べばいい」
気が付くと、サイドテーブルにはいつの間にか設置されたブザーが置かれていた。
これでは不便だから、と歩き回る訳にもいかない。
リニアはがっかりして布団と睨めっこした。
「解りました」
「暇なら本でも読んでいろ」
「本当なら、リニアが貴広さんのお世話をしなければならないのに、こんな……」
「気にするな。お前は今は病人だ。病人はやさしくされてても構わん。安心しろ。体調が治ったのが確認されたら、またビシバシいじめてやるから」
「貴広さんはいつだってやさしいじゃないですか。いじめてなんかいないですよ」
「そうか。なら、今まで以上にいじめてやるから覚悟するのだな」
貴広が真面目くさった顔で言うと、リニアは恥ずかしそうに頬を染めた。
「え、あの……やっぱり、やさしくしてほしい……です」
「安心しろ。気が向いたらまた顔を出してやるから、少しでも回復しているように」

「はい」
　窓際から小鳥のさえずりが聞こえる。
「それじゃ、養生することだ」
　貴広は胸の懐中時計で時間を確認すると、部屋から出ていった。
（回復……しないといけませんよね）
　本当なら邸内のあちこちを小ぎれいにしたり、気持ちよく片づけたりしたいのに、ベッドの上ではそれこそ本を読むしかできない。
　リニアは童謡の本をめくって小声で歌ったり、懐かしい童話に眼を通しながら時間を過ごした。
　時々、窓から見える美しい空に見入って、ガラス越しに風の音に耳を澄ませようとする。
　しかし、聴いて聴けなくはないという程度でしかなく、髪を撫で、耳をくすぐる風がないと、やはり寂しかった。

　昼食時、約束通り貴広はリニアの部屋を訪れた。
手にはいい匂いのするトレイを持っている。
「貴広さん、来てくださったのですか？」
　トレイに載っているのはどうやら食堂の定食らしく、食堂のお皿が見えた。
　そこに載っているメニューがほんの少し見えたところで、リニアは眼を輝かせる。
「お前も見たことはあるだろう。社員食堂で、最も人気がある伝説のドラムだ」
　貴広が得意そうに宣告した。
　ドラムというのは社員食堂で最も人気がある、言わば伝説のメニューだ。
　値段が安いのにハンバーグ、チキンソテー、粗挽きウインナー2本が一皿に載せられた、ボリューム満点の定食だった。しかもボリュームだけでなく、味もいいとなれば人気もむべなるかな、である。
　リニアも時々、食堂で食べているラッキーな人を遠目で見て、おいしそうだと思っていたのだ。
　リニアは感嘆の声をあげた。

「よく買えましたね。リニア、今まで買えたことないんですよ」
「どうだ。すごいだろう」
「すごいですね。ふたつもお食べになるのですね」
貴広は笑いながら、サイドテーブルにトレイを置いた。
「アホ。ひとつはお前の分だ」
「え?　えええええっ!?　リ、リニアのですか?　そのドラム」
「ああ。霧島がな、お前の為に食券を横流ししてくれた」
さりげなくダーティな言葉が混ざっているが、リニアは霧島の気遣いが嬉しかった。
「じゃ、食べるか」
貴広は簡易テーブルをリニアのところまで持ってくると、トレイを載せた。
「こ、これがドラムですか。かなり大きいですね」
数量限定のドラムは、昼休みが始まったとほぼ同時に売り切れてしまうので、リニアが見たことがあるのは食べかけか、ほとんどなくなった皿くらいだった。
美味だという話だけを、これでもかと聞かされていたので誰も手をつけていないドラムを見たのは、これが初めてだった。
「感想はいいからとっとと食え」
リニアが感激している横で、貴広はとっくに食べ始めていた。
「それではリニアも、いただきます」
ぺこりとお辞儀をすると、リニアもフォークとナイフを手に取った。
伝説のメニューと言われるだけあって、肉尽くしに近いのにお腹にもたれることもなく、するすると食べられてしまう。
リニアの為にわざわざ人気のメニューの食券を用意してくれた霧島にも、こうして一緒にドラムを食

べてくれる貴広にも、感謝の気持ちでいっぱいだった。
「何だか、皆さんにこんなによくしていただいて、リニア……」
じわりと涙が滲んでくる。
「涙ぐむな。貧しい家の子が、初めてレストランの料理を食ったみたいだぞ」
「あ……そ、そうですよね」
リニアは涙を拭くと、まだ残っているハンバーグを口に運んだ。

食事を終えると、貴広は空のトレイを自分で片づけて立ち上がった。
リニアの膝の上に載っている簡易テーブルも早々に片づけられる。
「ごちそうさまでした」
「ちゃんと寝ているんだぞ」
「はい。あ……霧島さんに、ありがとうございましたと伝えていただけますか?」
値段こそ安いものの、今でも食べられない人がたくさんいるドラムの食券を調達してきたのだ。苦労もあっただろう。
それに、何より一人で寂しかったリニアにとって、貴広との食事時間は充実したものだった。
「ああ、解った」
リニアの思いに気付いているのかいないのか、貴広は軽くうなずくと部屋から出て行った。
貴広の気配がなくなってから、リニアはひとつの事実に気が付いた。
この島はメイドを訓練する為の場所なのだから、リニアの食事を配膳するのもメイドの仕事だし、一緒に昼食を食べたとしても、本来ならメイドが片づけに来なければならない。
しかし、貴広はここに来る時には、自分で料理を持ってきてくれるし、片づけや簡易テーブルの設置といった雑用まで全て自分でする。

それは奇妙なこととまで言わなくても、特別なことであるのは間違いなかった。
(貴広さんは……どうしてそこまでしてくれるんでしょう)
よほどリニアの体がひどい状態なのだろうか。手術が終わってもまだ眼が離せないほど、自分の体はぼろぼろだったのだろうか。
一日も、一時間でも早く、誰の役にも立てるようになりたい。
誰かのお荷物で居続けるのは、その『誰か』のことを大事に思っていればいるほど苦しいのだ。
(早く、元気になりたい)
そう思いながら、リニアは窓の外に視線をやった。

●　●　●

「それは何の歌なんだ?」
隷が口ずさむ歌を聞きつけ、飯島が問うた。
隷はわずかに笑い、首を振った。
「いや……何となくね」
「お前が歌を歌っているところなど、初めて見た。よっぽどこの一件で奴をはめてやれるのが嬉しいのか? まあ、気持ちは解るぜ。俺もその点に関しては同じ気持ちだからな」
にやりと笑う飯島から眼をそらし、隷は空を見上げた。
「天気もいいようだ」
「ああ、そうだな。まあ、あっちはめったに雨なんか降らないらしいから、向こうで天気の心配をする必要はなさそうだがな」
「……ああ」
隷は表情を変えず、飯島の側から歩き去る。
何を考えているか解らないかつての同僚の後ろ姿を見送りながら、飯島は溜息をついた。
(あいつの考えていることは、さっぱり解らねえな)
しかし飯島は、別の部署になって数年も経った元

同僚の気まぐれについて、それ以上追及しようとはしなかった。
それがどういう未来をもたらすか、飯島が知ることになるのはまだ先のことだった。

●●●

夜。月明かりが差し込む部屋の中。
リニアはすとんとベッドから下りて、部屋にある箪笥の前に立った。
（もう、元気になってますよね。体調もいいし）
戦闘モードに切り替わる音を確認して、リニアは箪笥に手を伸ばした。
とりあえず箪笥を持てるくらいに回復していれば、貴広もきっと仕事に復帰することを許してくれるだろう。そう思うと、できれば今のうちに試しておきたかった。
「にーっ」
しかし、力を込めているはずなのに、箪笥は全く動かない。
「にー……」
一生懸命持ち上げようとしていた時、ノックの音が響いた。
『リニア、起きているか？』
貴広の声に、リニアは箪笥から離れて扉の方へと走る。
「は、はい。今、開けます」
扉を開けると、貴広を招き入れた。
「い、いらっしゃいませ。パジャマで申し訳ありません」
「元気そうだな」
「はい。リニア、元気になりましたよ。ほら」
この機会に、華々しく箪笥を持ち上げる姿を見てもらおう。
そう思ったリニアは再び箪笥と向かい合い、持ち上げようと試みた。

しかし、しばらく力を込めていたが、全く箪笥が動く様子はなかった。リニアは荒く息をつきながら、貴広に笑いかけた。
「ほ、ほら。こんなに元気ですよ」
しばらく冷たい眼で睨んでいた貴広が、おもむろに頭をはたく。
「何が『ほら』なんだよ」
「もしかしたら動くかな、と。何だか動かせそうな気がしたので」
「ああ、解った解った。また腕の関節が外れるからベットに戻れ」
貴広はそれ以上リニアの話を聞かず、ベッドに無理やり入れた。
「どうだ？　体の調子は」
「おかげ様で、今までで一番いいですよ。元気まんまんですよ」
笑顔のリニアにうなずきながら、貴広は掛け布団を直してやる。
「そうか。が、無理するなよ。お前の元気は全く当てにならんからな」
「今度は大丈夫ですよ。かなりいい感じですから、もう一度箪笥を持ち上げてみましょうか？」
「それはさっき失敗したではないか。おとなしくしていろ。体調がよければ、明日から復帰できるかどうか確認する」
「はい。朝まで長いですが、リニア、朝まで待ちます。そうしたら仕事していいのですよね？」
「おやじさんの許可が出ればな」
リニアは幸せそうに眼を潤ませる。
「明日から仕事ですね。リニア、すごく嬉しいです。また働けるなんて」
「まあ、よく休んでおくんだな」
「ありがとうございます。皆さんにご迷惑しかかけていないのに、それでもリニアをここに置いてくださって……」
リニアの言葉を貴広は遮る。

「そういうことを言うな。おやじさんや整備の連中に失礼だぞ」
「あ……す、済みません」
「それを言って許されるのは俺だけだからな」
「はい」
何となく嬉しくなって、リニアは笑っていた。
「さてと、帰るかな」
「お、送っていきます」
リニアがベッドから出ようとすると、貴広は厳しい声で叱責した。
「寝てろと言っているだろうが」
「で、でも、見送り……」
「うるさい。命令だ。明日の朝までベットに張り付いていろ」
貴広の言葉で、リニアは一瞬のうちにがっかりした顔になる。
「明日の朝まで、ベットから出られないのですか」
「ああ、そうだ」
もっと貴広の側にいたかった。もう少しだけでいいから、話をしていたかった。
「あの……その、あの、おトイレは？」
「お前、アンドロイドのくせにトイレに行くのか」
貴広は呆れた視線を向けた。
「あの、その……そうなっているようです」
そもそも、他のアンドロイドが『トイレに行かないらしい』ということを知ったのは、この島に来る少し前だった。
それまでは、全ての人間とアンドロイドがトイレに行くものだと思っていたのだ。
「トイレは許そう」
「本当ですか？」
リニアは軽い足取りでベッドを下りた。
「貴様、人の話を聞いていなかったのか？」
「あの……今、おトイレに行っては駄目でしょうか」
貴広は大げさに溜息をついた。
「旧型の分際で、そういう悪知恵だけは働くのだな」

「駄目でしょうか」
もちろん、特にトイレに行きたい訳ではない。
ただ、もう少しの間だけ貴広の側にいたかったのだ。
「まあ、寝る前にトイレに行った方がいいしな。勝手にしろ」
二人は扉を開けて、廊下に出た。

月の指す廊下を、リニアと貴広は歩いていた。
そっと後をついて歩くリニアを、貴広はいぶかしそうに見やる。
「リニア、何故後ろを歩く。知らない間に倒れていそうで、気になって仕方がない」
「す、済みません」
リニアは小走りで貴広の横についた。
長身の貴広の横を歩くと、貴広の影に自分がすっぽりと隠れてしまう。時折、パジャマの脚だけが月光に照らされていた。
「な、何だか……た、貴広さんの横を歩くと、緊張してしまいますね」
「馬鹿か。何でそんなことで緊張するんだ」
「何でって……えっと」
リニアの頬が熱くなる。
気恥ずかしさをごまかす為に、眼に入った月を指さしてみせた。
「あ、あれっ。お月様ですよ。貴広さん、お月様です！」
「そりゃ月だって見えるだろう。空が晴れてて、この大きな窓なら」
呆れたような顔をしながらも、貴広は月を見上げてくれた。
月を見上げながら歩く。
ただそれだけのことで、リニアは安心するような、せつないような、不思議な気分になる。
「たまには、体を壊してみるのもいいですね」
「何だ、それは」

「だ、だって……た、貴広さんと並んで歩けるから」
「体を壊さなくても、横など歩けるだろうが」
「で、でも、初めてだったから、その、嬉しくて。ごめんなさい、はしゃいでしまって……貴広さんがリニアに逢いに来てくださるのですもの。はしゃいでしまいますよね」
貴広はしばらく黙っていたが、やがて小声で『馬鹿』と呟いた。
トイレまでの距離を歩く間、緊張しているせいか、何を言おうとしてもくだらない言葉しか出てこなかった。
トイレの前で貴広と別れた後も、リニアは自分のした言い訳も忘れて、ただ貴広の後ろ姿を見送っていた。
胸の中で、音が聞こえる。
懐かしいはずの、今は誰も知らない音が。
リニアはしばらくの間、廊下に立ち尽くしたまま心の中で再生する音に耳を澄ませた。

おやじさんから、やっとベッドから下りる許可をもらったリニアが、午前中の庭の手入れを終えて一番に向かったのは、あの、風の吹く丘だった。
「気持ちいい」
相変わらず風はやさしくそよぎ、リニアの髪や肌を撫でていく。
リニアは子供のように草むらに寝転ぶと、草の匂いを嗅いだ。この匂いも久しぶりだった。
さわさわと草がなびく音を聴きながら、リニアは幸せそうにまどろみの中に落ちていった。

それは夢だった。
見ているリニア自身にも夢なのだと解る、ずっとずっと遠い時間のこと。
(あ……誰かいる)
小さな女の子が丘に立っていた。
白い帽子とワンピースの裾は、風に吹かれて揺ら

いでいる。
　彼女の顔は見えなかったが、泣くのを堪えている
ようだった。
『ねえ』
　そこには少女以外に誰もいなかった。
　彼女はそこにいない誰かに呼びかけている。
『逢いたいよ』
　その声は風に紛れて消えてしまう。
　決して届かない声。
（あ……）
　どこかで、この悲痛な声を聴いたような気がする。
　この瞬間を知っている。
　リニアが何か言おうとする前に、強い風がリニア
の髪を乱し、視界を奪った。
　リニアはただ、風に消えたその声を黙って聴くし
かできなかった。

「ん……」
　そっと髪を撫でる感触。
（隷さん……？）
　今まで、よく隷がリニアの髪を撫でてくれた。
　夢うつつのリニアは、何となく隷がそうしてくれ
ているのだと思い、瞼を開けた。
「お目覚めか？　リニア、こんな場所で寝ていたら、
また体をおかしくするぞ」
　すぐ側で聞こえたのは、貴広の声だった。
「あ、済みません」
　どうやら寝ぼけて間違えてしまったらしい。リニ
アは頬を染めながら、大きく伸びをした。
「調子はどうだ？」
「すごくいいです。思わずうたた寝してしまうくら
いですから」
「そうか」
　貴広は穏やかな表情でうなずいてくれる。
　その表情を見て、何となくリニアは夢で見た少女

のことを思い出していた。
大切な誰かに逢えないまま、悲しそうに立ってい
るだけの少女はあの後、どうなったのだろう。
今のリニアのように、温かい気持ちになれる人の
側に行くことができたのだろうか。
それともひとりぼっちで、悲しい思いを抱き続け
ているのだろうか。
「リニアは、この島に来られてよかったですよ」
「何だ、突然」
「あ、何でもないです。ごめんなさい。変なことを
言ってしまって」
「お前が変なことを言うのは、いつものことだ……
何かあったのか?」
「いいえ、別に何かあった訳ではないのですが。た
だ、何か……夢を見まして」
貴広は真面目な顔で訊いてくる。
「夢? どんな夢だ?」
「少し悲しい夢です」
「悲しい夢?」
リニアは小さくうなずいた。
「お前は……夢を見るのか?」
ひどく真剣な顔でそう訊かれる。
リニアはこくりとうなずいた。
「アンドロイドは普通、夢は見ないものだがな」
「そうなのですか?」
「まあ、お前は特殊なアンドロイドだからな。そう
いうこともあるかも知れん。で、夢というのは?」
「断片的な記憶なのですが……」
そう前置いて、リニアは夢の話をした。
他愛もない話に、貴広は苦笑いを浮かべる。
「夢とはかなり支離滅裂なものだが、特にお前のは
ひどいな。何を言っているか解らん」
そう言われると、リニア自身にもとりとめのない
話のように思えてくる。
「へへ……ごめんなさい」
しかし、興が乗ったのだろうか。貴広も首を傾げ、

話題を続ける。
「俺も今朝、変な夢を見たよ」
「どんな夢ですか？」
そう訊かれて、貴広は首を振った。
「よく憶えていないんだ、これが」
首を振った拍子に、懐中時計の鎖が陽光を浴びて輝く。
「貴広さん。またこの子を持ち歩いているのですね」
スーツの胸ポケットには、相変わらず懐中時計が入っているらしく、布地がふくれていた。
「別にわざわざ持ち歩いている訳ではないんだがな。何となく胸にしまってある」
貴広はポケットから古びた懐中時計を取り出してみせる。
リニアは友達に話すかのように、時計に話しかける。
「また、時が刻めるよね。止まっていたって、また動けるよ」
もしこの時計が動き出したら、何かが始まる。
時計自身が、そんな未来を夢見ている気がした。
その日は仕事もはかどり、いい気分で一日を終えることができた。
「余計なことをしないで、夜は早く寝ろ」
夜になって、貴広がわざわざ言いに来た言葉を守って、リニアはおとなしくベッドに潜り込む。
(そう言えば、貴広さん……公園で『夢を見るのか』って訊いてましたよね)
普通のアンドロイドは夢を見ない。
眠りに就こうと思うと、何となく気になってしまう言葉だった。
リニアは夢を見るということを特別に思っていなかったが、アンドロイドの中では奇妙な例外なのだろうか。
(初期型だからなのでしょうか)
新しいアンドロイドは食事も排泄もしないし、体

表温度すら自分の体調と全く無関係だという。
そういう同胞から見れば、リニアは要りもしない機能満載の変な機械なのかもしれない。
(リニアは……何の為に作られたのでしょう)
機械には用途というものが存在する。
食堂の調理用機器も掃除ロボットも、ヘリコプターも懐中時計も、作られた目的が存在する。
しかしリニアが数多くの『要らない機能』を持ち合わせている理由は、全く解らないのだ。
例えば、人間とほぼ同じ姿をしているアンドロイドに五感は存在しても、アンドロイドにとって『五感があること』自体のメリットはない。
それは全て人間に迎合する為のものであり、必要があればいつでも遮断できる程度の機能だ。
リニアが夢を見るとしたら、最初から『夢を見る機能の付いた機械』ということになるが、アンドロイドが夢を見ることで人間側が受けるメリットは何ひとつないだろう。
リニア自身はいろんなことを感じて、楽しんで、悲しむことのできることを素晴らしいと思うが、そんな機能を機械に付けた理由など、さっぱり解らなかった。
どんどん体が壊れていくからこそ、自分が何の為に作られたのか知りたかった。
(すごく大事なことがあるような気がするのに)
自分は、本来持っているはずの『作られた理由』『存在している理由』が解らないことは、リニアを居心地悪くさせていた。
しばらく寝返りを打ちながら考えていたが、考えたからと言って思い出せる訳でもない。
何となく釈然としない気分のまま、リニアは眠りに就いた。

●●●

冷たいものが耳に触れる。

『あ……聞こえるよ』
その音は、少女にとってありきたりの音だった。
規則的に刻まれる音を、少女は嬉しそうに聴いている。
とても大事な音。
一人でいる時に寂しくなると、いつも耳を当てて聴く音。
『また、逢えるかな』
少女が交わしたささやかな約束に、その音は大丈夫だと語りかけているようだった。
ちっく、たっく、ちっく、たっく
玩具めいた音を聴きながら、少女は微笑んでいた。

●　●　●

翌朝。
リニアが起きた時、まだ夢の中で聴いた音が耳に残っている。
（あの音……）
特に美しい音ではなかったが、リニアは温かい気持ちになった。
ずっと昔からあの音を知っている気がした。
あの女の子を、リニアは知っている。
あの音を知っている。
そんな確信があった。
どこで聴いたか解らないが、もう少ししっかりと聴けば、何の音だか解るかもしれないし、もっと詳しく思い出せるかもしれない。
そんなことを思いながら、リニアは仕度を始めた。
その日の昼休みも、リニアは食事をそこそこに丘を目指して歩いてきた。

今日は風も強かった。
乱れる髪が眼に入らないよう、手で押さえていると、髪をなびかせる風がひゅうひゅうと音をたてる。
何となくその音に聞き入ってしまい、リニアは立ち止まった。まるで貝殻に耳を当て、波の音を聴くように、瞼を閉じて耳に手を当て立っていた。
強い風の音に耳を澄ましていると、風音の中から違う音が聴き取れるようになってくる。
「あ……」
ほんのわずかの音だったが、リニアは何の音なのか理解した。
ちっく、たっく、ちっく、たっく
風に消されそうなほど小さい音だったが、その音は確実にリニアの耳の中に響く。
(この音も……長くは聴けないかもしれません)
どんどん壊れていくリニアが、ずっとこの音を聞き続けられる保証などはない。そう思うと、余計にこの音が聴ける時間を大切にしたかった。
ただ音だけに集中しているリニアの側に、誰かが立つ気配がした。風が流れていく感じと、しっかり陽光が遮られるほどの長身の人物に、眼を閉じたまま呼びかける。
「貴広さんですね」
返事はないが、リニアは言葉を続ける。
「リニア、音を聴いてました。ずっと、ずっと」
「また、こんな場所で立っていると、体をおかしくするぞ」
隣の人物は、やはり貴広の声で喋った。
「済みません。でも、今しかこの音を聴けないような気がして」
「風の音をか?」
「いいえ、違います。リニア……ずっと、ずっと、この音を聴いてました。多分、本当に昔から。そんな気が最近するのですよ」
隣から、貴広の溜息が聞こえる。
「何がずっと昔からだ。記憶などまともにないので

あろう」
「はい。でもこの音はずっと、ずっと昔に聴いたことがある音なんです」
「ずっと昔？　もしかして、古い記憶の断片が戻り始めてきたのか？　しかし、ここに来たのはつい最近だ。ここにある音を、昔から聴くことはできないだろう」
当然の疑問に、リニアは照れたように微笑む。
「そうですよね。おかしいですよね。ここに来るのは初めてのはずなのに」
貴広はリニアがゆっくり考えをまとめるのを黙って待っている。
「リニアは最近……昔の記憶が夢に出てきます」
「以前の記憶が？」
驚いたような声で問う貴広に、リニアは首を振ってみせる。
「と言っても、大したことじゃないんですよ。記憶と呼べるのかすら解らないのです。リニア、ずっと、ずっと長い間……ずっと、どこか遠くで、夢を見ていた。そんな気がするのですよ」
ややあって、貴広がうなずく。
「かも知れんな」
リニアは笑みを浮かべた。
「懐かしい音ですよ、リニアに届くこの音は」
「何の音だ？」
「ちっく、たっく、ちっく、たっく……」
「ちっく、たっく？」
「懐かしいです。ちっく、たっく、ちっく、たっく……一定のリズムを刻んで。ちっく、たっく、ちっく、たっく……」
「一定のリズムか。そう言えば『世界の終わり』と言われた日以前の、ゼンマイ式の時計はそんな音だという話を聞いた事がある。確かちっく、たっく、という音だったような気がする」
ゼンマイ式の時計というのは、もう存在しない機械なのだろう。しかしリニアは何となくそれを知っ

ているように感じた。
「ちっく、たっく……何だか懐かしい音です」
「懐かしい音か。『世界の終わり』によってなくなった音……リニアにとっては懐かしい音なのかもしれない」
リニアが風の音を聴き続けている。それにつきあってか、貴広もまた長い間沈黙していた。
「ずっとずっと昔も、リニアはこの音を聴いていたような。何の音なんだろう」
「それは多分、古い機械が時を刻む音だろう」
「古い機械」
「ああ。今はなくなった機械が、時を刻んでいるのさ」
「古い機械って、何だかリニアみたいですね」
「今はもう、動いている現物がないだろう機械だ。聞こえるはずのない音だ。多分お前が聴いてる音は幻聴だろうな」
「幻聴？」
「中古の部品の固まりのお前のことだ。多分、古いデータを聞こえるものと勘違いしているのだろう」
リニアは風で消えてしまうほど小さな声で、何度も『ちっく、たっく』と呟いてみる。
懐かしい音だった。
「どこからか聞こえる音。もしかしたら、どこにもない音。でもリニアには聞こえる音。古い、古い、機械が奏でる音」
ちっく、たっく、ちっく、たっく
風に紛れても、時が過ぎても、リニアの中にその音は響き続けている。
「でも、いつの時代にかあった音……それは、誰かの耳に届いた音」
そんな音がリニアの中に残っている。
「リニアは古い機械の固まりです。そのことで、皆様にご迷惑ばかりかけているのですが、それでも、素晴らしいこともあるのですね」
とても嬉しかった。

「リニアは古い、古い、機械の集まり。だから、だから……リニアすら知らない、たくさんの思い出が眠っている。今はなくなった古い、古い機械の音。今は忘れ去られた古い、古い風景。みんなが忘れてしまった古い、古い、思い出たち……リニアの古い、古い部品に眠っているのですね」

貴広はリニアのことを見つめている。

眼鏡越しの視線が何を示しているのか、逆光でよく解らなかったが、リニアは何となく安心していた。

「もしかしたら、貴広さんが昔見た風景も、リニアの中に眠っているのかもしれませんね」

「ああ……そうだな」

夕陽の赤が、リニアのピンク色の髪を朱色に染める。

二人はしばらくの間、風の音を聴き続けていた。

風の温度が冷えてくると、貴広はリニアの手を引いて、丘を下る。

風は冷たくなっていく。

リニアの肌も冷たくなっていく。

貴広と別れ、自分の手から彼のぬくもりが失われてしまった時、リニアは自分の体に起こりつつある異変に気が付いた。

「あ……」

直してもらったのに。

今まで気持ちよく四肢を動かすことができたのに。

リニアの体はどんどん冷えていく。

ぬくもりが逃げていく体の動きは鈍く、あまりにも重い。

リニアはしばらくすると、自分の意志で体を動かすこともままならなくなって、中庭の目立たない場所で立ち尽くしていた。こんなところでは、誰かに発見してもらうことすらできない。

(何だか……こんなこと、前にもありました)

遠い記憶の中にある、今と同じように体が動かなくなったことが浮かんでくる。

たった一人で歩いていた。
激痛を堪え、ひたすら交互に脚を前に踏み出すことすら難しいほど、消耗しきった体。
なのに、歩かなくてはならないという強迫観念だけで前に進み続ける。
前後も何もない思い出だけが、リニアの中に突然浮かんだ。
「あ……っ」
わずかだが、声は何とか出るようだ。
しかし、助けを求められるほど大声は出なかった。
空から緋色が薄れ、紫に変じ、やがて星が瞬き始めても、リニアは立ち尽くしていた。
「貴広さん……」
呼びかけても、聞こえるはずはなかった。
首の角度を変えることもできず、所長室の方に顔を向けることもできない。
リニアは体を動かすことのできないまま、疲労のあまり眼をつぶり、眠りに落ちていった。

9　銃声

リニアは、雨の中を歩き続けていた。
ただひたすら前に歩く。
雨に打たれて錆びた腕がもげても、前へ進むのをやめなかった。
何とか腕を付けようとしても、ネジの外れた部品が元通りになることもなく、雨でべたべたになった腕を放り出し、それでも歩き続ける。
しかし、そのうち錆びた脚はきしみ始める。
激痛が走るのを堪えようと、戦闘モードに切り替えても、まともに脚を動かすこともできなかったし、痛みも消えなかった。
（私……このまま、壊れてしまうのでしょうか）
逢わなければならない人がいるのに、その人の顔を見ることすらできないまま、ここで朽ちていくのだろうか。
決してその人が来るはずのないこの場所で、何もかも終わりになってしまうのだろうか。
どれだけ歩いたのだろうか。脚が完全に動かなくなり、雨に打たれながら、リニアは瞼を閉じた。
（このまま、こんな寂しさを抱いたままで、消えてしまいたくない……）
もし消えなくてはならないのなら、寂しさを感じない状態で消えていきたい。
意識が薄らいでいくリニアは、心の中で呪文のようにそう呟き続ける。
やがて、雨は雪に変わる。
瞼を閉じていたリニアは、そのことすら解らないまま、ただ立ち尽くしていた。

「おい、リニア！」
早朝の、まだ青みの少ない空の下、貴広は顔色を変えて走ってきた。
「あ……」

すっかり声が嗄れていた。
リニアは貴広の顔を見て、反射的に笑顔を作ろうとする。
修理してもらった直後にこんな状態なのが解ってしまったら、今度こそスクラップ行き以外はないに違いない。
嘘でもいいから、元気でやっているのだと信じてほしかった。
「おはよう……ございます」
「顔色がおかしくないか」
そんなことないですよ、と言おうとしたが、喉に痛みが走る。リニアは仕方なくゆるゆると首を振った。
貴広がリニアの腕を掴むと、リニアはそのまま傾いで腕の中に倒れ込んだ。
指一本すら動かすことができない。
「どういうことだ。全く体が動かないじゃないか! 馬鹿。体がおかしくなったら、すぐに言えと言っていたじゃないか」
きつく抱きしめる貴広の腕の感触すら、おぼろげにしか感じなかった。
本当なら嬉しくて堪らないはずなのに、自分の体がここまで悪化していることがショックだった。
涙ばかりがぼろぼろと流れ落ちる。
「ごめんなさい。ごめんなさい、貴広さん。リニア、ここにいたかったんです。それがみんなの迷惑と解っていても、この島に……貴広さんの側にいたかったんです」
「何を言っているんだ……」
咎めるような口調なのに、貴広の声があまりにも悲しい。
「本当はいちゃいけなかったのですよね……リニアみたいな、へなちょこなアンドロイドが、この島に……だって、みなさんに、ご迷惑かけてばかりですもの。何もお役に立っていませんもの……」
あの記憶の中で雨に打たれていた時に較べれば、

今ですら何百倍も幸せなのに、これ以上望んではいけないのだ。
「それなのに、ここにずっといたいなんて考えたから……罰が当たったのですよね。本当はいちゃいけなかったのに、リニアなんてここにいちゃいけなかったのに……！」
喉に痛みが走る。
しかし、リニアは心を吐き出すようにして貴広に訴える。
「でも、少しでしたが、こんなに素晴らしい時間をこの島で皆様にいただけたのですから、本当は、感謝しなければならないのですよね。これだけで充分のはずなのに、これ以上のことなんて、リニアには贅沢過ぎるのに、なのに……」
「リニア」
今まで支えるだけだった貴広の腕が、やさしくリニアに回される。
「ごめんなさい。やっぱりリニアなんて、ここに来るべきではなかったのですよね。あの日、そのまま消えてなくなればよかったのですよね」
「馬鹿を言うな！」
「だって、だって……リニア何もできません。そのくらいなら、消えてなくなればよかったんです」
「うるさい。つべこべ言うな！　お前はここに来た以上、ここにいる間は俺のメイドだ。勝手なことを言うな」
その言葉が、リニアの心に染みていく。
「貴広さん、ごめんなさい、ごめんなさい……」
今の思いを表すのにふさわしい、ちょうどいい言葉が出てこなかった。
胸を満たしていく貴広の言葉のあたたかさや、自分の体に対する無力感。そんなものがごちゃ混ぜになって、涙だけしか出てこない。
そして、貴広に抱きしめられたまま、リニアの意識は薄れていった。

ノックの音で、リニアは眼をさました。
『リニア、入るぞ』
「あ、どうぞ」
声も朝よりずっと楽に出るようになっていた。
貴広はトレイを持って、中に入ってくる。おいしそうな匂いが辺りに立ち込めた。
「安静にしていたか？」
「はい、おとなしく寝てましたよ」
そもそも朝から夕食の時間帯である今まで、まともに起きることもなかったのだ。
「仕事で食堂の方へ来たからな、夕飯を持ってきてやったぞ」
サイドテーブルに置かれたトレイに、載っていたのはドラムだった。
「わぁ、ドラムですね」
「ああ。今日は俺が自力で買ってきてやったぞ」
「ありがとうございます」
貴広はリニアの体を起こし、簡易テーブルを置きやすいようにセットすると、待望のドラムを置いてやる。
リニアは嬉しそうにスプーンに手を伸ばした。
「あれっ」
しかし、リニアの手はスプーンを摑むことができなかった。指先からスプーンが何度も落ちる。
「寝過ぎで体力が落ちちゃったみたいですね」
「アホ」
貴広は一度リニアの指先だけが触れているスプーンを取り上げてから、鶏肉をナイフとフォークで一口大に切り分けていく。
「ほら、口を開けろ。噛むぐらいはできるだろう」
「はい、ありがとうございます」
リニアが子供のように小さな口を開くと、貴広はそっと鶏肉を入れてやる。
「おいしいですね。リニアはとっても幸せです」
リニアの笑顔はだんだん、悲しげなものになっていく。

「とっても幸せだったと、思います……本当に」
「リニア?」
リニアはうつむいたまま口を開く。
「夢を見ます。一番古い記憶、あの時の夢を。ずっと、ずっと……ずっと歩き続けていた時の夢を。一人でずっと、ずっと、歩き続けていた時の記憶を」
貴広はフォークを置き、リニアの言葉を待つ。
「何の為に歩いているのか解らないのに、それでも歩き続けている夢……前まではあやふやな記憶しかなかったのに、今では、あの時のことを鮮明に夢に見ます」
リニアはいつの間にか指をひっかくようにシーツに立てている。
リニアは平坦な声で夢の内容を語っていく。
時には声を詰まらせ、時には長い沈黙を挟みながら、雨に打たれて歩いた記憶について話す。
「本当にでき損ないですよね。痛みなんて、アンドロイドにはいらないのに……」
痛みの記憶。
寂しさの記憶。
リニアの中から出てくる悲しい思い出。
「寂しかったです。このまま消えていくのは嫌だと思ったんです。たった一度でいい。この寂しさから逃れて死にたい。消えるなら、せめてこんな寂しさの中でなんか消えたくない」
充分すぎるほど幸福になったのだ。
やさしい人達の中で、庭を手入れしたり、風の音を聴いたりしながら生きてきた時間は、貴広と共にいられる時間は、本当に特別のものだったのだ。
「リニア」
だから、リニアは笑ってみせる。
「リニアの願いはもう叶ったのですよ。本当はあそこで、一人で消えていかなければならなかったのに。何もできないのにここに来られて、みんなと一緒にいられて……たぶん、馬鹿なリニアの最後のお願いを神様が聞いてしまったのですよ。リニアがわがま

まを言ったから……だから」
　嗚咽のせいで、言葉が詰まった。
「だから、もう……充分です。リニアには贅沢すぎます」
　貴広は震えているリニアの掌に自分の掌を載せた。
「そんな寂しいことを言うな。そんな言葉はみんなを寂しくするぞ」
「貴広さん……」
「整備の連中だって、たいそう悲しむぞ。あいつら、それこそ命懸けで、お前を直す為に頑張っているんだ。お前が元気に歩けるように、お前が笑顔でいられるように、ってな。それなのにお前がそんなことを言ってしまったら、奴らは悲しむぞ」
　今まで、何とか泣きじゃくらないように努力していたリニアの意志は、もろく崩れ去った。
　ぽろぽろと大粒の涙が溢れ出てくる。
「お前はもう、勝手に消えてなんかよくないいんだよ。だってお前は、みんなに愛されているのだから……愛されている者が勝手に、自分勝手に消えてなんかよくないんだよ。な、リニア。もうそんなことは言うな」
　もう泣くまいという自制心など、どこかに消え去っていた。リニアは眼を真っ赤にして泣きじゃくり始めた。
「ごめんなさい。リニアもここにいたいんですよ。みんなと一緒にいたいんです。でも、これ以上いたら、大好きなみんなにご迷惑を……だから」
　解っているから、というように、貴広がリニアを抱きしめる。
　しばらくの間、リニアは泣き続けていた。
　リニアの涙が涸れた後、二人はやや冷めてしまったドラムを、ゆっくりと食べた。
　冷めてしまってもドラムはおいしかった。
　食べ終えると、貴広が簡易テーブルを片づけてくれる。

「あれ、それ」
リニアはまだ晴れている眼を、ふくらんだポケットに向けた。
「最近はいつでも、胸ポケットにその時計を入れているのですね」
「動かない時計なんて、持っていても仕方ないのだがな。つい持ち歩いてしまっている」
リニアには、何となくポケットの中に収まっている懐中時計を愛おしく感じた。
「よかった」
「よかった？」
「もし貴広さんが嫌でなかったら、その子は持っていてあげてください」
「何故だ？」
そう問われて、リニアも首を傾げた。
「何でだろう。よく解らないのですけど、その子もそれを望んでいると思うです」
貴広は呆れ顔をしながらも、リニアの夢見がちな発言を咎めることはしない。
「あちゃ。リニア、また意味不明なことを言ってしまったようですね。ごめんなさい」
リニアは貴広の時計を撫でた。
「でももし隷さんが言う通り、その時計が貴広さんが忘れるほど古くから持っていた、貴広さんの時計なら、リニアはうらやましいな、って」
「何故だ？」
リニアが時計の蓋を取ると、そこに英詩が書かれていた。

In watching its pendulum swing to and fro
Many houra had he spent while a boy
And in childhood and manhood
the clock seemed to know
And share both his grief and his joy

リニアはその詩をメロディに載せて歌ってみせ

た。
「これにも歌があるのか？」
「これは貴広さんが貸してくださった詩集に入っていた『Ｇｒａｎｄｆａｔｈｅｒ's Ｃｌｏｃｋ』という歌ですよ」
「ああ。この前、お前が歌ったあれか」
「この子がもし貴広さんのものならば、この子は貴広さんのいろんなことを知っているのでしょうね。そう考えると、貴広さんと逢ったばかりのリニアは悔しいですよ」
「アホか」
やわらかい口調で貴広が『アホ』と言う。悪口のはずなのに、その響きがリニアは好きだった。
「リニアがアホなのは、今始まったことじゃないですから。でも、ここにいられる間だけでも、いろいろな思い出をいただきました。その子にだって負けないくらい。だから……」
もう、思い残すことはない。
その言葉を言おうとしたが、リニアはやはり口をつぐんで笑った。
「あ、ごめんなさい。また暗い話になってしまったみたいです。でも、そんなに悪い意味で言った訳ではないのですよ」
「ああ、解っているさ」
どれだけ望みが薄くても、リニアの未来について二人は決して悲観的なことを言ってはいけないように感じていた。
リニアの終わりが近づけば近づくほど、それはある種禁句のように思えてきた。
貴広が仕事に戻っても、しばらくの間リニアは懐中時計のことを考えていた。

●　●　●

夢の中の丘も、風が気持ちいい場所だった。
世界の全てが見渡せる場所。幼い少女にとって、

そこは特別の丘だった。
大好きな人が『ここは、世界の全てが見渡せるんだよ』と言ってくれたのだから、特別でない訳がないのだ。

（見えるよね）
少女の口の中で、その人の名前を呟く。
必死で背伸びして、ものすごい勢いで流れる雲の向こうを見据えようとしていた。
（早く……早く、見つけなきゃ）
時間がなかった。この丘にいられる時間は、あとわずかしかなかった。
そして多分、もうこの丘に戻ってくる機会は二度と巡ってこないのだと知っていた。
涙を流す少女を、遠くから呼ぶ声がする。
しかし、それは探していた人ではなく、この場を去らねばならない時間だと告げる声だった。

（もう、行かなきゃ）
涙を滲ませながら、少女は自分の胸にかけた小さな機械に触れる。

ちっく、たっく、ちっく、たっく

単調な音。
しかしその音を聴いているうちに、痛みにも似た寂しさは薄らいでいく。
（これは、約束の音）
この音がある限り、必ずもう一度逢えるはずだった。

強い風で、少女の涙は乾いていた。
やがて少女は去り、そこは無人の場所となった。
そこに吹く風だけが、機械の発していた『ちっく、たっく』という音を憶えていた。

●●●

深夜。

ばさばさと鳥の羽ばたきを聴いて、リニアは眼をさました。

(さっき、鳥さんの羽音が聞こえたような)

しかし、この夜中に鳥が飛ぶ訳はない。

念の為に窓から覗いてみたが、それらしい鳥の姿はなかった。

不安な気持ちのせいで、そんな音を聴いたつもりになってしまったのかもしれない。

気のせいだろうと思い、リニアは再び横になった。

早朝。耳をつんざくヘリコプターの音でリニアは眼をさました。

「え……?」

窓から外を見ると、数え切れないほどのヘリコプターが飛んでいた。

(何が……何が起こって)

どうやら非常事態らしい。

慌ただしい中、貴広が早足でヘリポートに向かっていく姿を見つけた。

「貴広さん!」

力の入らない指で必死で窓を開け、呼びかけてみたが、騒音のせいで貴広には聞こえていないらしい。

そのまま貴広の姿は消えてしまった。

嫌な予感がした。

どう考えても、このヘリコプターの大群はただごとではない。リニアは仕事用のピナフォアドレスに着替えるのも忘れて、パジャマのままヘリポートに向かった。

「神崎、俺とお前の仲じゃないか。裁判にかけて、死刑になんてする訳がないだろう?」

ヘリポートには数多くの武装した人間達がいた。

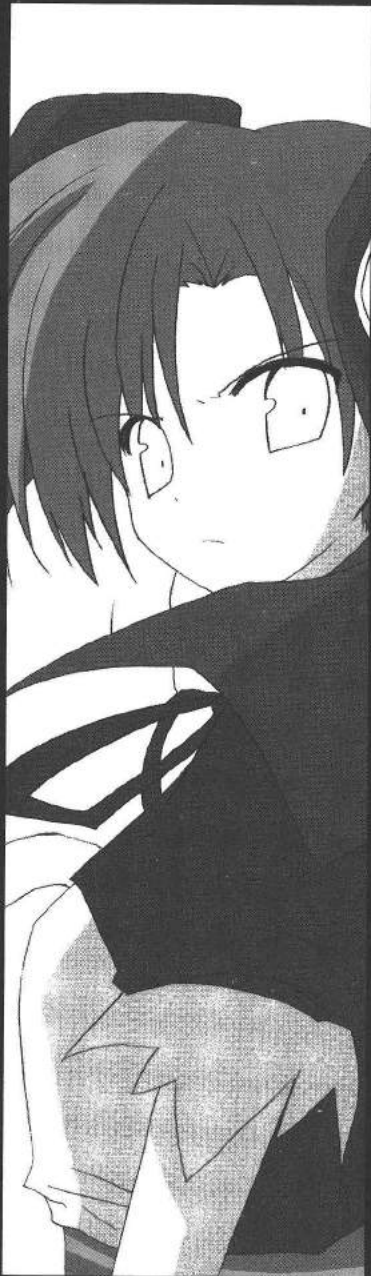
リニアがやっと辿り着いた時には、その中にいる見

憶えのある人物が貴広に銃口を向けているところだった。
この島に隷と一緒にやってきた飯島だった。
（あの人……やっぱり貴広さんのことを！）
リニアは声をたてないように自分の口を押さえる。
ありがたいことにリニアは叫ばずに済んだ。
飯島は遠くから見ているリニアに気付くことなく言葉を続けた。
「その場で射殺だよ。貴様などに、裁判なんて上等なものはいらない。俺たちはずっとそういう世界で生きてきたんだ」
後ろ姿しか見えないが、貴広は身動きする様子はなかった。
「敗者には死。それが、俺たちの世界の決まり事のはずだ」
「せっかちだな。来て早々、拳銃を向けてくるとはな。何の話も聞けないというのか？」
貴広の言葉に、飯島は哄笑を放つ。
「ふふふ、貴様、そこまで腑抜けになったのか？まさか、説明が欲しいなどと抜かすのではあるまいな」
貴広はわざとらしく肩をすくめてみせる。
「ああ。何の不正だかさっぱり解らない。射殺と言われてもピンとこない」
飯島は憎々しげに笑い声を漏らした。
「これがあのＰＩＸＩＥＳ最強と言われた『漆黒の神崎』の姿か？　説明をしてもらって、どうするつもりだ？　話し合いで解決する気か？　神崎、ＰＩＸＩＥＳ時代、貴様は相手を殺す瞬間、いちいち説明でもしていたのか？　私はこれこれこのような理由であなたを殺しますと説明でもしていたのか!?」
飯島は笑いながら後ろに止まっているヘリコプターを振り返った。その間にも決して貴広から銃口がずれることはない。
「おい。見てくれよ、隷！」

ヘリのタラップから降りる人影を見て、リニアは蒼白になった。
（隷さん！）
そこに降り立ったのは、確かに隷だった。
さすがに貴広もショックだったのか、拳を震わせている。
「隷……」
しかし隷は答えない。
ただ無表情に貴広に気配を向けている。
「これが神崎貴広だとよ。隷、こんな腑抜けに俺達は振り回されていたんだ。どうだ、隷？」
隷は貴広のことも飯島の事も見えていないかのように、そのまま通り過ぎていこうとする。
「隷。貴様、どういうつもりだ」
厳しい詰問口調も、微風ほどにも感じていないような表情で隷が告げる。
「リニアは返してもらうよ。君の手元にあっても、仕方がなかったようだからね」
「貴様！」
摑みかかろうとした貴広に、兵士達が一斉に銃口を向ける。
「どうだ、隷。貴様もこの男に恨みがあったのだろう？　だから、この作戦を考えたのであろう？」
その言葉を聞いて貴広と、離れた場所で聞いているリニアが同時に息を吞む。
「何だ、神崎。隷がこの作戦の首謀者であるというのが信じられないみたいだな。これほどの作戦は、さすがに俺でも考えつかなかったさ。本部監査室から命令書が来た時は驚いたよ」
「本部監査室だと？　隷が監査室の人間だというのか」
「そうだ。情報部のＰＩＸＩＥＳですらその存在を知り得なかった謎の特殊部隊ＮＩＮ。一説にはラボ直属の部隊と言われているが、そのことすら未だに解らない。これだけＮＩＮと絡んでいるのにも関わらず、首謀者の一人であるこの俺すら、その存在が

何なのか解らない超A級極秘部隊。隷はNINの人間だったんだよ。そう、PIXIES時代からな」
「PIXIES時代から⁉」
飯島の言葉の意味はリニアには解らなかった。
しかし、それが貴広にとって大きな裏切りであり、衝撃であることだけは解った。
飯島は驚いた貴広を鼻で笑う。
「そう。隷はNINのスパイだったのさ。俺達PIXIESを監視する為の」
「そうなのか……隷」
隷は軽くうなずき、貴広を振り返った。
「ああ、そうだ。あの時代から既に僕は本部監査室に属していた」
「俺も大層驚いたよ。本部監査室はPIXIESの結成当初からスパイを入れていたんだ。俺達が必要以上の力をつけないように、力が強大になり過ぎた時は、自滅へと向かわせるようにな」
「……自滅だと？」
貴広が低い声で唸る。
「そう、自滅だよ。よりによってNURSERYCRYMEである極東日没と戦うなんざ、自滅以外の何ものでもない」
「しかし、あれは俺たちが暴走して……」
貴広の声に、動揺の響きが混ざる。
「本人達の意志で動いたつもりにさせて操るなんていうのは基本ではないのか？」
貴広の腕がわなわなと震える。
「確認はとれていないが、ただ、今なら言えるさ。あの事件は、全てNINの策略だ。力を持ち過ぎたPIXIESを壊滅させる為の策略だったんだよ。だって、そうだろう？　内部にNINの間者がいるならば、そう考えるのが普通だ」
思い当たる節があるのか、貴広は反論しない。
「それに今ならお前にも解るだろう？　こいつなら、それをやりかねない……ふふふ。今回のこんな卑怯な策略を考えるんだ。俺だってあそこまで懐い

ているアンドロイドを使って、こんな卑怯な真似までできないさ……なあ、隷!?」
隷は飯島の言葉を否定する様子もなく、涼しげな顔で貴広に近づく。
「貴広、リニアはどこにいるんだ。素直に言わなければ、無駄にこの島で死体を増やすことになるだけだよ」
貴広の背中から怒気が立ち上る。
「貴様、本当なのか！」
「リニアはどこだ」
「隷、貴様ぁあああっ!!」
胸座を掴もうとした貴広は、突然膝をついた。
銃声だった。
それからややあって、貴広の黒いスーツの太股を鮮血が飛び散ったことが解る。
「危ないじゃないか。そんなに動いたら、この兵隊達が驚いて、お前を一瞬で蜂の巣にしてしまうぞ。それでは困るんだよ。貴様のような男が、誰に殺されたか解らないような終わりではいいのか?」
飯島は熱っぽいとも思える異常な声で、貴広に語りかける。
「否……答えは断じて否だ。神崎貴広を殺すのは、俺だ。ＡＬＩＣＥ　ＩＮ　ＣＨＡＩＮＳ……この、飯島だよ」
貴広は苦悶の声を漏らし、今にもバランスを失いそうに見える。飯島はその様子を見て、嬉しそうに笑い声をたてた。
「痛いか？　太股というのは実際、腹を撃たれるよりやばい。特に、太股の付け根は大腿部動脈が走っている。これが傷ついた場合、応急処置での止血は限りなく不可能に近い。今のはわざと外してみたが、次はどうする？」
いたぶるように飯島は語りかける。
「骨に直接当ててみて、ねじ曲がった弾丸が太股内を暴れ回るというヤツをやってみるか？　砕け散った骨は散弾のように肉をえぐり、ねじ曲がった弾丸

は骨と同方向、垂直に走る形で肉をえぐり続ける。さぞかし激痛だろうな」
「そんなことさせないよ！」
戦闘メイドの一人が、兵士の一人を一撃で倒し、飯島の後ろにぴたりと付いた。リニアも食堂あたりで見かけたことのある顔だった。
「旦那を傷つけるやつは誰だって許さない！」
「ば、ばか、かずさ……」
「貴様、何故ＡＬＩＣＥ　ＩＮ　ＣＨＡＩＮＳのエンブレムを付けているのに……」
かずさと呼ばれたメイドは料理用の包丁を握り、背中から飯島の急所を狙っている。
「そんなことはどうでもいいの。早く銃を下ろしなさい。さもないと、この典太光代の包丁で心臓を一刺しなんだからね」
「隷……」
飯島はかずさに解らないように、眼で合図を送った。
その瞬間。
隷の影が膨らんだように見えた。
不思議そうな顔になった一瞬後、どうっと音をたててかずさが倒れた。
「かずさぁあああっ！」
兵士達の銃口がかずさに向けられる。飯島は息をつきながら、かずさのいた場所から少し離れた。
隷が冷たい眼で倒れているかずさを見た。
「貴広、僕は言ったはずだ……弱さは罪だと。この娘を守れなかったのは、君の罪だよ」
「お前を殺す！」
かずさに寄ろうとした貴広の脚を、飯島は蹴り上げる。
「うるせえなあ。弱いくせに何を粋がっているんだよ。何が殺すだぁ？　足を撃たれたぐらいで動けもしないじゃないか。ああ、そういえば片足は義足だったんだっけ？」
悔しそうに睨み付ける貴広に、飯島は再び銃口を

向けた。
「惨めだな、神崎。これがNURSERY　CRYMEなのか？　これが世界を滅ぼす力を持つと言われている男の姿なのか？　ええっ!?」
今度こそ貴広は殺される。
そう思った途端、よろめきながらリニアが貴広と飯島との間に割って入る。
「貴広さん！」
「ば、馬鹿。リニア……」
リニアはまだあまり動かない腕を広げ、貴広を銃口から守る。
そんなリニアに向かって、隷が歩み寄る。
「リニア」
「隷さん、やめてください。何故……こんなことを」
リニアの声は静かだった。
しかし、その眼には強い意志が宿っていた。
隷はしばらく、無言でリニアを見つめていた。
やがて、小さな溜息をつく。
「……銃を下ろせ」
兵士達は銃口を向けた時と同じように、一斉に銃を下ろす。
戸惑った飯島が、隷のことをいぶかしげに見る。
「え……おいっ」
「飯島さん、僕はあなたにも命令しているのですよ。貴広に向いている銃を下ろせと」
「待てよ。今更何で」
「この作戦の意志決定権は僕にあります。飯島さん、あなたはここでは僕の部下に過ぎない」
「だからって」
「命令です」
隷は飯島の体を軽く押しのける。
どうやら貴広の命は救われたらしい。リニアが貴広の側に寄ろうとした時、押しのけられた飯島が、ぎらぎらと輝く眼で隷を睨んだ。
「何が命令だ。隷！　貴様、こいつを裁判なんかで殺す気なのか!?」

「それが元の作戦ですから。貴広を捕まえて、公開処刑にする。最初からそうだったでしょう」
「馬鹿な！　そんなものでいいはずがあるまい。あの神崎貴広を公開処刑だと？　そんなことは認めんぞ!!」
飯島は貴広に素早く銃口を向ける。
「俺はずっとお前が気にくわなかったんだよ。最強とまで言われながら散り際を誤って、だらだら生き続けるお前がっ！」
「あ、危ないっ！」
大きな銃声が二回響いた。
腕に灼けるような痛みを感じながら、リニアは必死で貴広に覆い被さった。
バランスを失い、リニアは貴広の胸に倒れ込んでいた。
貴広の腕がリニアを抱きしめる。
飯島は舌打ちをした。
「邪魔しやがって、アンドロイド。今度こそ貴様の番だ！」
貴広はリニアをきつく抱きしめ、銃弾が当たらないように守る。
そして、銃声が響いた。
「何故……何故だ、隷」
傷口から血を噴きだしていたのは飯島だった。
その後ろで隷が銃を構えている。
「リニアはカンパニーの商品だ。その商品を、商品管理部の人間が無為に傷をつけたとなれば、それは死に値する」
「そ、そんな馬鹿な……」
飯島は刻々と死へと向かいつつあった。
「き、貴様、もしや……初めから、手柄をＡＬＩＣＥ　ＩＮ　ＣＨＡＩＮＳからＮＩＮに横取りする為に……」
飯島の眼から光が消えていく。
「そうか……所詮ラボと取締役会は犬猿の仲。取締

役の管轄下のＡＬＩＣＥ　ＩＮ　ＣＨＡＩＮＳと初めから組む気などなかったのか……俺を消すことによって、全てを闇の中に消し去るつもりだったか……」
飯島のこめかみに、新たに二発銃弾が撃ち込まれる。
「それはさすがに勘ぐりすぎだよ、飯島さん」
隷は顔色も変えずに銃をしまうと、リニアを抱いた貴広に向き直る。
「僕は言ったはずだ。貴広、弱さは罪だと。そしてそれは、お前が僕に教えてくれたことだとも。お前の弱さがリニアを傷つけたんだ」
隷は自分を見上げているリニアの髪を、やさしく撫でる。
いつも通りの隷だった。
リニアを気遣って、やさしくしてくれる隷のままだった。だからこそ、貴広への冷酷さの意味が解らない。
「れ、隷さん、駄目です。何故、貴広さんを傷つけるようなことを……」
それには答えず、隷は咎めるような眼でリニアを見やった。
「リニア。何故君は、あそこで動いたんだ。何故、まだ君は動こうとするんだ」
もう動く力もろくに残っていないのに。
リニアはそんな響きを感じ取った。
「あ、当たり前です。貴広さんを守るのがリニアの今の仕事なのですから」
しばらくの間、リニアと隷は見つめ合っていた。
やがて、先に眼をそらしたのは隷の方だった。
「そうか……解った」
「隷さん？」
リニアのことを、眩しそうな眼で見つめる。
「リニア。ここにはどうやらいい腕のお医者さんがいるみたいだね。また出直してくるよ。君が死んでしまっては……全てが終わりだ」

リニアを抱きしめたまま、微動もできない貴広に隷は宣告する。
「貴広。リニアをもう少しだけ君に預けておくよ。世界の終わりと言われた日（ジーザス・アンド・メリーチェイン）の前日……１２月２４日まで」
「ジーザス・アンド・メリーチェインの……？」
「そうだ。その前日、１２月２４日。昔はクリスマスイヴと言われ、世界を救う救世主が生まれた前夜とされた日。今では多くの人々の命を奪った、滅亡の日前夜として忌み嫌われている日。その日に再び僕はここに戻ってこよう」
隷の眼に翳りがよぎった。
「……リニアを預けたことを後悔している。所詮、お前はその程度の運命すら変えられない人間だったということだ」
「何の話だ」
隷はうっすらと笑った。
「その日までに、ここにいるメイド全てを逃しておくがいい。逃げたければ、お前も逃げればいいよ。もうカンパニーがお前を追うこともないだろうから」
隷がポケットからカードを取り出すと、ピンと指で弾いて貴広によこす。
「これはＮＩＮのメンバーズカードだ。これがあれば大半のことがカンパニーの力でどうにでもできる」
隷の笑みからは、何を思っているのか全く解らなかった。
「有効期間を今から5日間とするよ。それを過ぎたら、僕も紛失届けを出す。その瞬間にこのカードは使えなくなるだろう。その有効期間、カンパニーのヘリでも飛行機でも使ってここから逃げるがいい。だが僕が迎えに来る日までに、リニアを元気にするんだ。それができなければ、世界のどんな場所に逃げたって、僕ははお前を殺す」
奇妙すぎる条件だった。

「お前は、なにを考えているんだ……」
戸惑ったような声を漏らす貴広に、隷は微笑んでみせた。
その笑顔がまるで、咲く瞬間の花がほころびるかのように美しい。
人が死んだのに、多くの人が傷ついたのに、リニアはそんなことを考えていた。
「それでは、貴広。ジーザス・アンド・メリーチェインに逢おう」
手を振った隷はそのままヘリコプターに乗り込む。
それを合図として、他の兵士達も効率よく撤退を開始した。
まるでそんな事件など起こらなかったかのように、あっという間に静かになっていく。
流れた血と、負傷者の傷と、驚愕の表情のまま凍り付いた飯島の死体だけが、その惨劇の印だった。

10　降りつもる白

貴広達は一分たりとも時間を無駄にはしなかった。

その日のうちに島にいる人間達を避難させる段取りをつけ、萌えっ娘島は誰も彼もが大急ぎであちこちを走り回っていた。

ただ、リニア一人が自分の部屋で寝ていることを余儀なくされていた。

(貴広さんの傷の方が重いのに)

自分だけが楽をしているような気がして、ひどく肩身が狭かった。

しかし、自分が問題ない体にならないと、貴広を死なせてしまう可能性があると思うと、無理をして働く訳にもいかない。

結局、リニアにできるのは眠ることと考えること。後はせいぜい本を読んだり、窓から風景を見ることくらいだった。

リニアは窓を開け、風に当たりながら、隷のことを考えていた。

(隷さんは、貴広さんのことを嫌いなのでしょうか)

リニアにとって隷は保護者であり、友人であり、家族である人物だ。

貴広と出逢う前までは、唯一無二と言っても差し支えないほど大切な相手だった。

今でも、貴広と同じくらい大事に思っている。

その隷が貴広と対立してしまうなどという状況は、考えるだけでも辛かった。

(でも、考えなきゃ……リニアが考えないと)

今まで知っている隷の人となり、ここに来た時の貴広に関するコメントを考えてみても、隷が明らかに貴広を憎んでいたようには思えなかった。

それどころか、第一印象のそれほどよくなかった貴広のことを、リニアが悪く思うことのないように神経を遣ってくれていたのだ。

それが策略の為だったとは、リニアには思うことができなかった。
隷は何らかの目的があって、貴広のところにリニアを連れてきたのだろう。
それは間違いない。
しかし、それは本当に死んでしまった飯島の言っていたような、汚い策略から出たものではない気がした。
(隷さんは……そんな人じゃない)
隷がリニアに向けたやさしい眼は、今までと全く変わらなかった。隷がリニアを拾ってくれたという、一番最初の日から、あの眼は変わっていない。
どんな時にも隷はリニアを守ってくれた。
害意を隠しながら、あれだけのやさしさを持つことができる人間がいるとは思えなかった。
(多分何か、事情があるんですよね)
貴広への復讐の為に、壊れそうなアンドロイドを拾って保護し、時期を待っていたなどと考えるのは、あまりにも非現実的だった。
貴広がリニアと面識があればともかく、この島で初めて出逢ったのだから、それでは辻褄が合わないのではないだろうか。
考え込んでいると、何となく頭が痛くなってきた。
やはり考え過ぎは体に悪いらしい。
リニアは一度休むことにした。

●　●　●

まるで雪のように白い花びらが、彼女の上に降り注いでいた。
それまで振っていた雨が花びらを散らせ、彼女の体に張り付いて、その姿を隠していた。
(どうして……)
ひたすら歩み続けたその人のことを、よく知っていた。
彼女がどうして動き出したのか、泣きたくなるほ

どに共感できた。

ちっく、たっく、ちっく、たっく

胸の中に今でも残る音が、風に乗ってやってくる。
自分の中にも、彼女の中にも。
一番大切な記憶が響き合い、共鳴する。

『起きて……』
花びらに埋もれた腕を拾い、彼女の側に歩み寄る。
今は約束の時間ではないが、もう瞼を開ける時間が来たのだ。
うっすらと眼を開ける彼女に、そっと手を伸ばしていた。

●●●

眠りが浅いのだろうか。
リニアは起きてはうたた寝し、ぼうっと窓から避難準備を見るのを繰り返していた。
今まで夜になると、よほどのことがなければひっそりと静まっていたが、今日ばかりはいつまでも人々が起きている気配がする。
その分リニアも悲しい夢に泣く時間が減っていた。
月を見上げながら、明日にはいなくなる人達のことを考える。貴広やおやじさん、最終的な手続きの残っている霧島を除いて、ほとんどの人がこの島からいなくなってしまうのだ。
(寂しく……なりますね)
溜息をついたところで、扉がノックされた。
『リニア、入るぞ』
「どうぞ」
食事を運んでくれているメイドと、メンテナンスにくるおやじさん以外には、ここを訪れるのは貴広

しかいなかった。
　扉を開けて入ってきた貴広が眉をひそめる。
「馬鹿。ただでさえ体温調節ができないのに、何故窓を開けているんだ」
「済みません。お月様が綺麗だったからつい」
　貴広は窓を閉めると溜息をついた。
「お前はどうして、そう自分の命を縮めるような真似ばかりする。今日だっていきなり飛び出すような真似をしやがって」
「申し訳ありませんでした」
　貴広は心配げにリニアを見つめている。
「冷たい風で頬が冷えたんじゃないのか？」
　時々きつい口調にはなるが、貴広はいつもリニアを気遣ってくれる。それなのに自分ばかりが貴広に迷惑をかけているのが心苦しかった。
「リニアのせいで、隷さんと貴広さんはとうとう仲違いしてしまいました。リニア、それが……」
　うつむくリニアの顎を、貴広がそっと持ち上げる。
「馬鹿。お前のせいではない」
　眼鏡越しに貴広の眼を見ていると、いつの間にか涙を流れてきた。
「ごめんなさい……」
　貴広がリニアの頬に触れる。
　冷気で冷えている頬は、貴広の指を熱く感じる。長い指の骨っぽい感触に、思わず触れられた部分が熱くなっていく。
「駄目ですよ。リニアのほっぺ、風に当たって冷たいですから。しかも涙まで付いてしまいますよ」
「俺がそれでいいと思ってやっているから、いいんだよ。それとも、俺に頬を触られるのは嫌か？」
　真顔で訊かれ、リニアは頬を染めた。
（こんなこと、前にもあった……）
　リニアにとって既に、夢の中での記憶と今の記憶は微妙に混ざりつつあった。
　自分の冷たい頬を撫でる掌のあたたかさ。
　寒くなった時に、いつも自分の頬を温めてくれる

大切な人の視線。
もちろん、違う部分はある。
夢の中で温めてくれたのは、長身の青年が差し伸べる骨っぽい掌ではなく、幼い女の子の頬からはみ出ることもない小さな手だった。
しかし、こうしていると年老いることのない機械であるのに関わらず、リニア自身がかつて生身の少女であり、頬に触れる掌の主と同じように成長してきたかのように思えた。
貴広はしばらくの間、リニアの頬を温めてベッドに横たえてから出ていった。
脚に銃撃を受けているのに、これからほとんど寝ずに作業をしなければならないらしい。
リニアは申し訳ない思いで、貴広の後ろ姿を見送った。

翌朝、ざわざわした気配で起きたリニアは、ヘリポートへと急ぐ人達がたくさん庭を歩いていくのを目撃した。
窓を開けると、何を話しているかは解らないが、人々の声が風に乗って聞こえてくる。
(みんな、行っちゃうんですね)
これで残務処理に残る人達以外は、貴広とおやじさん、リニアくらいしかいなくなってしまうはずだった。
限られた私物だけを持ち出すとしても、多くの人間が移動するとなると大騒ぎになってしまう。
時ならぬ賑わいを見せる人波を、リニアは黙って見送った。

人がいなくなってから、ほとんど歩けないリニアのメンテナンスはおやじさんが車椅子持参で迎えに来てくれるようになった。
リニアの体の部品を完全に直すことができる保証ができるまでは、リニアの体を消耗させることは厳禁だと説明を受けた。

「リニア嬢ちゃん、後で構わねえが部屋にカメラを付けさせちゃもらえねえか？　さすがに人手が足りねえんでな。何かあった時に駆けつけてやれるようにしたいんだよ」
　車椅子を押しながら、おやじさんが申し訳なさそうに訊いてきた。
「はい。よろしくお願いします」
　キイ、キイ
　耳障りな音をたてて、車椅子が動く。
　社宅の方にはもう、誰一人いなかった。
　貴広の自室は所長室にほど近い場所にあるし、おやじさんはここ最近メンテナンスルームで寝泊まりしているらしい。ここに住んでいるのは、もうリニアしかいないのだ。
　誰も通らないと思うと、美しい庭もどこか荒涼として見える。
「寂しくなりましたね、ここも」
「ああ、そうだなあ。うちのもヘリで避難させたからな……若いもんに頼んじゃおいたが」
　どうやらおやじさんは、おばさんだけを退避させ、自分は残ったらしい。
「……どうして」
　避難しなかったのか、と続けることができなかったが、おやじさんは笑ってみせる。
「手助けしてやりてえんだよ。最後までな。そう言ったら、うちのに言ったら『一人で逃げ帰ってきたら承知しないよ』ってケツを叩かれたな」
　おばさんらしいエピソードだった。
　リニアは何となくあたたかい気持ちになった。
「嬢ちゃんもちゃんと直ると信じて、体を大事にしてくれな。希望は捨てるんじゃないぞ」
「は、はい」
　リニアはこくりとうなずいた時、段差に差しかかって揺れる。
　がしゃん、と不協和音が響く……はずだった。
　奇妙に思う間もなく、少しバランスを崩したリニ

アは小さな声を漏らす。
「あっ」
しかし、その声は聞こえなかった。
おやじさんが慌てた様子でリニアの位置を直してくれる。
「……嬢ちゃ……丈夫か？　どこか痛めたか？」
おやじさんの言葉が、途中で無音になったり元通りになったりを繰り返す。
「リニア嬢ちゃん？」
「あ……」
心配げな顔になったおやじさんに、リニアは笑ってみせる。
「大丈夫です。ちょっと、ぼうっとしてました」
リニアがそう言うと、おやじさんは車椅子を押し始めた。
（さっきの……何だったんだろう）
さっき、わずかな間だったが、音が聞こえなかった時間があった。

多分気のせいだろうと思いながら、リニアはメンテナンスルームに運ばれていった。
あれだけ大がかりに部品を交換した後だけに、体自体の不調は出ていないらしい。
しかし、リニアの中にあるささやかな違和感は消し去られることはなかった。
実際には何ともないはずの体が、まるで部品交換したことなど嘘であるかのように衰えていく理由が解らない。
貴広が気遣ってくれるほど、おやじさんが必死でリニアの不調を解明しようとするほど、自分の体の衰えが不思議でならない。
何か大切なことを見落としているような気がした。
自分の体に起こっているのは、そもそも何なのか。
ひたすら考え続けるだけの力を、リニアはもう持っていない。

夢を見るたびに、少女の悲しみはより鮮明にリニアの心に映し出される。
ちっく、たっく、ちっく、たっく
機械音は少女を慰める。
しかし少女のすぐ側には、頬に触れてくれた人はいないのだ。
だからリニアは、窓を開け放つ。
彼女のした約束に結末を感じる為に。

「何度言わせたら気が済むのだ。体が冷えるぞ。しかし、空が本当に好きなんだな」
貴広にたしなめられた時、既に夜になっていた。
「はい、ずっとお部屋にいますからね。お空は窓からでも見えますから」
「なるほど」
「朝は空も森も紫で、そして……徐々に色を取り戻して、やがて夕方になって全てが赤く染まっていきます。そんな風景を見ていると、何もしないままに一日が終わっちゃいますよね」
実際にはそれで一日が終わるのではなく、消耗したリニアの体は長い間起きていることができなくなっているらしい。
だからこそ、空の移り変わりを眺めることだけが心の慰めだった。
「そんなことをやっていないで、できる限り休んだ方がいいぞ」
貴広はリニアの布団をかけ直してくれた。
リニアは窓の向こうを指さした。
「ほら、見てください。雲が光ってますよ。青くて白くて、眩しくて、綺麗で……素晴らしいですよね」
リニアは幸せそうに眼を細める。
漆黒に最も近い濃紺の中を、月に照らされた雲が輝きながら流されていく。
「雲が光っている訳じゃないがな。まるで雲自身が光っているみたいだな」
「ほわほわなのに、すごく涼しげに光っているみた

いですね」
淡く輝く雲が流れるのを見つめるリニアを、貴広はやさしい眼で見ていた。
しかし、唐突に貴広が口を開く。
「リニア、トイレには行ったか？」
「え？　ま、まだですが」
「寝る前に行っておけ。肩を貸してやるから」
どうやら脚が萎えてきたリニアの為に、寄ってくれたものらしい。
「あ、はい。すぐに用意いたします」
ベッドを降りようとするリニアの脚は、もはや力強く床を踏めるような状態ではなかった。
貴広に支えられて歩くのが精一杯だった。

貴広の肩につかまって、よろよろとリニアは歩く。
それすらも、かなり頑張らないと難しかった。
「一度ならず、二度も貴広さんと並んで歩けるなんて、リニア、嬉しいな……」
「馬鹿か」
貴広はリニアの肩に腕を回し、支えるというよりは抱えるようにして歩いていた。
貴広の腕を感じて、リニアは恥じらいに眼を伏せた。
廊下は既に消灯されていたが、大きな窓から月灯りが差し込んでとても明るい。
貴広の端正な顔が青白く輝くように見えた。
「少しは前を見ないと、こけるぞ」
「大丈夫ですよ。廊下に突起物はありま……」
言われている側からリニアはつまずいた。
ぼやきながら貴広はリニアの手首を掴む。その手が愛おしくて堪らなかった。
「危なっかしい奴だな」
リニアをちゃんと立たせてから離れていく貴広の手を、そっと掴んだ。
もう少しだけ、貴広のぬくもりが欲しかった。
「そんな申し訳なさそうな顔で、人の手を掴むな」

「はい……ごめんなさい」
寂しく思いながらも、リニアは手を離した。
貴広の手は突然、離れていこうとするリニアの手を取り、軽々と抱き上げた。
「わぁ！」
「今日だけだぞ」
手を握ったまま、貴広に抱かれて歩くと、視界が全く違う。
まるで空を飛んでいるようだとリニアは思った。
「今日だけでもいいですよ。それでもリニアには贅沢なぐらいですよ」
「馬鹿」
いつから貴広はこんなやさしい口調で『馬鹿』と言うようになったのだろう。
リニアは幸せを噛み締めていた。
「窓が大きいから、空がよく見えますね」
「ああ、そうだな」
「いつまでも、こうして空を見ていたいです」

しばらく貴広は考えていたが、やがてぽつりと呟く。
「丘に行ってみるか？」
「え？　いいのですか？」
「俺がこうして抱き上げてやれば、問題はないであろう」
一度トイレに寄ってから、貴広はリニアを抱いて社宅を出た。

煌々と照らされる夜の丘を、貴広は登っていく。
既に明るい月は灯台の方に隠れてしまっていたが、空には幾億の星が輝いていた。
弱き者にも、悲しき者にも、等しい祝福を与えながら輝いている。
「真夜中の空は無限の高さに感じるな」
貴広はリニアの手を握った手を天に向ける。
「でも夜空は黒く見えても、よく見てみると色々な色が混ざっていますよね」

「夜空は黒と相場が決まっているのだがな」
「決まってしまっているのですか」
「青に描いたらそれは昼の空だし、赤に描いたらそれは夕陽だ。紫ならそれは朝の空だ。そして今、俺達の前に広がる空は、黒色なんだ」
　貴広の眼が少年のようだとリニアは思った。
「でもな。あの空にはいろいろな星があって、よく見るといろいろな光がある。それが微妙に混じり合っている。夜空は一色ではない。たくさんの色がある。光がある」
「そこには昼の突き抜ける青空があって……真っ赤に染まる夕陽の空があって、すべてが紫に浮かび上がる朝の空だってあって……空が持つ全ての色が、そこにはあって」
「でも夜空は黒なんだ。夜空は一色ではない。だがそれを言い出したら、何が夜空だか誰も解らない。誰も解らなければ、誰とも夜空の美しさを分かち合うことができない。だから夜空は黒色になったのさ」
　貴広は低い声で語っていく。
「夜空は黒一色だ。こんな世界の最果ての島から見える夜空だから、いろいろな色が見える。が、夜空を黒だと思い込んでしまえば、そこからは多くの色は消える」
「はい」
「昼の色、朝の色、夕陽の色……それはあらゆる可能性だ。だが人は、そのあらゆる可能性の中から一つだけを選択しなければならない。全ての人が解るように、全ての人に空を解らせる為に、人は夜空からたくさんの色を消した」
「それを黒と呼ぶのですか？」
　貴広はうなずいた。
「そうだ。そうじゃなきゃ、人は会話すらまともに行えないからな」
　貴広の言葉を聞いて、リニアはやさしい気持ちになった。
「それはとっても素晴らしいことですよ」

「そうか?」
「貴広さんとリニアにとっての夜空の黒というのは、青色で、赤色で、紫色で、たくさんのたくさんの色が混ざっているのですから。確かに他の方から見える空が黒だけだったとしたら残念ですが、でも、少なくとも貴広さんとリニアには、そうではないのですよね? リニアと貴広さんが見ている空は同じかもしれないのですね」
貴広の腕に力が籠もる。
「もしかしたら、お前が見ている空をそのまま見ているのかもしれないな」
「はい」
リニアは自分の側にある、貴広の懐中時計に手を伸ばす。
「この時計か」
リニアが何かを言う前に、貴広は懐中時計を取り出した。
「この子が時を刻むのも、多分同じことなのだと思います。たくさんの、たくさんの……それこそ無限にある時を、時計はひとつに刻みます。ばらばらになって、遠く離れしまった時たちが出逢えるように。もし時が止まっていたとしても、それを望む人がいるのなら……また、時を刻み始めます」
夢物語なのかもしれない。しかし、リニアにはその考えがすんなり信じられた。
叶えられなかった約束を知っている、動かない時計は、いつか動き出す。
そうあれと願う者がいれば、いつか動き出す。
貴広の腕の中でいつの間にか眠っていたリニアは、知らない間に自分のベッドに戻されていた。
だからこそ、リニアが自分の中に起こる異変に気付いたのは、しばらく経ってからだった。

早朝。
リニアが起きたのは、その人物が音をたてたせいではなかった。

朝陽がその人物のシルエットで遮られたことで、何となく暗くなったように思えたからだ。
瞼を開けると、そこには霧島が立っていた。
唇が開き、何かを話している。
しかし寝ぼけているせいか、霧島の声は聞こえない。
ほんの一言二言だったはずだ。
その唇の動きが何となく『さようなら』だったように思ったが、再び瞼は重くなり、霧島の姿は見えなくなる。
そんな朝だった。

●●●

丘には少女だけが立っていた。
『貴広さん……』
少女は、この丘でずっと遊んだ少年に呼びかける。
ここにはいない少年に呼びかける。
『この丘で、もう……時計、渡せなくなっちゃったね。ごめんなさい』
時計に刻んでくれた約束は、もう叶えることができない。
叶える為に彼がやってきても、その頃にはもう少女は、命尽きた存在になっている。
一番叶えたかった約束だけが残される。
少女はただ、涙を流す以外にはできなかった。

●●●

これ以上ないほどの静寂が、リニアを我に返らせた。
窓から風の音を聴くどころか、自分の足音も、ベッドの軋む音も、何もかも聞こえなかった。
『嘘』
喉から声を発しているのは解るのに、自分の声も

聞こえない。
　多分、絶望の声を漏らしているはずの喉の痛みだけを、ひりひりと感じた。
　涙が溢れ、息が詰まる。
　どれだけ泣き続けていたのだろう。突然、肩に掌が置かれた感触でリニアは顔を上げた。
　心配そうな貴広が側に立っていた。
　こんなに近くに来るまで、大切な人が訪れたことにすら気付かなかったのだ。
　貴広の唇が動く。
　しかし、やはりリニアには何も聞こえなかった。異状を察して顔を強張らせ、貴広はリニアの肩を揺さぶった。
『ごめんなさい』
　聞こえないまま、謝罪の言葉を紡ぐ。
　貴広の口が大きく開閉した。どうやら大声をあげたらしいのが、胸の動きで解った。
『貴広さん……もう、リニアには、貴広さんの声が聞こえません……』
　貴広が眼を見開き、何事か言っている。
　しかしそれもリニアに通じていないのだと気付いたのか、一度肩を叩いて部屋を出ていった。
　ほどなく貴広はおやじさんを連れて戻った。
『ごめんなさい』
『ごめんなさい』
『ごめんなさい』
　沈痛な顔で話しかける貴広に、ただ謝るしかできなかった。
　おやじさんが何かを説明しているのだろうか。
　貴広は激しく首を振った。
　こんなに貴広を悲しませているのは自分なのだ。
　謝るだけしかできない自分が情けなかった。
『ごめんなさい』
　貴広がリニアの頬に触れる。
　泣いているようにすら思える表情を向け、切々と何かを訴えてくる。

「ごめん……なさい」
貴広はきつくリニアを抱きしめた。
時間を計るのに、どれほど音に左右されていたのか、無音になって初めてリニアは痛感した。
だからそれが長い間が過ぎた後なのか、それとも聞こえないことを貴広が知って間もない時間だったのか、全く解らない。
もしかしたら音だけでなく、ぬくもりすらも感じなくなっているのではないかと不安になり、リニアは手を貴広に差し出した。
貴広が何かを話す。
それからほどなく手を握ってくれた。
やはりそうだった。
握り返そうと力を込めるが、指を動かすことすらできない。それどころか、温度も何も感じなかった。
リニアは悲しげに笑う。
『さっきから一生懸命、貴広さんの手を握り返しているのに、ぴくりとも動かない。今までは、貴広さんの腕のぬくもりは感じられたのに、何も感じません。まるで自分の手じゃないみたい』
貴広がやさしく話しかけてくる。
その声は当然、聞こえない。
『何も感じられないんです。リニアには、もう貴広さんの手のぬくもりも。声も。とうとう、リニアから音すらなくなってしまいました。貴広さんが横にいてくれるのに、リニアには貴広さんの声を感じることができません』
天井を見上げる。
『何でだろう。皆さんにこんなにやさしくしていただけたのに、それを返すこともできずに、ただ、壊れていく……本当にリニアはでき損ないですね』
自分が情けなくて、頭がくらくらしそうだった。
『こんなに皆さんに迷惑をかけたあげく、勝手に壊れていく。本当に、どうしようもない……ですよね。リニアなんて……』

貴広の手がリニアの頬に触れるのが見える。
『何で神様は、リニアの願いなんて叶えてしまったのでしょうか。こんな役立たず、やっぱり人知れずに消えていけばよかったんですよ。そうすれば、貴広さんと隷さんが仲違いすることもなかったですし』
貴広がすぐ側で声のない叫びをあげる。
自分の声が震えていても、途切れかけても、リニアには決して解らない。
『もう、これ以上は贅沢ですよ。ここまでくれば、リニアがどうなるか一目瞭然です。だから……このまま、リニアから全てが奪い去られる前に、リニアの意識を消してください。全てを終わらせてください！』
貴広がリニアを抱きしめる。
そのわずかな圧迫感だけが、貴広の思いの全てを証明していた。
何も聞こえない。
何も解らない。
しかし、貴広が自分のことを案じ、愛してくれていることだけは染み入ってくる。
リニアは涙をこぼした。
泣いている自分の涙も感じない。
それでも、まるで子供のように泣きじゃくっていることと、その涙を受け止めてくれる人がいることを感じながら、リニアは涙を流した。
そして、そのまま貴広の温度を感じることができないまま、眠りに就く。

●　●　●

隷は第２５６３号島から本社に辿り着いた霧島香織から『神崎貴広の許から逃げてきた』ことについての報告を受けた後、自分の部屋に戻った。
リニアを修理する為にか、ＬＡＢの中でも群を抜いて有能だった前歴を持つ整備班長が残っていると

いう話を聞き、一人になった時に思わず安堵の息をついた。
ジーザス・アンド・メリーチェインまで、もう間がなかった。リニア自身が『約束』を思い出し、貴広に思い出させることができるかどうかは、時間との勝負になるだろう。
もしそれが叶わなかった場合、人ではない力を持っているNURSERY CRYMEであるとは言え、力を失った貴広は、NURSERY CRYMEと同じ力を得た隷と対等に戦うことすらできず、無惨に死んでいくことになる。
(あの時計は、本当に……再び時を刻むのかな)
隷は眼を伏せ、貴広に渡した時計のことを考えた。
かつて時計を渡したNURSERY CRYMEである少年は、丘で出逢った少女のことを忘れ、凄惨な訓練を受けてPIXIESのトップに君臨した。
時計は止まり、貴広もまた時計のことを忘れた。
あの時計が再び時を刻むのなら、今まで温めていた隷の願いは叶うことになるだろう。
隷はそこにいないリニアに向かって語りかける。
「リニア……思い出したかい? 君の中にある、約束を交わした少女、庵原千歳の思い出を」
リニアにそれを思い出させる為に、隷は一番痛ましい方法を取らざるを得なかったのだ。そのことに何の罪悪感もなかった。
ただ、二人に逢いたかった。
彼らに逢う時こそが最後の時間なのを、嫌というほど知っていたけれど、それでも逢いたかった。

●●●

何も見えず、何も聞こえず、何も感じない。
カプセルの中でただ、眠りに就いていることしかできないはずのリニアは、突然、瞼を開けた。
『私……私は』

ちっく、たっく、ちっく、たっく
あの時計が呼んでいる。
行かなければならない場所がある。
果たさなければならない約束がある。
あの時、交わした約束を守る為に、庵原千歳という少女の思いを紡ぐ為に、自分は生み出されたのだから。
リニアは瞼を開ける。
本来中から開けることのできないカプセルから出てきたリニアは、まるで夢を見ていたままのように歩き出した。

（呼んでる）
メンテナンスルームから出たところで、ちょうど入ってこようとした貴広と鉢合わせた。
「リニア！」
「貴広さん……」
貴広はしばらく茫然とリニアを見つめていたが、やがて仕方ないなというように苦笑が浮かぶ。
「お前、勝手にカプセルから出てきたんだな」
「ごめんなさい」
「……普通のアンドロイドなら、カプセルの中からなんて目醒められないのに、お前は……何故……」
「時計が動きました。時をまた刻んでくれたのです。だから」
リニアの眼から涙がこぼれる。
その涙はリニア自身のものなのか、庵原千歳のものなのか、区別はつかなかった。
「やっと逢えたのですね。でも知らない間に、だいぶお世話になったみたいです。あれからどのくらいたったのでしょう……多分、もう遠くなってしまったのでしょうね」
「千歳……？」
「あの約束、貴広さんも憶えてませんよね。それでも、また貴広さんに逢えたのだから……いいんです」
「お前……お前の中に、あの時の思いがある限り、

何度でも目覚めてきそうだな。馬鹿野郎……」
貴広はリニアを抱きしめる。
リニアは貴広の口から千歳の名前が出たことに驚いていた。
「馬鹿……千歳の時に果たせなかったからって、リニアになってまで……お前ってやつは……」
リニアの頬を貴広の涙が濡らす。
初めて見た泣き顔に、リニアは不思議な気持ちを感じていた。
思い出してくれたこと。大好きでいてくれること。何もかもがごちゃ混ぜになって、リニアの中を満たしていった。
「そんなに捕まえなくても千歳は……リニアは……どこにも行きませんよ。だから、貴広さん……泣かないでください。やっとお逢いできたのですから」
ただ悲しいのとは違う涙が溢れてくる。
「何故、こんなところまで……俺なんかに逢いに来たんだよ。お前のことを忘れてしまっているような奴なんかにさ」
「だって、貴広さんとの約束が果たせなかったじゃないですか。それだけが心残りでしたから。でも……、その時計……貴広さんに返すことができましたね。こんなに古いのに、この時計はまだ動いていたのですね」
それ自体が奇跡のようだった。
「この時計が動けばまた逢えるって言っていたじゃないか」
リニアよりも古い時間を経てきた小さな時計に、心の底から感謝していた。
「でも、よかった……最後の約束を守れて。これで私は本当に眠ることができます」
貴広は眩しそうな、悲しそうな眼でリニアを見つめていると、懐中時計を握らせた。
「リニア、これを受け取ってくれ。また二人が出逢えるように、もう一度約束しよう。だから、これは永久の別れなんかじゃない。新しい約束だ。俺はお

前をもう一度元気にしてみせる。また俺と同じ時を過ごせるように……だから、リニア」
差し出された時計は、何を渡されるよりも嬉しく、幸せにしてくれた。
「はい」
頬を染めて時計を受け取ると、リニアは耳を当てた。過去の記憶の中にしかなかったはずの『ちっく、たっく』という音は、すぐ側から聞こえる。
「時計……ちゃんと動いてますね」
「ああ。二人の時間が戻ったのだから、時計はまた時間を刻むさ。だから……もう一度逢おう。今度こそ絶対に逢えるから」
真剣な貴広の眼を見つめて、リニアはこくりとうなずいた。
そして、貴広に連れられてメンテナンスルームに戻り、カプセルに入ると、もう一度瞼を閉じた。
時を刻む音は、リニアの側でやさしく響いていた。

●●●

白い花に埋もれたリニアは、今にも動きを停止しようとしている。
隷の差し伸べた手を、不思議そうに見上げていた。
『君は……庵原千歳だね』
こくりとうなずくリニア。
『あなた、は』
『RAY001』
そう名乗ってから、隷は気恥ずかしそうに首を振った。
「いや、庵原隷と呼んでくれればいいよ」
『隷……さん?』
笑顔を向けるリニアが崩れようとするのを、隷は抱きとめた。そのまま意識を失おうとするリニアに、隷は小声で囁く。
『君を、助けてあげる。君が抱いている約束、思い、みんな……貴広に届けてあげるよ」

僕自身であり、母であり、姉である人。
その呼びかけは、意識を失ったリニアの耳をすり抜けて、風に紛れて消えていこうとしていた。

●●●

第六層と呼ばれている最深部に、リニアを収納したカプセルは安置されていた。
その中で音も聴かず、何も見ず、感じずに、リニアは眠っている……はずだった。
固く閉じられた瞼が、突然開く。
『……!』
彼女の意志に呼応するかのように、カプセルはおのずから開いた。よろよろと這い出るリニアは、強張った顔を天井に向けていた。
風がごうごうと鳴る。
リニアはその音を聴いていた。
(これは、隷さんの聴いている風……)
どうして感じられるのか解らないが、この風を聴いているのが隷であると、リニアは感じていた。
ジーザス・アンド・メリーチェイン。リニアが眠っている間に、その日が訪れていたのだ。
だとしたら、隷が訪れる理由などひとつしかない。
『約束』
庵原千歳と貴広との間で温められた思いを成就する為に、隷はやってきたのだ。
『RAY0001』と名乗った隷の正体を、リニアは思い出していた。
貴広に逢いたいと願ったまま死んだ庵原千歳の意識は、リニアの中にある。
自分を作った人は千歳の意識を基にして、他にもアンドロイドを作っていたのだと考えるのは不自然ではないだろう。
その中には、リニアよりずっと優れた個体もいたのかもしれない。千歳の思いを温めながら、記憶を継続し、あの懐中時計を保管し、約束が叶えられる

為に努力し続けた存在がいたのかもしれない。
　それが『ＲＡＹ』……隷なのではないか。
（だとしたら戦いなんてしちゃ駄目です。隷さん！）
　リニアは慌ててカプセルの安置されていた部屋を出た。
「あ……っ！」
　今まで無音に近かったのが、扉を開けるといきなり騒がしくなった。銃撃や爆音があちこちから響いてくる。
「な、何でっ」
　隷はこの島に総攻撃をかけてきたのだ。
　貴広一人を殺す為に。
　本来なら、誰よりも愛しい人を殺す為に。
「隷さん、駄目です！」
　リニアは駆け出していた。

　その場にリニアが立つことができた時、体中がぼろぼろになっていた。

　周囲もまた、今まで居心地のよい島だったとは思えないようなクレーターもどきや、爆風で吹き飛ばされた跡があちこちに見られた。
　そこに見える、二人の人影。
　傷だらけで、右腕を落とされ漆黒の影のようなものに串刺しにされている貴広と、スーツすら乱れていない隷だった。
「貴広さん！」
「リニア……そんな体で、どうして」
「前にも言ったはずです。私は貴広さんを守ると。隷さん、貴広さんを返して下さい！」
「返す？　返すも何も貴広は死んだよ」
　悲しそうに微笑む隷に、リニアはだだをこねる子供のように激しく首を振った。
「返して……返してください、貴広さんを!!」
　こんな行為を見たくはなかった。
　貴広を殺してしまう隷など、見たくはなかった。
「何であなたまで、私から貴広さんを奪おうとする

のですか。だって、あなたは私の心を知っているではありませんか……私の心の全ては、あなたの中にあるのに。なのに何故……あなたは……」
「逆だよ、リニア。僕の中にリニアの心があるから、僕は貴広を殺したんだよ」
隷は悲しそうに微笑んでいる。
「君が貴広と好きだという思いは、そのまま僕の中にある。君がどれほどの辛さの中で貴広を愛していたか、僕が一番知っている。でもそれと同じように僕はリニアを最も苦しめているものを知っている。だから……僕はそれを消した」
「嘘つき」
自分の思いを隠して、微笑み続ける隷が悲しかった。
「私は……隷さん、あなたを許しません」
二人は奇妙な気配に気が付いて、貴広の方を見た。
貴広の周囲の空気が、どんどん濃度を増していく。
光を遮って、向こう側に何も見えなくなるほど、黒く、暝く、凝り固まっていく。まるで、貴広を串刺しにしていた漆黒と同じものが生成されていくかのようだった。
「とうとう、帰ってきたのだな。NURSERY CRYME」
到底動くことのできないはずの傷も、斬り落とされた腕も、全てが元通りになっていた。
その眼は、まるでリニアが知っているやさしい貴広とは違う、驚異的な力を持つものだけが得られる、神々しさすら感じられる眼だった。
「隷……リニアに手を出すことだけは許さない。お前がそうするなら、俺は……NURSERY CRYMEの力をお前に使う。全てを、終わらせる為に」
「それはどう……かな」
「隷さん!?」
隷の片腕が突然灰になったかのように崩れ落ちた。
「もう、時間か」

力なく、隷が微笑んだ。
「僕の体ではNURSERY　CRYMEの力を宿し続けるだけの力がない。所詮、人工的に作ったものでは、これが限界だ」
隷の体から、漆黒が抜け去っていく。そこから白く変色し、さらさらと崩れていく。
リニアは隷の姿を見て叫んでいた。
「貴広さん、やめてください！　もう、隷さんは戦えるような状態ではありませんっ」
リニアも隷も『約束』を胸に温めて夢を見ていたのは同じなのに、何故幸せな思いの源となっている『約束』の為に殺し合わねばならないのだろう。
「やめてください……もう、こんなこと。何で二人が戦わなければいけないのですか」
リニアの泣き顔を、貴広はしばらく見つめていた。
やがて、隷の方に向き直る。
「最後に訊きたい。何故お前は、NURSERY　CRYMEの力を手に入れようとしたんだ」
「さあ、何故だろうな。やはり、貴広に復讐する為ではなかったのかな。僕を置いて、遠くに行ってしまった君に……」
「そんなの嘘です！　もうそんな嘘をつくのはやめてくださいっ」
胸に秘めた思いを、知らん顔して死んでいこうとするのか。そう思うと耐えられなかった。
「嘘ですよ。隷さんが私を守る為に貴広さんを殺そうとしているなんて、全くの嘘ですよ。だって、少し考えれば解るじゃないですか……隷さんが本当に好きなのが誰なのかぐらい。私の心をそのまま受け継いだ隷さんが……好きな人なんて一人しかいないじゃないですか」
「リニア？」
リニアは泣きながら貴広に訴える。
「隷さんは……彼女は、貴広さんのことが好きだったんですよ。だって、私から生まれたんですもの。そんな彼女が貴広さんのことを、嫌いな訳ないじゃ

ないですか」
「彼女?」
初めて貴広の眼に驚きが宿る。
「貴広さん、隷さんを男性だと思っていたのですね。そんな訳ないじゃないですか。隷さんの心は、私の心をシミュレートして生み出されたのです。その心から男の人なんて作れる訳ないじゃないですか。隷さんの中にあるのも私の心。庵原千歳の心です」
貴広は戸惑った視線を隷に向ける。
「リニア、君はひどいね。こんな場面で、最後にそんなことを言ってしまうなんて」
「隷さん……あなた馬鹿です。隷さんが貴広さんと一緒になる為には、もっと違った方法があったはずなのに、何で私なんかをここに送ったのですか。私をあのまま見殺しにしていれば、こんなことにならなかったのに……」
悲しげに責めるリニアに、隷は笑う。
「そうだね。でもね……リニアは嘘だと言うけど、僕がリニアを好きだって心もまた嘘ではないんだよ。僕は、君の言う通り貴広が好きだ。でも、それと同じように、リニアのことも好きなんだよ」
「隷さん……」
「ぼろぼろになった君を発見した時、僕は嬉しかったよ。だって、もしかしたら……もしかしたらさ、僕の大好きなリニアと大好きな貴広と、暮らせるかもしれないと思ったから。だから僕は……僕はね、こうしたんだ」
隷は自分の胸に手を置いた。
「貴広、僕は君に追いつきたかった。僕の中に眠る千歳の記憶。僕は、あの時君の場所に行きたくても行くことができなかった。あの丘に歩いていくことすらできなかった。だから今度は、君がどこに行ってしまって追いつける力が欲しかった……君がどんな遠くにいっても、追いつける力が。だから、僕には君と同じ力が必要だったんだよ」
隷の体から、さらさらという音が響くたび、リニ

アは息を呑んだ。
「馬鹿だよね、そんなの。でも僕は、それほど器用な生き方ができないんだよ。でも、哀れみなんていらないよ。これは僕が選んだことなんだから。これが、僕の選んだ答えなのだから……」
隷の体は白く、白く変わっていく。
「僕の体は、あと少しで消滅する。だから、最後ぐらいは、貴広に全力でぶつかりたいんだ。このまま、僕を、千歳としてでなく、隷として扱ってくれ。そうじゃないと……僕は悲しすぎるよ……」
大好きな人を待ち続けたリニア。
大好きな人を追いかけたかった隷。
どちらの思いも同じなのに、二人の道はこれ以上ないほど隔たってしまった。
隷の言葉に、貴広はうなずくと瞼を閉じた。
空から一切の光が消えた。
光を拒絶し、世界全てが闇の中で眠っているかのように、時が凍り付く。
「リニア、さよならだよ。君に出逢えてよかったよ。そして、僕の大好きな人……」
圧倒的な漆黒に対して、隷の中にわずかに残った黒の残滓が最後の攻撃をかける。
その瞬間。
隷から一切の漆黒は消えた。
真っ白に変じた隷は、それでも笑顔を作る。その表情の美しさを、リニアはどこかで見た憶えがあった。
隷の形をした灰は、貴広の腕の中でざあっと音をたてて崩れ落ちる。
それが、隷の最期だった。
隷を失ったカンパニーの兵士達は、それでも貴広やリニアに苛烈な攻撃を続けていた。
無理してNURSERY　CRYMEの力を使っていた貴広は、その力を使えなくなると再び傷だら

けの体に戻ってしまった。
　全身の痛みを堪えながら、おやじさんと無線で連絡を取っていた貴広が、リニアに沈痛な顔で告げる。
「リニア、一人で逃げろ」
　それはあまりにも悲しい命令だった。
「見ての通り俺は片足と片腕を失っている。それにこの傷だ。一人でヘリポートまでなど、とてもじゃないが行けないだろう。お前一人で逃げろ」
　もしそんなことができるようなら、その程度の思いしかないのなら、ここまで来てなどいない。
　諦める機会は何度でもあったのだ。
「馬鹿！」
　リニアは大声を出すと、貴広を担ぎ上げた。
　まともに使える余力のなかった戦闘モードを全開にして、襲いかかる敵の間を駆け抜ける。
（隷さん……貴広さんを助けさせて……！）
　もし叶うのなら、今だけ隷の力の何十分の一でも発揮したかった。

　体の中で不協和音が響く。
　ガキッ、ガキッ
　そんな音が鳴るたびに、リニアの体はどんどん終わりに近付いていく。
　戦闘の為に作られていないリニアは、ほどよいスピードで駆けることはできない。異常なほど速い動きに、多くの戦闘アンドロイドは全く反応することができなかった。
「何やってんだ！　遅いぞっ！」
　ヘリポートでは今にも飛び立てるように、おやじさんがヘリコプターに乗り込んで待っていた。
　階段を駆け上がり、ヘリコプターに乗ろうとした時、ヘリポート内に異変が起こった。
　ものすごい音と共に、ヘリポート内が暗くなっていく。ハッチのコントローラーのところにいるアンドロイドが、ハッチを閉めているのだ。
　刻々と狭くなっていくハッチは、既にヘリコプターが通り抜けられる広さではなくなっていた。

ここで何とかできるのは、貴広を助けられるのは自分一人だけだった。
リニアはヘリコプターから飛び降り、ハッチに向かって全速で駆け出していた。
思ってもみない速さで迫ってくるリニアに驚いているアンドロイドを、一撃で倒す。
「ごめん」
初めて誰かを殺した苦しみに浸っている余裕すらなかった。
リニアはハッチのスイッチを入れた瞬間、自分の袖から煙が出ているのに気が付いた。
「おじさま、急いで！　ハッチが開きますから」
口を開いた時にも、自分の口から煙が出ているのを発見した。
服がぱりぱりに乾燥していく。
（私……もう、駄目なんだ）
ハッチがもう一度開き、ヘリコプターが浮上し始める。今乗らなければ、もうリニアはここから助かることはできないだろう。
「リニア、早く飛び乗れ！」
手を差し伸べる貴広を、リニアは黙って見上げるしかできなかった。
一瞬にして、アンドロイド達がリニアに襲いかかり、視界からヘリコプターが消えた。
殴打され、貫かれ、破壊される。
遠くから貴広の悲痛な叫びだけが響く。
（私、このまま……）
死んでいくのだろうか。
そう思いながら眼を閉じようとしたリニアを、漆黒が貫いた。
そして、空に放り出される。
「あ……」
「リニア、手を差し出せえっ!!」
遠ざかっていく。
大好きな人が悲痛な声で泣き叫んでいる。
今にも墜落し、機能を停止しようとしていたリニ

アを正気づけたのは、貴広の叫びだった。
「貴広さん……」
体中の部品がかなりなくなっていた。意識すら消えてしまいそうだった。
おやじさんが『隣の島に不時着する』と言った言葉だけが、何となく耳に残っていた。

雪が降っていた。
あの日と同じように、雪が降り積もっていた。
あの時と違い、リニアの体は半分以上なくなっているし、貴広もまた、満身創痍だった。
あの時の約束は叶えられたのだ。
もう一度貴広に逢えた。そして、こんなに愛してもらった。
それだけで、心残りはなかった。
なのに。
「約束したじゃないか！　お前を元気にしてみせるって……今度こそ、一緒にいられるようにしてやるってさ。なのに、お前は、勝手に……！」
どうして貴広はこんなに悲しそうに泣くのだろう。
心残りなどなかったはずなのに。
もっとこの人と一緒に過ごしていたいと、いつまでもいつまでも側にいたいと願ってしまいそうになる。
「大丈夫ですよ。リニアがいなくなっても……それでも、私の心はここにあります。好きだという心は変わりませんよ」
貴広の腕がきつく自分をかき抱く。
その感触すら、もう届かない。
だから今のうちに言わなければならないのだ。
「好きだという心……私の好きという心は、貴広さんの中にあるのですから……ね。それはリニアでも千歳でもなく、貴広さんの中にあるのですからね。だから、やっぱり……感謝しなければいけませんね……神様に、ありがとうって……」

培われてきた思い出の数々が、リニアの中にある。
部品が壊れて体がなくなっても、思い出だけは残されている。
動かなかった時計が秘めていた思い出のように、リニアのパーツのひとつひとつが、貴広を憶えている。

もう一度逢いたい。
もう一度逢いたい。
どんな形でも、時を経ても、この思いは伝わったのだから。
これが終わりではないのだと知っているのだから。
貴広の中に自分の思いは残っているのだから。
風に吹かれて雪が舞う。
いつか再び貴広に出逢う日にも、この雪を思い出すだろう。

その記憶自体が失われていても、誰よりも愛し、愛された思いを、リニアは決して忘れないだろう。
そう思いながら、リニアは瞼を閉じた。

——終——

あとがき

こんばんは、館山緑です。

この小説はケロQさんの三作目『モエかん』のノベライズです。南の島に移築された古びたお城を改装した訓練所を舞台として、可愛くてガワ心をそそるピナフォアドレスのメイドさん達との生活から始まる物語です。

その中のヒロイン、世間知らずなところがあるけど純情で、ひたむきなリニアちゃんを主人公とした小説になります。

ゲームをプレイして『モエかん』を好きでいる人達や、リニアちゃんを大好きでいる人達に少しでもいいな、と思ってもらえれば嬉しいです。もしかしたら、近いうちに発売される移植版をプレイして『モエかん』を知ったコンシューマゲームのユーザーさんもいらっしゃるかもしれませんね。

リニアちゃんはいろいろ失敗ばかりしていますが、おいしいお茶をいれてくれたり、庭の手入れをこまめにしていたり、側にいるとやさしい気持ちになれそうな子です。

ワタシもお茶好きなので『仕事中にお茶いれてくれないかなあ』などと無精なことを考えたりします。この本のサンプルが届いたら、ゆったりとお茶をいれてなごみながら読み

たいと思います。
でも、きんと冷えたアイスティをいれるのが下手くそなので、それまでに涼しくなっているといいなあと希望的観測を抱いています。

古城を改装した邸宅で過ごすというのも、個人的にはすごく憧れます。何だかお化けが出そうではありますが、一度は体験してみたいです。手近にあるサンモン・マーズデンの写真集あたりを見ていると、お城で過ごしてみたいなあと思います。(でも、あの人の写真は、どれもお化けが出そうな写真ですね)

また、どこかで逢えるといいですね。
それでは、また。

白粉花の香る夜　九月

館山　緑

■ハート♡ノベルズ
モエかんーリニア編ー

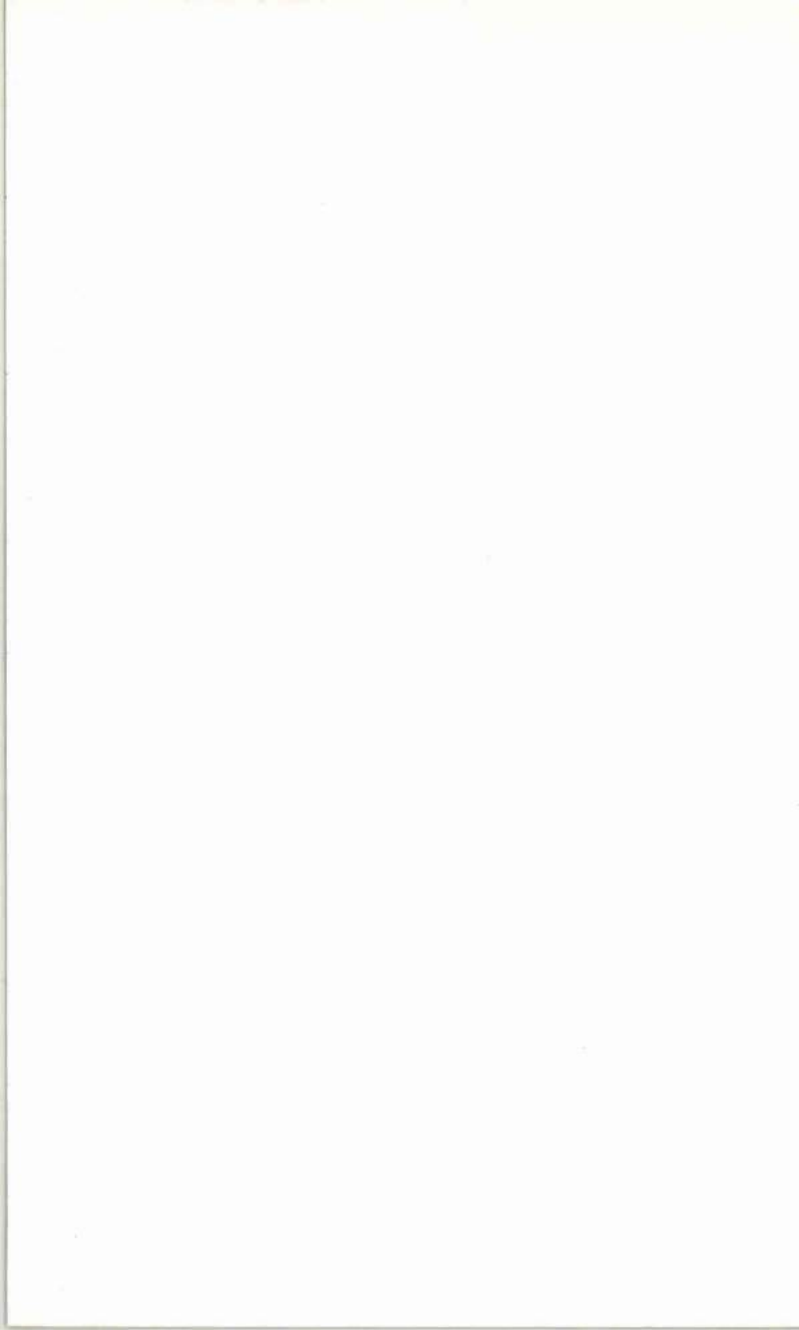
原作　ケロQ
著者　館山 緑
挿絵　無私天使

デザイン　ISM（武田崇廣・細井威之）

発行人　北脇信夫
編集人　大久保光志

発行所　株式会社　宙（おおぞら）出版
〒162-8611
東京都新宿区早稲田鶴巻町543
03-5228-4055（編集）
03-5228-4060（販売）
03-5228-4052（資材製作）
http://www.ohzora.co.jp

出力・製版　オノ・エーワン
印刷・製本　図書印刷株式会社

ISBN4-87287-897-3

「宙出版ビジュアルコレクションブック&スタートアップブックシリーズ」

カラフルMOON月姫
月姫パーフェクトファンブック
本体2,500円＋税

月光に濡れる教室で、僕は。
公式ビジュアルコレクションブック
本体2,500円＋税

ALMA～ずっとそばに…～
公式ビジュアルコレクションブック
本体2,600円＋税

LOVERS～恋に落ちたら…～
公式スタートアップブック
本体1,200円＋税

「月姫」の世界に浸る全6編の物語

HEART NOVELS
月姫ストーリー
本体950円＋税

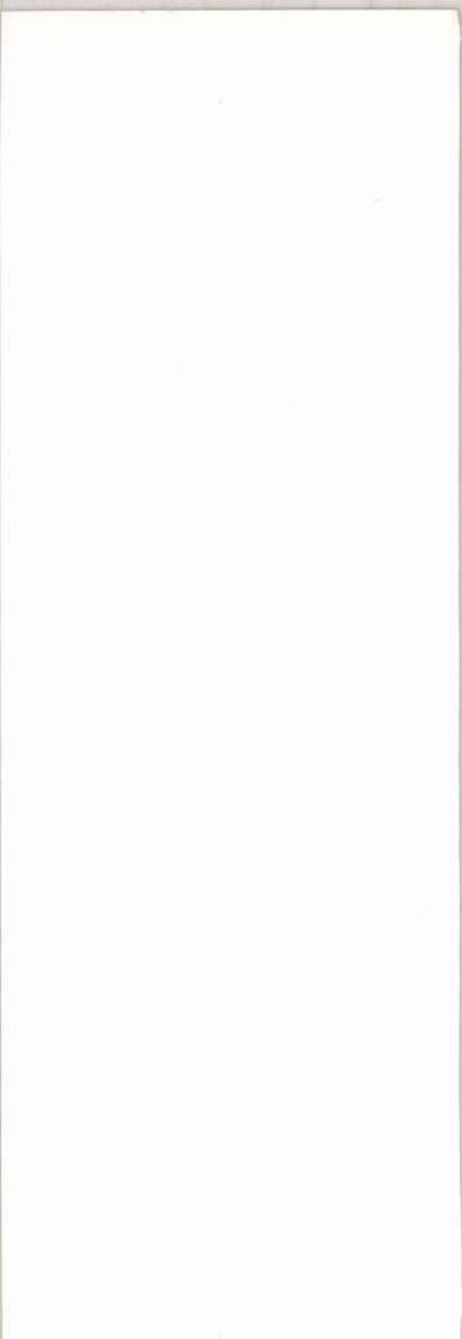
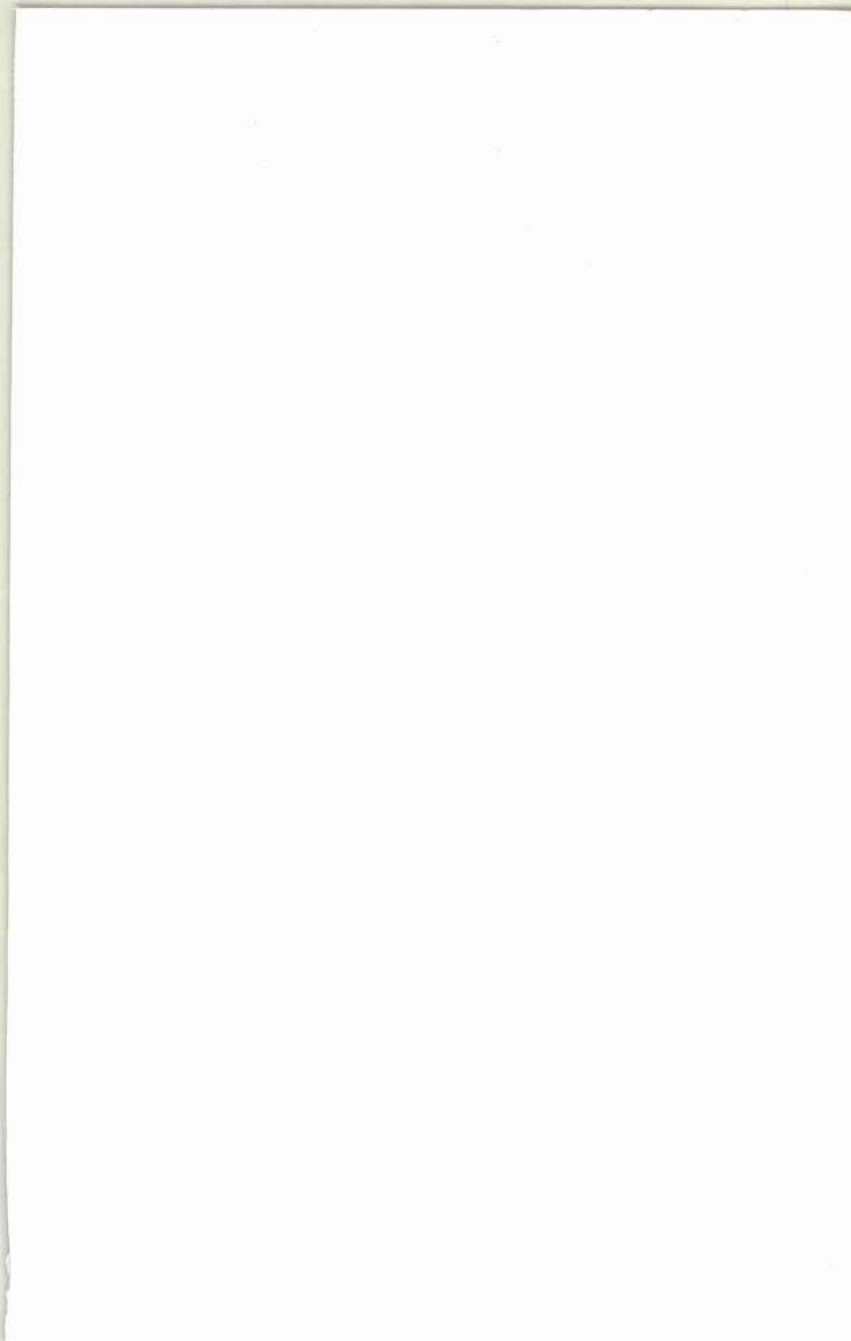
さよならエトランジュ
スタートアップブック
本体1,000円＋税

ヤミと帽子と本の旅人
スタートアップブック
本体1,000円＋税

モルダヴァイト
スタートアップブック
本体1,000円＋税

ONE2～永遠の約束～
公式ビジュアルコレクションブック
本体2,300円＋税

月光に濡れる教室で、僕は。
プレミアムファンブック
本体1,200円＋税

モエかん～リニア編
2003年10月25日 初版第1刷発行

9784872878974

1920293008578

ISBN4-87287-897-3

C0293 ¥857E

定価：本体857円+税

あらゆるネットワークから隔離された最果ての訓練所がある島、その名も萌えっ娘島。

この地に再訓練のため連れてこられた少女型アンドロイドのリニアは、旧型ゆえに体機能やメモリにダメージを受けており、失敗を重ねながらも必死に育成プログラムをこなそうとする。訓練所所長の神崎貴広はそんなリニアを苦々しく見つめていたが、彼女の明るさと真っ直ぐな姿に、次第に心動かされていく。しかし、リニアを萌えっ娘島に連れてきた本部監査室の隷、商品管理部監査室の飯島には、リニア、貴広に絡む密命が下されていたのだった…。

宙出版